（財）大阪府文化財センター調査報告書　第131集

寝屋川市

太秦遺跡・太秦古墳群　大尾遺跡　高宮遺跡

一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(財)大阪府文化財センター
蔵書
第　号

財団法人　大阪府文化財センター

1. 遺跡周辺航空写真

この写真は国土地理院撮影の空中写真を使用しました。
（平成11年撮影CKK－99－1X C3－7）

1. 大尾遺跡周辺航空写真（北西から）

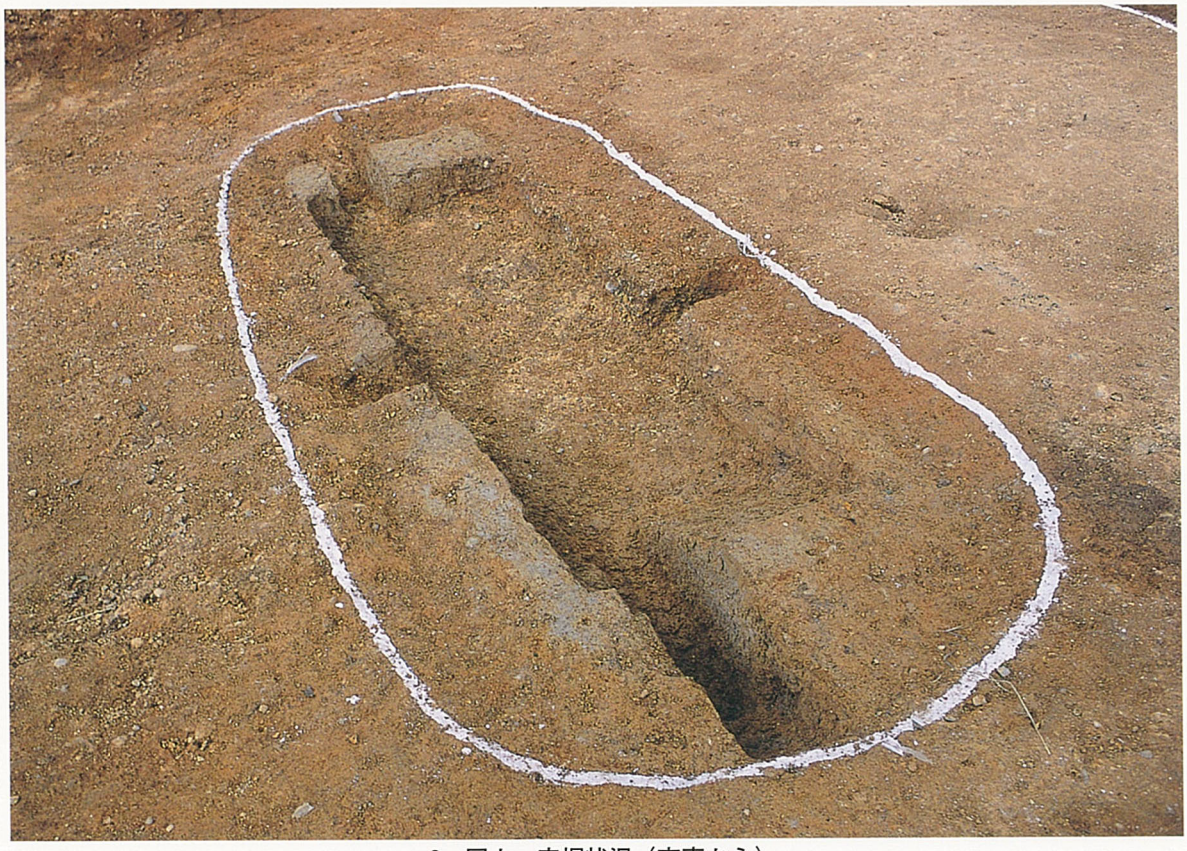
2. 同上（南から）

1. 大尾遺跡から摂津山系遠望（南東から）

2. 大阪湾・淡路島方面遠望（北から）

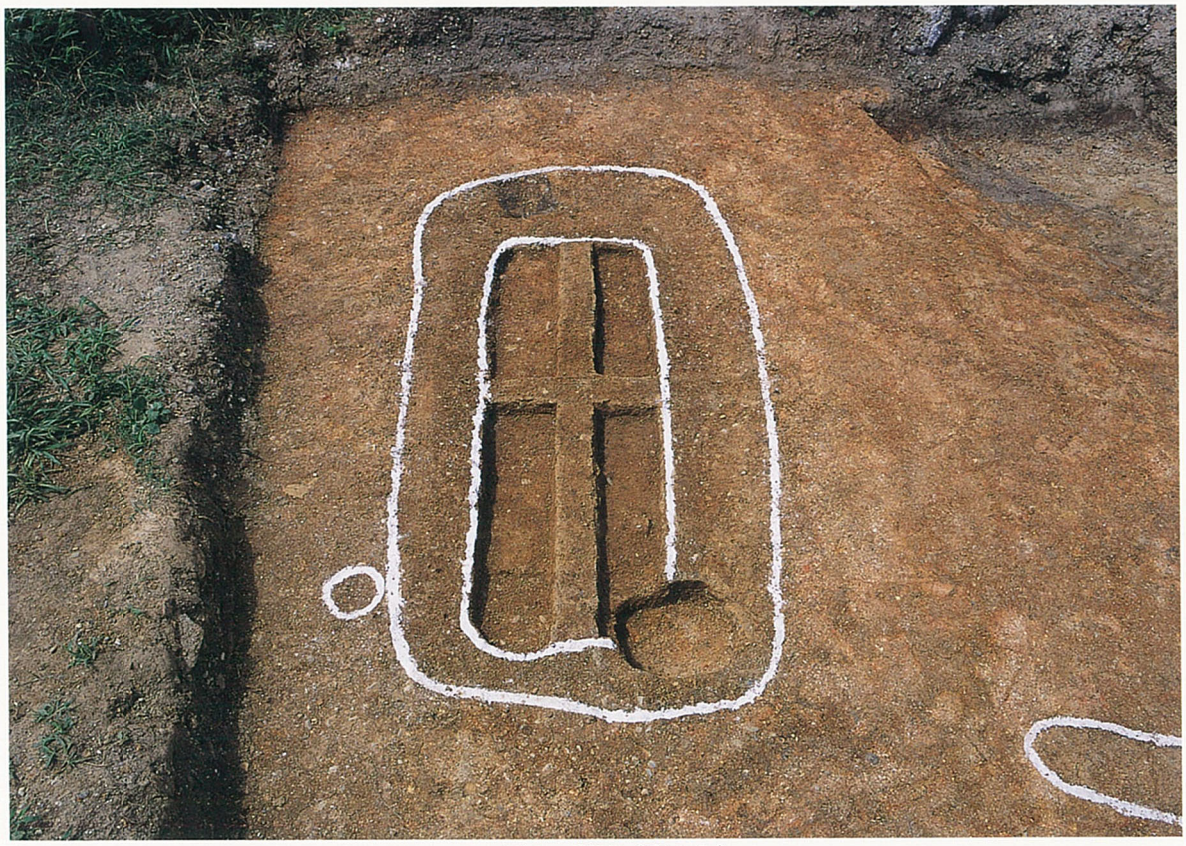
巻頭図版４

1. 大尾遺跡１区　墓壙１検出状況（南から）



2. 同上　完掘状況（南東から）

1. 大尾遺跡 4 区　墓壙 8 検出状況（西から）

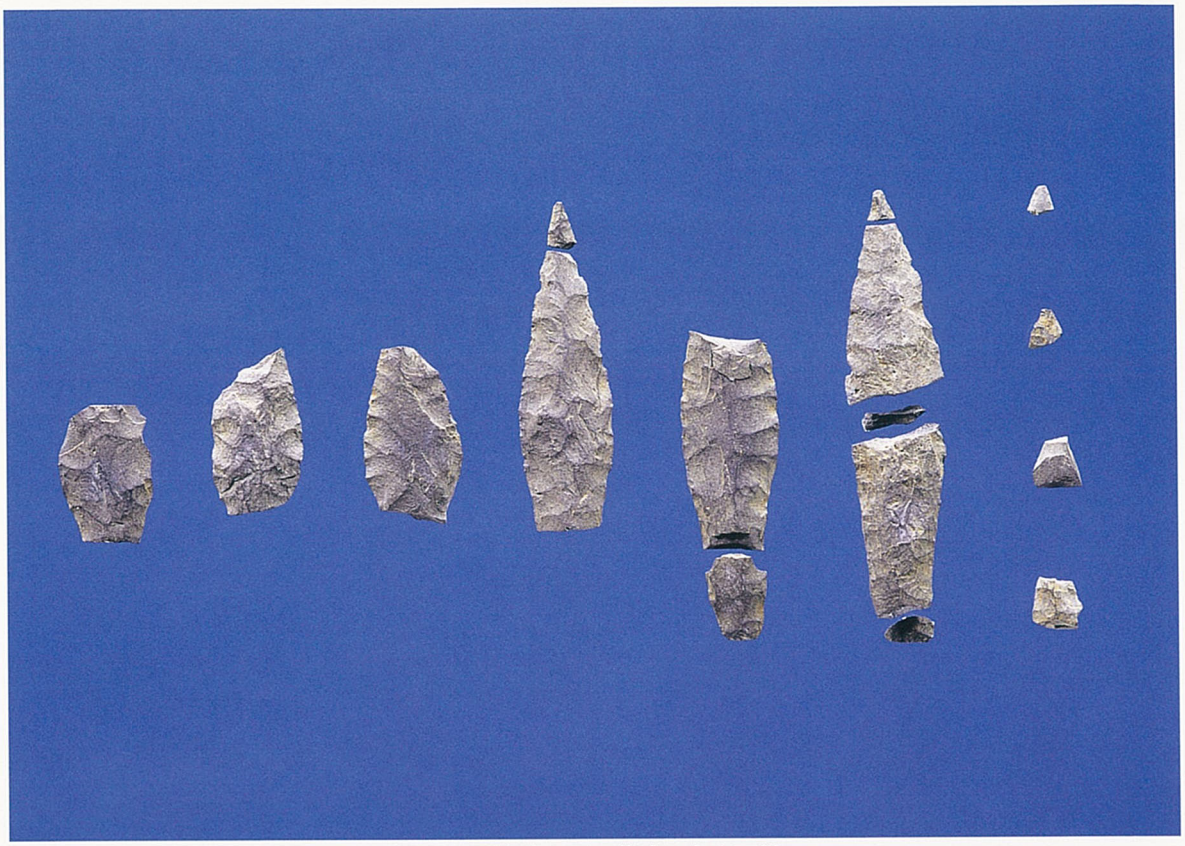


2. 同上　断面（東から）

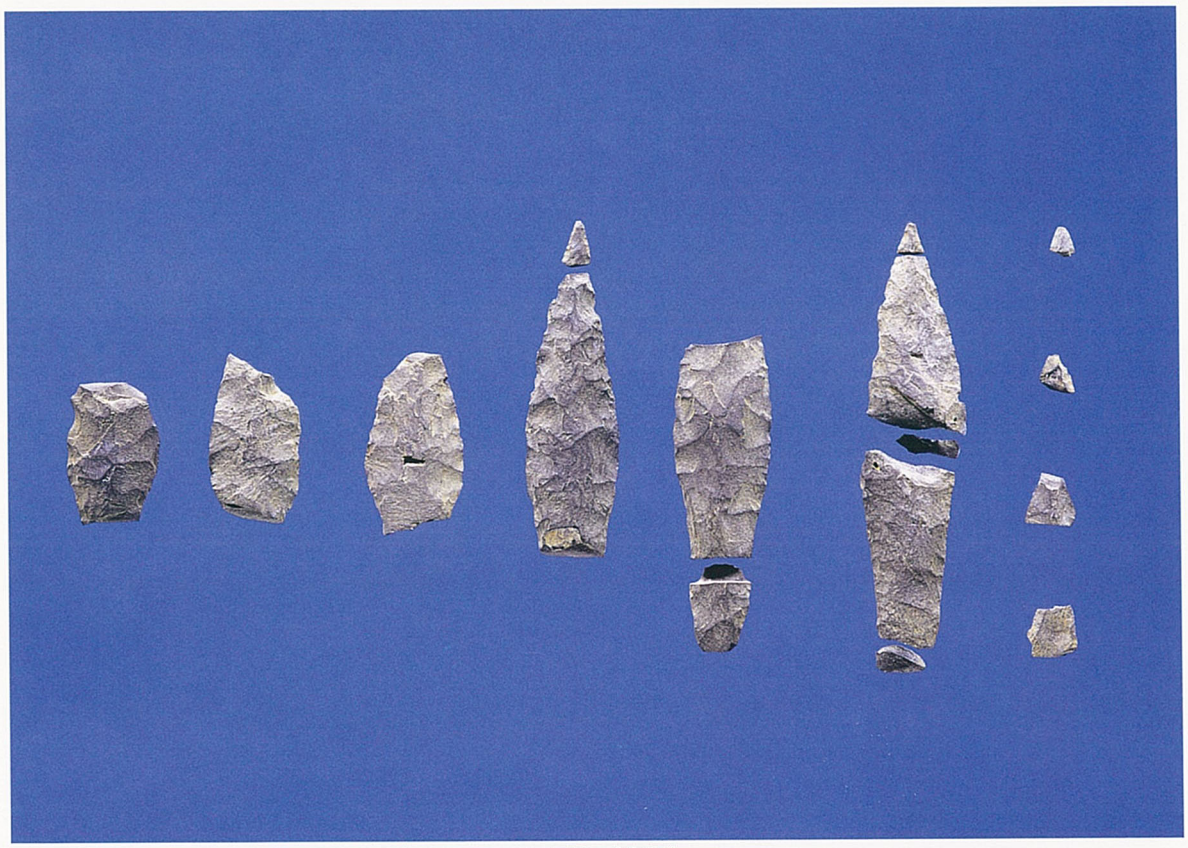
巻頭図版 6

1. 大尾遺跡 4 区　墓壙 8 石鏃出土状況（南から）

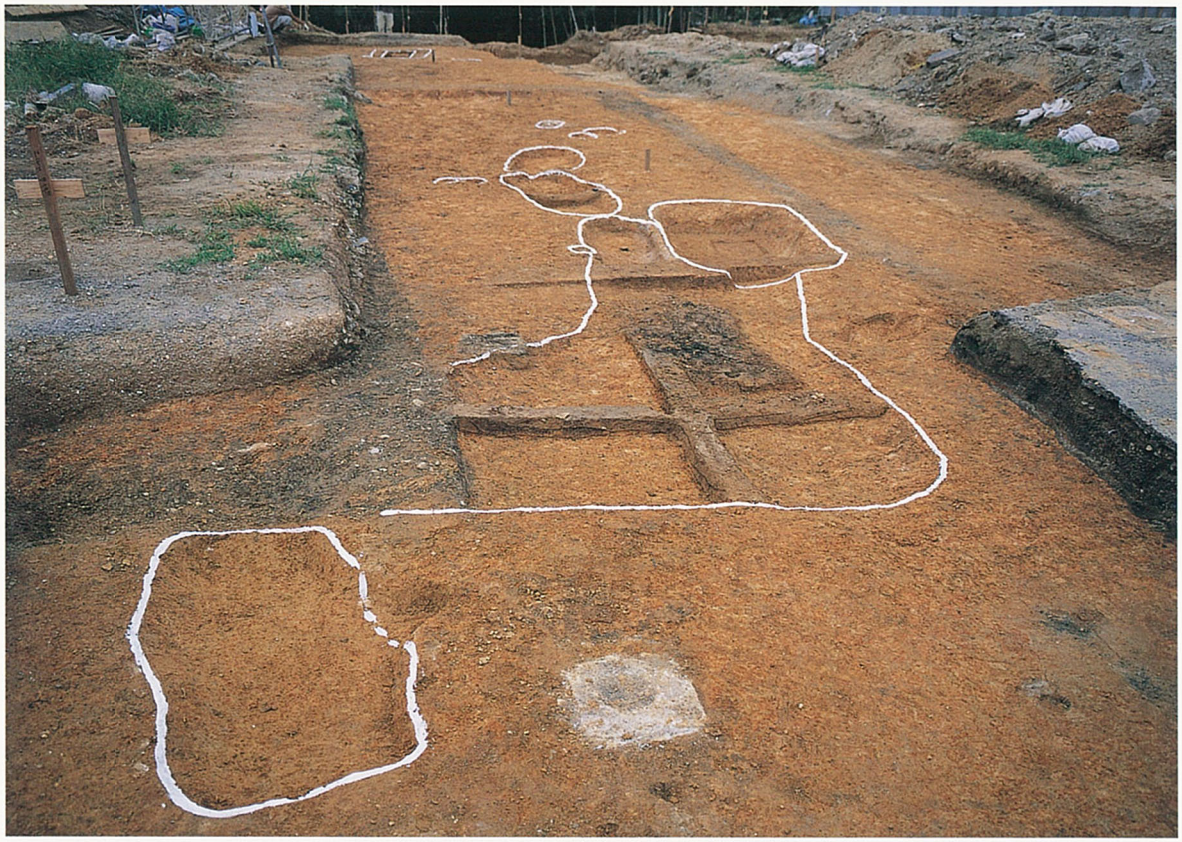
2. 同上 （北から）



1. 大尾遺跡 4 区　墓壙 8 出土石鏃



2. 同上（裏面）



1. 大尾遺跡 4 区　墓壙 9 、溝 9 等（東から）

2. 墓壙 9 木棺痕跡断面（西から）

序　　文

京都と大阪を結ぶ一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路の建設に先立ち、当センターが実施している発掘調査も佳境に入ってまいりました。寝屋川市域では丘陵地域の調査をほぼ終え、低地部に全力を傾けています。一方、調査が完了した地域では徐々に建設工事が着手され、景観も大きく変わりつつあります。

ところで、発掘調査の時点ではさまざまな条件、制約のため調査を実施できなかった部分が幾つか残されています。いずれも僅かな面積ではありますが、本体工事が着手された今、それら地域についても調査を行うことが急務となってきました。

本書に掲載する大尾遺跡と高宮遺跡は、いずれも生活道路である市道や里道として残されていた小範囲の調査です。しかし従前の調査により、丘陵上に立地する大尾遺跡で弥生時代の方形周溝墓群、段丘先端部にある高宮遺跡では国史跡高宮廃寺跡との関連が想定される大型掘立柱建物群を検出するなど、重要な地域に含まれています。調査の成果は本書に報告するとおりですが、まさに人々が行き交う足下に埋もれた歴史の調査となったわけです。

また、太秦遺跡は工事の進捗によって確認調査が必要となった部分です。

大規模な発掘調査とそれを補完する小規模な調査。今後はこういった形で発掘を進めていくことになるでしょう。そしてそれらを総合して、第二京阪道路が塗り替える歴史を明らかにしていきたいと思っています。

今回の調査は、とりわけ多くの地元自治会の皆様及び関係諸機関のご配慮とご協力のもとになし得たものです。心より御礼申し上げますとともに、今後も予想される文化財調査にあたりましても引き続きご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2005年３月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　　水野正好

例　　言

1．本書は、一般国道１号バイパス（大阪北道路）及び第二京阪道路の建設に伴って実施した、大阪府寝屋川市所在の太秦遺跡（確認その２）、高宮遺跡（その４）他の発掘調査報告書である。高宮遺跡（その４）他には、高宮遺跡のほか大尾遺跡を含んでいる。

2．発掘調査は国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所から［第二京阪道路（大阪北道路）大尾・太秦遺跡他発掘調査（その２）］事業として委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに財団法人　大阪府文化財センターが実施した。事業契約期間は平成16年４月１日から平成17年３月31日までである。

3．調査は当センター京阪調査事務所が担当し、太秦遺跡（確認その２）が平成16年４月28日から８月31日まで、高宮遺跡（その４）他が平成16年５月６日から９月30日までそれぞれ現地調査を実施した。調査終了後、引き続いて報告書作成作業にとりかかり、平成17年３月31日、本書の刊行をもって完了した。

4．本調査に係る体制は次のとおりである。

調査部長　玉井 功、調整課長　赤木克視、調整係長　森屋直樹、主査　山上 弘、技師　信田真美世、設計係長　山口和男、主査　鈴木芳則、主査　山下 篤、嘱託　竹内秀喜

京阪調査事務所長　渡邊昌宏、主査　田口宗義［事務］、調査第一係長　宮野淳一、主査　泉本知秀・主査　平田 泰［高宮（その４）他］・主査　上野貞子［写真］、主任技師　市本芳三［太秦遺跡（確認その２）］、専門調査員　青柳佳奈［高宮（その４）他］

5．現地調査及び整理作業にあたっては次の諸機関、諸氏の指導と協力を得た。記して謝意を表す。

打上自治会、国守町自治会、あさひ丘自治会、高宮自治会、高宮財産管理委員会、小路１区自治会、小路２区自治会、第３小路自治会、大阪府土木部北部公園事務所、日本道路公団関西支社枚方工事事務所、寝屋川市都市計画室、寝屋川市下水道整備課、寝屋川市道路管理課、寝屋川市消防防災課寝屋川市水道局、国土地理院

禰冝田佳男（文化庁記念物課）、深澤芳樹（奈良文化財研究所）、中川和哉（財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター）、橋本高明（大阪府教育委員会）、野島 稔（四條畷市教育委員会）、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、森井貞雄・伊藤 武（当センター職員）

大塚達夫、奥平廣子、尾崎展之、瀬田由紀子、辻井和子、出口陽子、波岸初美、藤井海彦、松浦暢久、松尾久子、山内政治（当センター非常勤職員）

6．本書の執筆は第１章と第３章を宮野、第２章の太秦遺跡を市本、大尾遺跡を青柳、高宮遺跡を泉本・平田がそれぞれ担当し、編集は全員で行った。

7．当センターは、調査事業ごとに調査名称を付して事業管理を行い、また記録もその名称に拠っている。本書掲載の調査の名称は、太秦遺跡（確認その２）が太秦遺跡・太秦古墳群04－１、高宮遺跡（その４）他のうち大尾遺跡が大尾遺跡04－１、高宮遺跡が高宮04－１である。

8．本調査に係る出土品及び記録は、当センターで保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構図等の基準高は、東京湾平均海水位（T.P.）を用いている。

2．平面図は国土座標第Ⅵ系を基準としている。今回の調査でも世界測地系による基準点を設置した。したがって、本書第２章第１節の太秦遺跡（確認その２）の調査成果は世界測地系に拠っている。しかし第２節大尾遺跡と第３節高宮遺跡の調査地は、平成14年度以前に当センターが日本測地系（改正前）を用いて測量を実施した発掘調査地区に囲まれた位置にあり、遺構の連続性を確認するために日本測地系に変換した座標値を用いた。一書の中で新旧の座標を使用することは誤解を生じる恐れがあり避けるべきことであるが、御了知願いたい。

3．平面図に示す方位は、すべて座標北を示している。

4．現地調査及び整理作業の進め方及び記録方法は、当センター『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003年８月）に基づいて行っている。

5．土色の表記は、小川正忠･竹原秀雄編『新版標準土色帖』（第25版2003年版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。

6．遺構名及び遺構番号は、基本マニュアルに従って現地調査時に付与したものを原則として使用している。変更したものについては、本文中にその旨を明記して対照できるようにした。

7．遺物実測図の縮尺は土器が３分の１、石器を実寸としそれぞれ図中に縮尺を明記している。遺構図等の平面図、及び断面図についてはとくに統一していない。

8．遺物実測図のうち、須恵器のみ断面を黒く塗りつぶしている。

9．遺物写真は縮尺任意を基本としているが、石器は実寸で掲載している。

10．本書の記述にあたっては、執筆担当者間での文章表現や用語の統一は図っていない。

目　　次

序文
例言
凡例
第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　調査成果 …… 3
　第１節　太秦遺跡〔太秦遺跡・太秦古墳群04－１〕 …… 3
　　１．調査に至る経緯と調査方法 …… 3
　　２．調査成果 …… 10
　　３．小結 …… 18
　第２節　大尾遺跡〔大尾遺跡04－１〕 …… 19
　　１．調査に至る経緯と調査方法 …… 19
　　２．調査成果 …… 20
　　３．出土遺物 …… 36
　　４．小結 …… 48
　第３節　高宮遺跡〔高宮遺跡04－１〕 …… 59
　　１．調査に至る経緯と調査方法 …… 59
　　２．調査成果 …… 64
　　３．小結 …… 68
第３章　まとめ …… 71

挿　図　目　次

図１　太秦遺跡・太秦古墳群　大尾遺跡　高宮遺跡　調査位置図 …… 2
［太秦遺跡・太秦古墳群］
図２　周辺の遺跡 …… 4
図３　トレンチ配置図 …… 4
図４　地区割の基準、トレンチ配置・地形図 …… 5
図５　１－１・１－３トレンチ平面・断面図 …… 6
図６　２－１・２－２トレンチ平面・断面図 …… 7
図７　３トレンチ東半平面・断面図、出土土器実測図 …… 8
図８　３トレンチ西半平面・断面図 …… 9
図９　４・10トレンチ平面・断面図 …… 11
図10　５トレンチ平面・断面図 …… 12
図11　６トレンチ平面・断面図 …… 13

図12　7－1・7－2トレンチ平面・断面図 …… 14
図13　8－1・8－2トレンチ平面・断面図 …… 16
図14　9トレンチ平面・断面図 …… 17
図15　2・10トレンチ検出遺構配置図 …… 18
［大尾遺跡］
図16　調査地と周辺遺跡 …… 19
図17　調査区配置図 …… 21
図18　地区割図 …… 22
図19　1区全体図、墓壙1平面・断面図 …… 24
図20　1区東壁土層断面図 …… 25
図21　2区平面図 …… 26
図22　2区溝4土器出土状況図 …… 27
図23　3区平面図 …… 28
図24　3区溝8断面図、溝7断面図、土坑6平面・断面図 …… 29
図25　4区全体図、溝9断面図、墓壙9平面・断面図 …… 31
図26　4区墓壙8平面・断面図 …… 32
図27　4区墓壙8木棺内石鏃出土位置図 …… 33
図28　5区全体図、溝10断面図、建物1平面・断面図 …… 35
図29　出土土器実測図（1） …… 37
図30　出土土器実測図（2） …… 39
図31　出土土器実測図（3） …… 42
図32　出土石器実測図 …… 44
図33　弥生時代検出遺構図 …… 50
図34　弥生時代周溝墓群復原図 …… 51
図35　古墳時代検出遺構図 …… 54
図36　古代検出遺構図 …… 55
図37　中世以降検出遺構図 …… 57
［高宮遺跡］
図38　周辺地形図　明治19（1886）年 …… 59
図39　周辺遺跡分布図 …… 60
図40　北河内の遺跡立地 …… 61
図41　調査位置図 …… 62
図42　既調査区との対照図 …… 63
図43　土層断面図 …… 64
図44　7区平面図 …… 66
図45　既調査遺構との関連図 …… 67
図46　出土土器実測図（1） …… 69
図47　出土土器実測図（2） …… 70

表　目　次

［大尾遺跡］

表１　遺構番号対応表 …… 22
表２　出土土器一覧表 …… 46
表３　方形周溝墓および墓壙一覧表 …… 52

図　版　目　次

巻頭図版１　1．遺跡周辺航空写真
巻頭図版２　1．大尾遺跡周辺航空写真（北西から）　2．同上（南から）
巻頭図版３　1．大尾遺跡から摂津山系遠望（南東から）　2．大阪湾・淡路島方面遠望（北から）
巻頭図版４　1．大尾遺跡１区　墓壙１検出状況（南から）　2．同上　完掘状況（南東から）
巻頭図版５　1．大尾遺跡４区　墓壙８検出状況（西から）　2．同上　断面（東から）
巻頭図版６　1．大尾遺跡４区　墓壙８石鏃出土状況（南から）　2．同上　（北から）
巻頭図版７　1．大尾遺跡４区　墓壙８出土石鏃　2．同上（裏面）
巻頭図版８　1．大尾遺跡４区　墓壙９、溝９等（東から）　2．墓壙９木棺痕跡断面（西から）

図版１　太秦遺跡遺構
1．1－１トレンチ（西から）　2．1－３トレンチ（東から）　3．2－２トレンチ（北から）
4．3トレンチ（南東から）　5．3トレンチ中央　須恵器出土地点（南から）　6．4トレンチ（南西から）
図版２　太秦遺跡遺構
1．5トレンチ（南から）　2．6トレンチ（東から）　3．7－１トレンチ（南から）
4．8－１トレンチ（西から）　5．8－２トレンチ（東から）　6．10トレンチ　４溝（北東から）
図版３　太秦遺跡遺構
1．9トレンチ　Ｋ１号墳（南から）　2．9トレンチ　Ｋ１号墳（北西から）
3．9トレンチ　Ｋ１号墳周溝断面（西から）　4．2－１トレンチ　２溝（南西から）
図版４　大尾遺跡遺構　１区
1．1区（北西から）　2．1区 溝１（北西から）　3．1区 墓壙１（北西から）
図版５　大尾遺跡遺構　２区
1．2区北側調査区北半（南から）　2．2区北側調査区南半（南から）
3．2区南側調査区（南から）　4．2区 溝４　弥生土器出土状況（東から）
図版６　大尾遺跡遺構　３区
1．3区（北東から）　2．3区 溝８断面（北から）
3．3区 土坑７断面（東から）4．3区 溝７断面（西から）　5．3区 土坑６断面（北から）
図版７　大尾遺跡遺構　４区
1．4区西半（南から）　2．4区東半（南から）
3．4区 墓壙９断面（西から）　4．4区 溝９（東から）

図版８　大尾遺跡遺構　４区

1．4区 墓壙８（東から）　2．同上（東から）

図版９　大尾遺跡遺構　４区

1．4区 墓壙８ 石鏃出土状況（北から）　2．同上　部分

図版10　大尾遺跡遺構　５区

1．5区北側調査区（南西から）　2．5区南側調査区（北西から）

3．5区 溝10断面（北西から）　4．5区 溝10 弥生土器出土状況（東から）

図版11　大尾遺跡遺物　２・３区

図版12　大尾遺跡遺物　３区

図版13　大尾遺跡遺物　３・４・５区

図版14　大尾遺跡遺物　１・３・４・５区

図版15　高宮遺跡遺構　６区

1．6区北半（南から）　2．6区南半（南東から）

図版16　高宮遺跡遺構　７区

1．１・２・３柱穴、８・７溝（南から）　2．１・２・３柱穴（北西から）

図版17　高宮遺跡遺構　７区

1．9溜池状遺構検出状況（南西から）　2．同上　完掘状況（南西から）

図版18　高宮遺跡遺構　７区

1．9溜池状遺構断面（南西から）　2．同上　部分（南西から）

図版19　高宮遺跡遺構　７区

1．北半柱穴群、20道路状遺構（南東から）　2．同上（北西から）

図版20　高宮遺跡遺構・遺物　７区

1．須恵器台付長頸壺出土状況（西から）　2．同上　3．出土遺物

図版21　高宮遺跡遺物　７区

1．須恵器（外面）　2．須恵器（内面）

図版22　高宮遺跡遺物　７区

1．土師器・製塩土器・磁器・瓦器（外面）　2．同上（内面）

第１章　調査に至る経緯

当センターが行っている一般国道１号バイパス（大阪北道路）及び第二京阪道路に伴う発掘調査も、寝屋川市域では丘陵部分の調査をほぼ終了し、低地部の調査に全力を傾けている。しかし、丘陵部においても、わずかな面積ではあるがさまざまな理由により調査範囲から除外した部分がある。また、すでに着手された道路本体工事に伴い、新たに調査が必要となる箇所も浮上してきた。

本書には、太秦遺跡（確認その２）及び高宮遺跡（その４）他として平成16年度に実施した発掘調査の成果を報告している。後者に、高宮遺跡と大尾遺跡の２遺跡を含んでいることは例言に記したとおりである。両調査とも国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所が計画している、一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴うものだが、太秦遺跡（確認その２）は道路建設予定地ではない。その辺りの事情について記しておこう。

第二京阪道路は大阪府枚方市と交野市の丘陵地を通過し、高宮遺跡付近の寝屋川市域で低地に下りて高架道路として近畿自動車道に接続する。そのため、段丘先端にあたる部分はトンネルもしくは開削による掘割構造となる。そして、そこで発生する大量の土砂を活用するため、道路に隣接する大阪府営寝屋川公園拡張予定地の一角にある丘陵と谷を埋め立てることになった。この丘陵地は大部分が周知の埋蔵文化財包蔵地外だが、西端の一部が太秦遺跡・太秦古墳群の範囲に含まれている。また、道路予定地内の調査で古墳群を確認した尾根が近いことからも、確認調査が必要と判断されたものである。［太秦遺跡・太秦古墳群04－１］。

太秦遺跡・太秦古墳群の調査は、住宅地であった平坦面と背後（北側）の丘陵及び谷部に11ヶ所のトレンチを設定することで実施し、各トレンチの調査が終了した時点で大阪府教育委員会文化財保護課の確認を受けた。

一方、高宮遺跡（その４）他発掘調査は、当センターが平成13年度から15年度の３ヵ年にかけて行った調査のさい、地元の生活道路として調査範囲から除外していた里道や市道のうち重要遺構の連続が考えられる部分を、大阪府教育委員会文化財保護課の指示により実施したものである。具体的には、平成13年度に実施した大尾遺跡と平成15年度の大尾遺跡03－１の境にあり、方形周溝墓や掘立柱建物の連続が想定される寝屋川市道国守北中央線及びそれに接続する道の調査［大尾遺跡04-１］、平成13年度に実施した調査で、大型の総柱掘立柱建物群などの遺構を検出した範囲にある市道小路高宮線と里道の調査［高宮遺跡04－１］である。

路線内とはいえ、生活道路の確保が要求される。そのため大尾遺跡、高宮遺跡の調査とも、すでに調査が完了している部分に迂回道路を設けることから開始した。車両通行があり、通学路でもあるので迂回路設置にあたっては寝屋川市都市計画室、寝屋川警察署及び日本道路公団の指導を受け、地元の了解を得るなど調査以上に時間を費やした。さらに、調査対象地は道路として永らく利用されていたため上下水管が敷設されており、調査にあたって注意を要した。そういった状況の中でも、後節に記すように下層に遺構や包含層が遺されている道路があった。また、完全に削平されて設けられた道路もあった。それはまた、その道の成り立ちを示すものだろう。

以上のように今回は路線内の計画的な調査とは異なり、道路工事の進捗に伴って付帯的に生じる小規模な調査であった。今後もこのような調査が必要となってくるだろうが、鋭意対応していきたい。

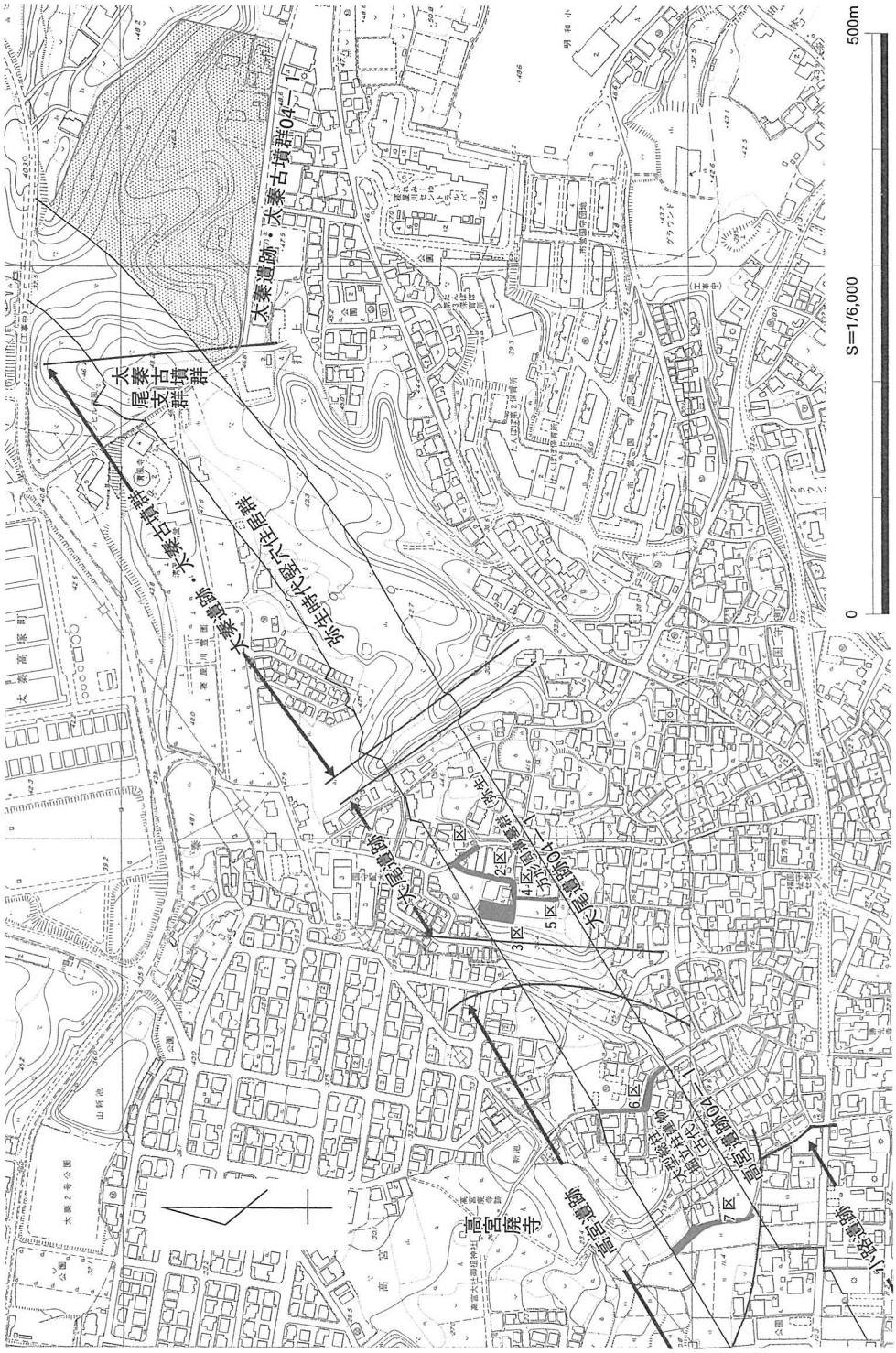


図１　太秦遺跡・太秦古墳群　大尾遺跡　高宮遺跡　調査位置図

なお、各調査区の位置関係は上図に示すとおりである。太秦遺跡・太秦古墳群04－１はトレンチによる確認調査のため、トレンチの通し番号を付けた。詳細は次章に拠られたい。一方、大尾遺跡04－１は５箇所、高宮遺跡04－１は２箇所の調査区だが、調査順序が不定であったため異なる遺跡ではあるが１区から７区の通し番号を付けて調査を行った。本書でもその地区名称を踏襲している。ただし、正式な調査名称も合わせて記載した。

第２章　調査成果

第１節　太秦遺跡〔太秦遺跡・太秦古墳群04-１〕

１．調査に至る経緯と調査方法（図２～４）

太秦遺跡は大阪府寝屋川市国守町・打上に所在する。当該地に第二京阪道路および大阪北道路建設が計画され、財団法人大阪府文化財センターは平成13年度と15年度にわたり、太秦遺跡の本調査を実施している。その結果、平成15年度には、古墳時代中期の古墳群、弥生時代中期の集落跡、古代の掘立柱建物跡等を検出した。当確認調査地の北西側に接した箇所では、平成13年度に太秦古墳群の発掘調査が実施され、古墳時代中期から後期の13基の古墳が検出され、「尾支群」と命名している[(1)]。さらに、平成15年度には新たに12基の古墳が検出された[(2)]。

当調査地は、第二京阪道路に隣接する大阪府寝屋川公園建設予定地であり、周知の太秦遺跡・太秦古墳群範囲内及び隣接地にあたる。これらの調査結果に基づき、平成16年４月から平成16年８月までの間、埋蔵文化財の確認発掘調査を実施した。調査面積は約980㎡である。

調査対象地は南東方向から北西方向へ伸びる丘陵及び谷地形に位置しており、地形に合わせ、長さ15～80m、幅２～３ｍの調査区を11箇所設定し、遺構・遺物の有無の確認を行った。その中で９トレンチは周知の太秦遺跡範囲内に位置し、平成13年度調査地に接する。当トレンチは調査途中に遺構が検出されたため、調査区を拡張し、その拡がりを確認した。また、２トレンチの調査結果から新たに２トレンチの東側と西側に10・11トレンチを設定した。これらトレンチの立地は、１・２・10・11トレンチは丘陵上に位置しているが、宅地造成に伴い平坦面を作り出している。３～９トレンチは丘陵上とその斜面、及び谷部分に位置し、竹藪が繁茂していた。

調査は、トレンチ及び各トレンチへの進入路部分の竹藪伐開作業から着手した。掘削は重機により、盛土・表土を機械掘削した後、堆積層及び遺構を人力掘削した。堆積層内の遺物の有無、遺構の有無を確認しながら、下層部への調査を進め、平面図、土層断面図の作成、写真撮影を行った。また、測量に関しては各トレンチで単点測量を実施し、図面作成時に使用した。

遺構図の作成、遺物の取り上げは、（財）大阪府文化財センター2003.8『遺跡調査マニュアル【暫定版】』をもととし、世界測地系の国土座標軸を基準とした。区割りは大から小へ６段階で行い、府全域が共通の地区割になっている。第Ⅰ区画は大阪府の南西端Ｘ＝－192,000m、Ｙ＝－88,000ｍを基準とし、縦６ km、横８ kmで区画する。縦軸Ａ～０、横軸０～８。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を縦1.5km、横2.0kmで区画し、縦横各４分割、16区画にする。南西端を１とする。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20分割、南北15分割した、一辺100ｍの範囲となる。縦軸Ａ～０、横軸１～20。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を東西、南北ともに10分割した一辺10ｍの範囲となる。縦軸a～j、横軸１～10。第Ⅴ区画は第Ⅳ区画を５ｍ単位で区画した範囲となる。第Ⅵ区画は第Ⅳ区画内を、北東端を基点にｍ、cm、mmの必要な桁までを表示する。また、第Ⅲ・第Ⅳ区画の縦軸・横軸の表示は、旧日本測地系と区別するため、横方向は数字、縦方向はアルファベットの順である。当調査地は第Ⅰ区画－Ｊ６、第Ⅱ区画－４、第Ⅲ区画－１Ｍ・２Ｌ・２Ｍ・３Ｌ・３Ｍ・４Ｍがあたる。なお、第２・３節の大尾遺跡、高宮遺跡は凡例に示したように日本測地系を使用しているので、第Ⅲ・第Ⅳ区画の縦軸・横軸の表示は縦方向がアルファベット、横方向が数字の順である。

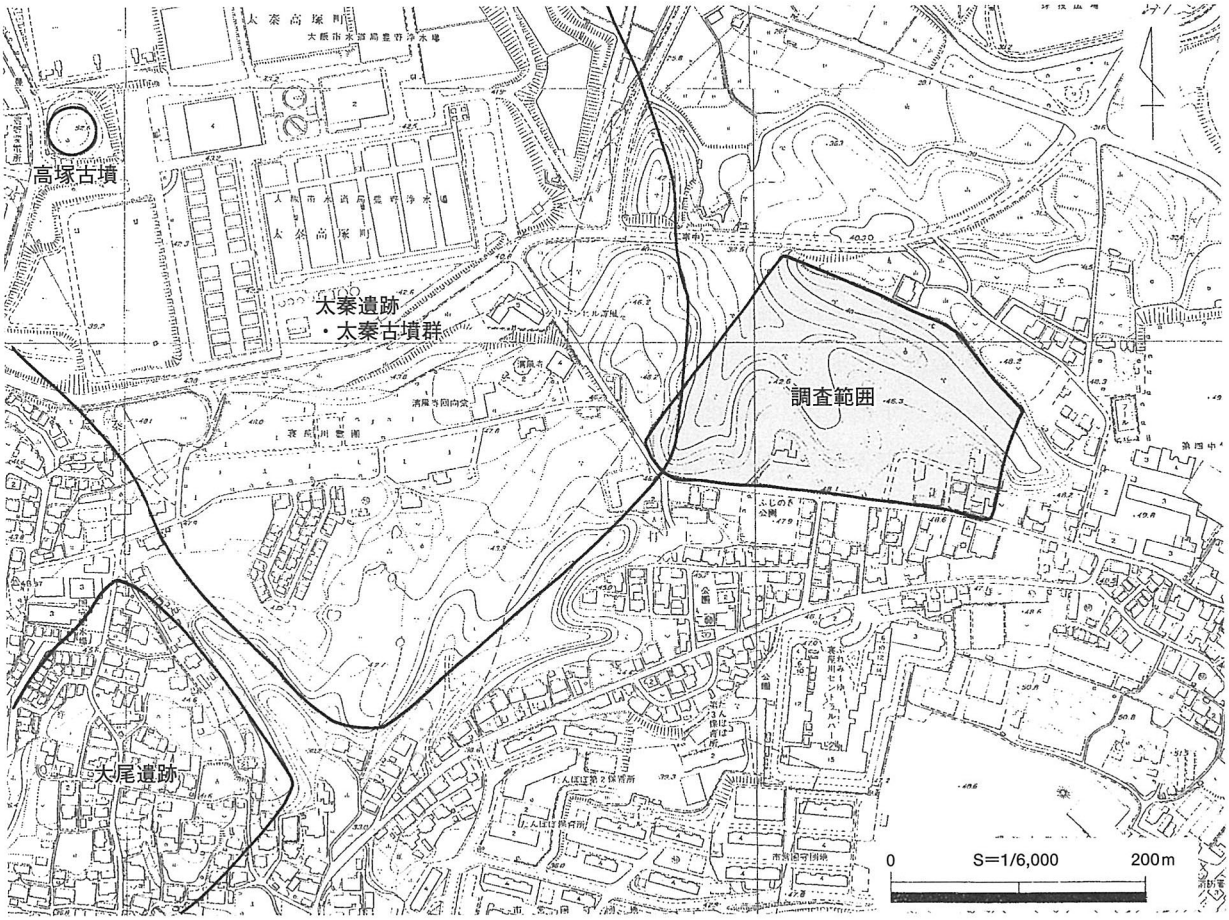


図２　周辺の遺跡

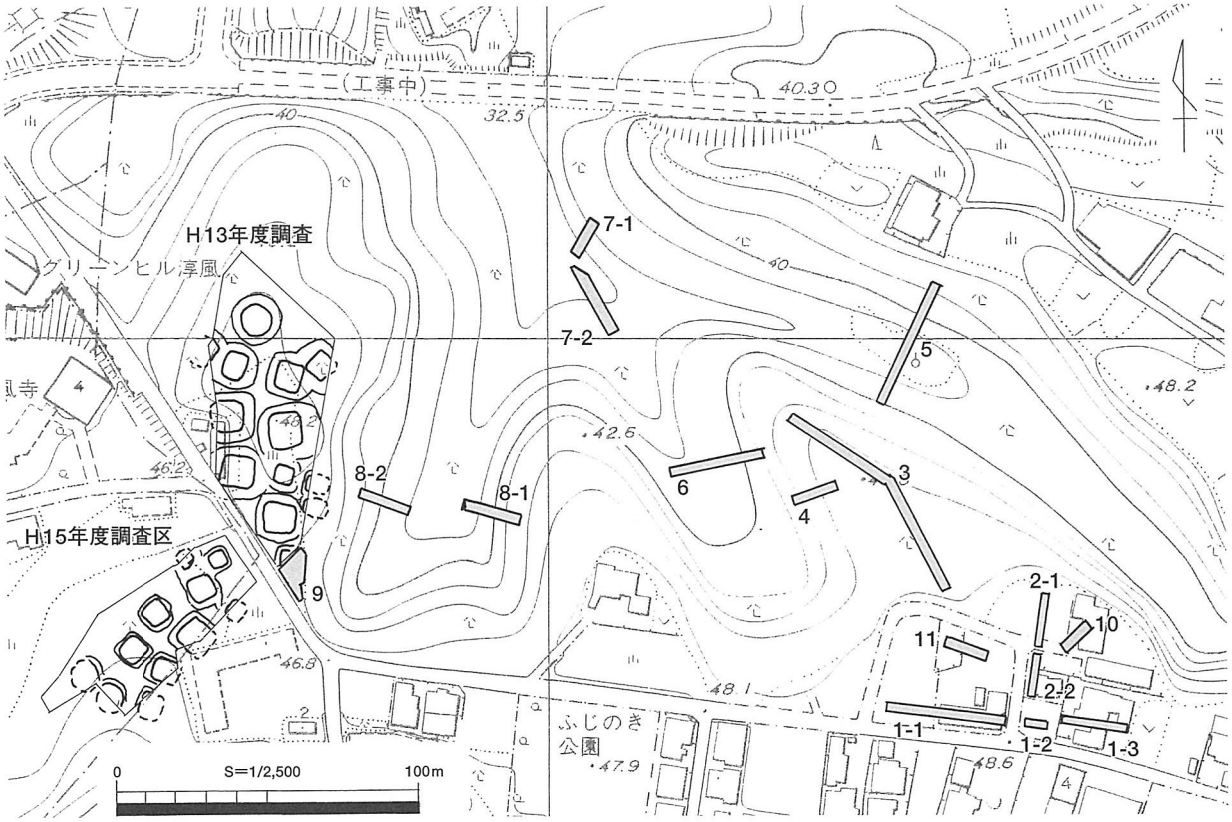
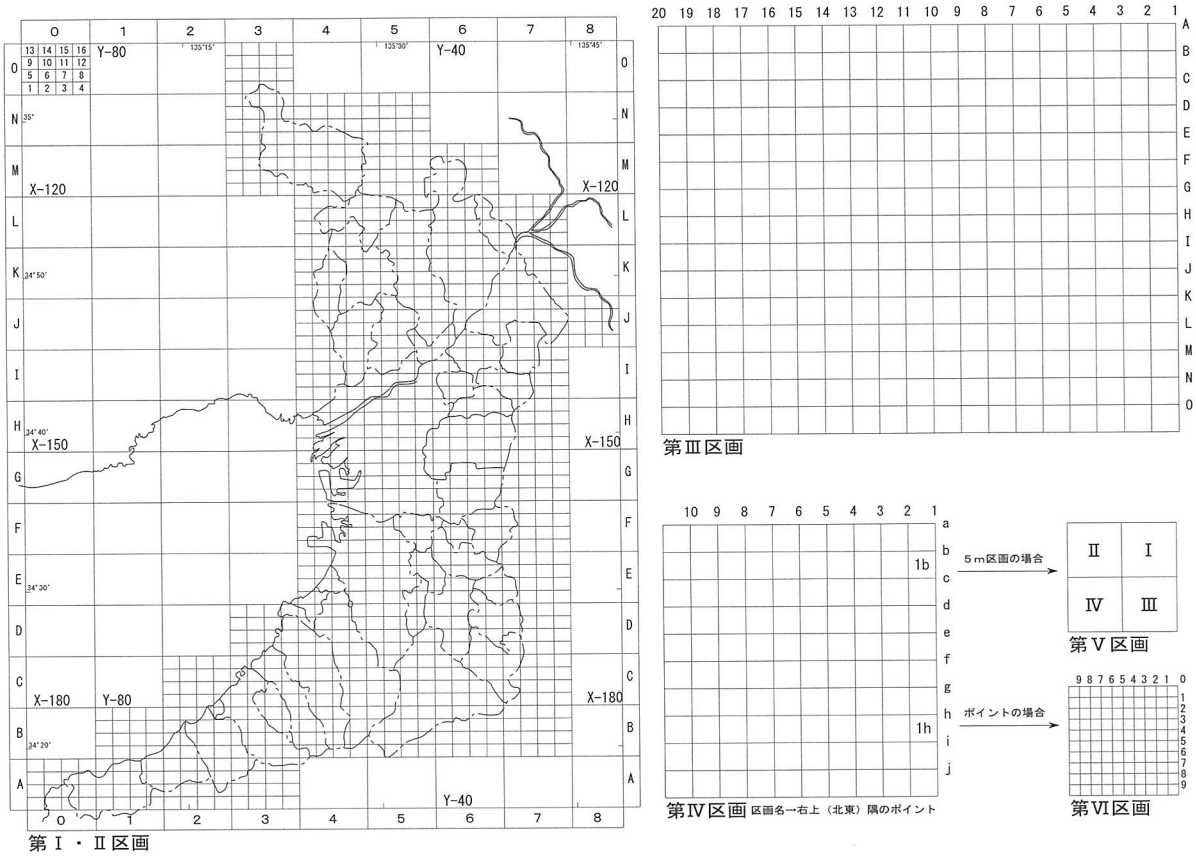


図３　トレンチ配置図



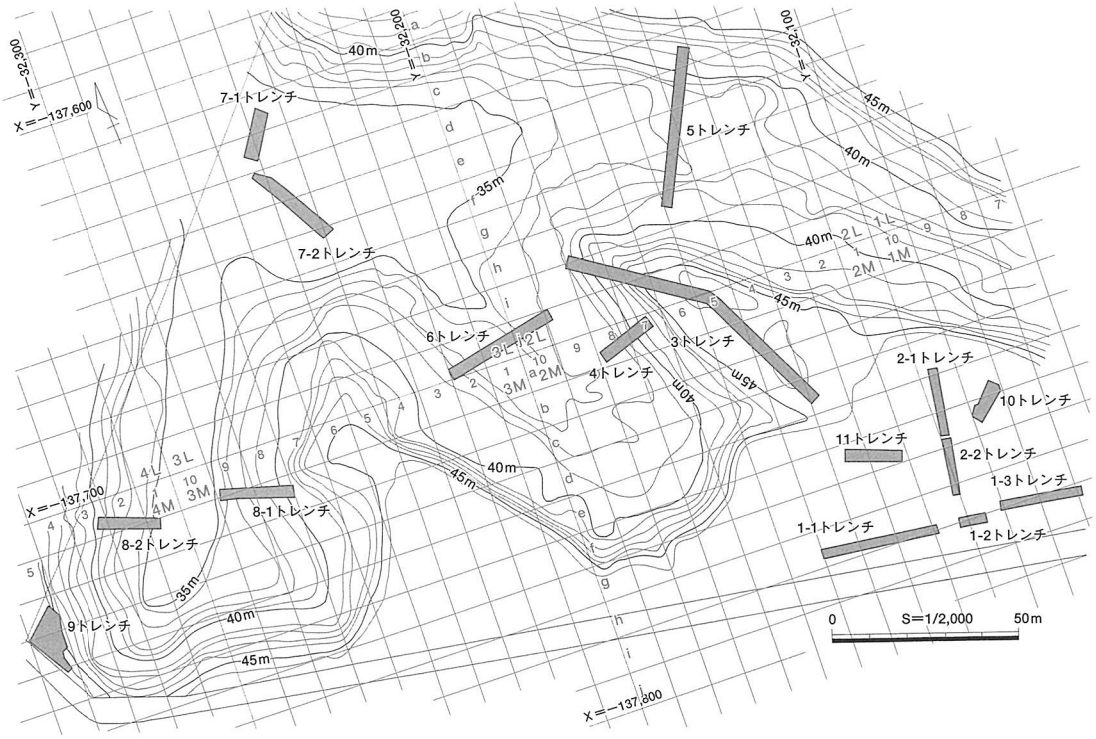


図４　地区割の基準、トレンチ配置・地形図

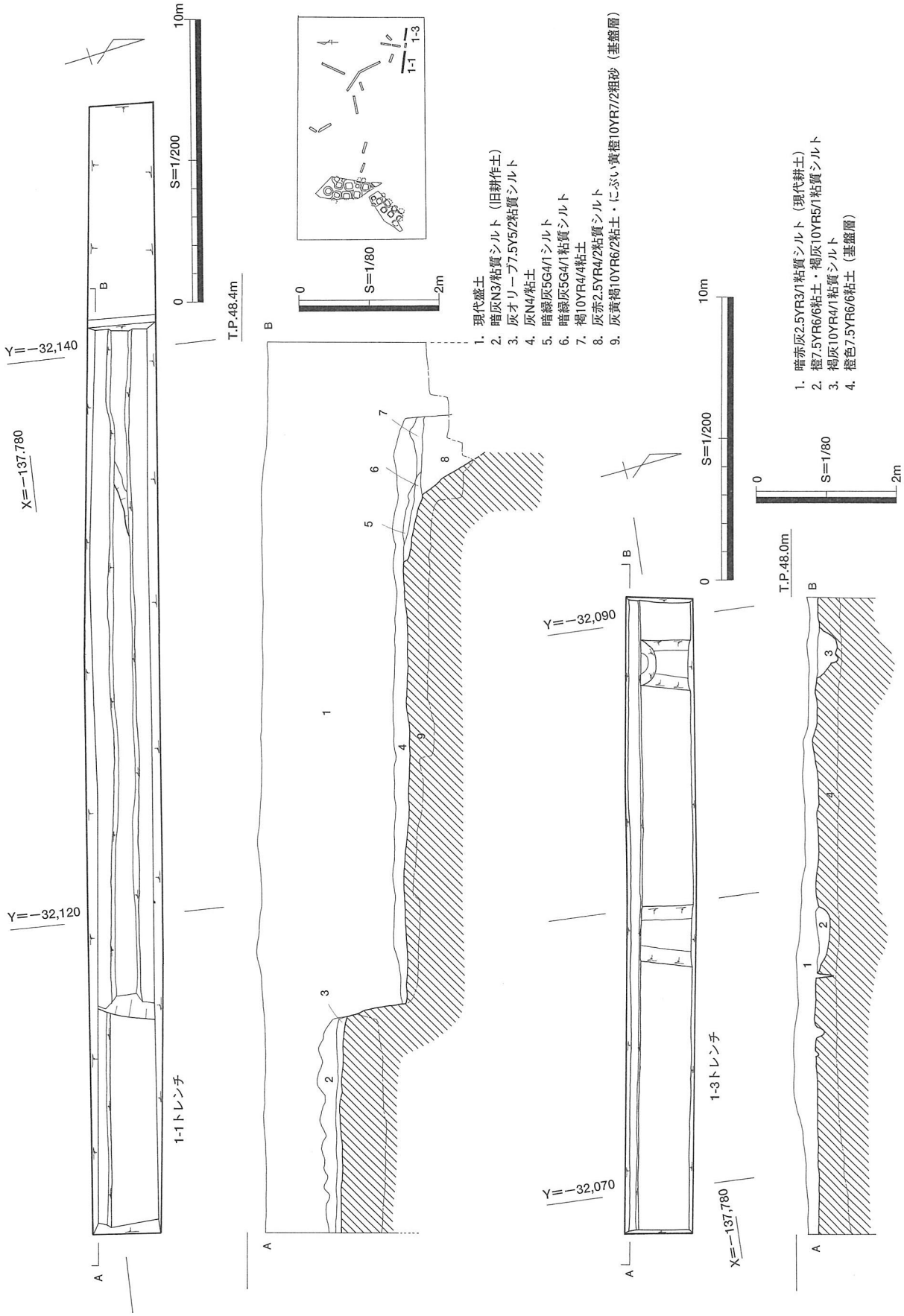


図5　1－1・1－3トレンチ平面・断面図

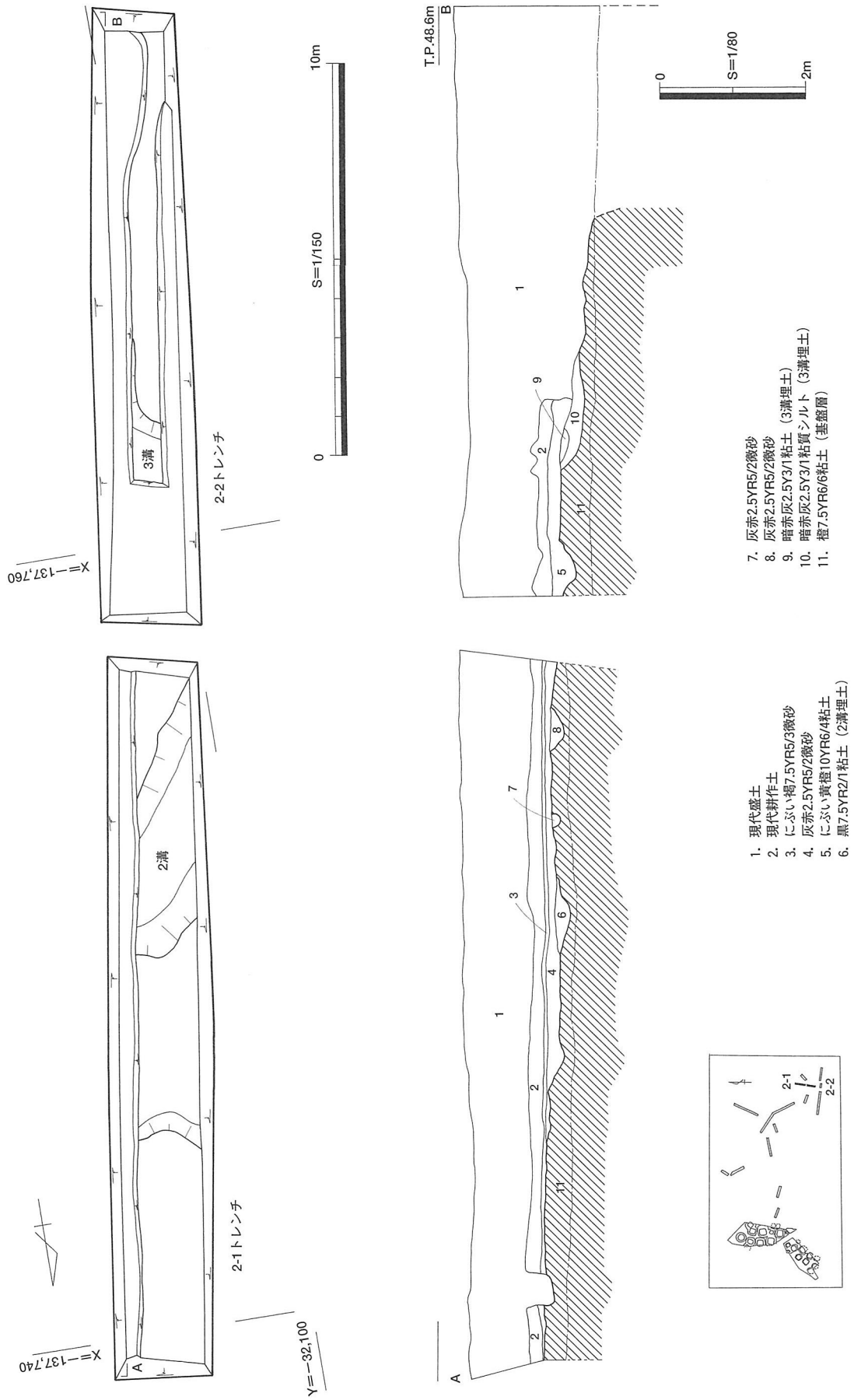


図6　2－1・2－2トレンチ平面・断面図

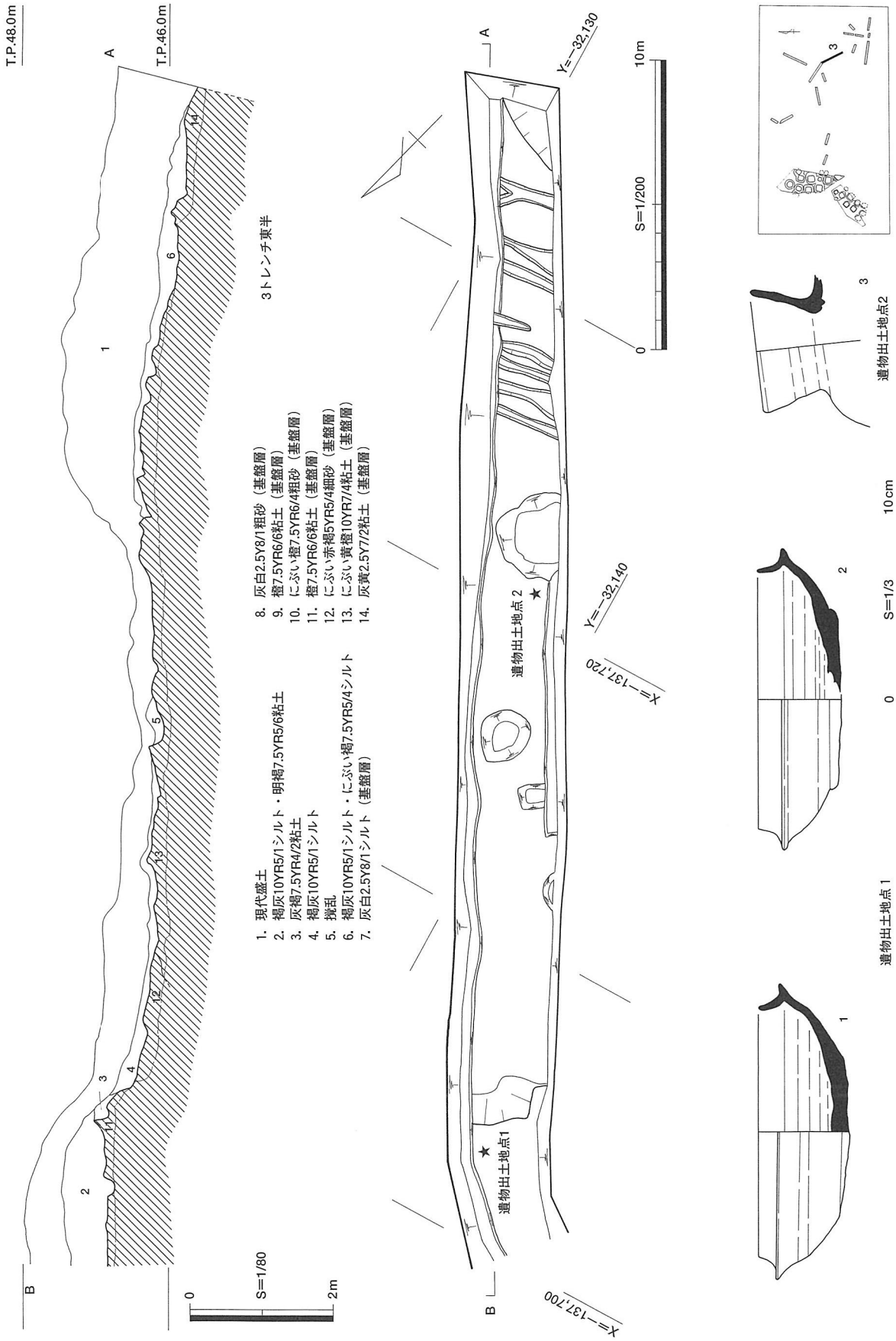


図７　３トレンチ東半平面・断面図、出土土器実測図

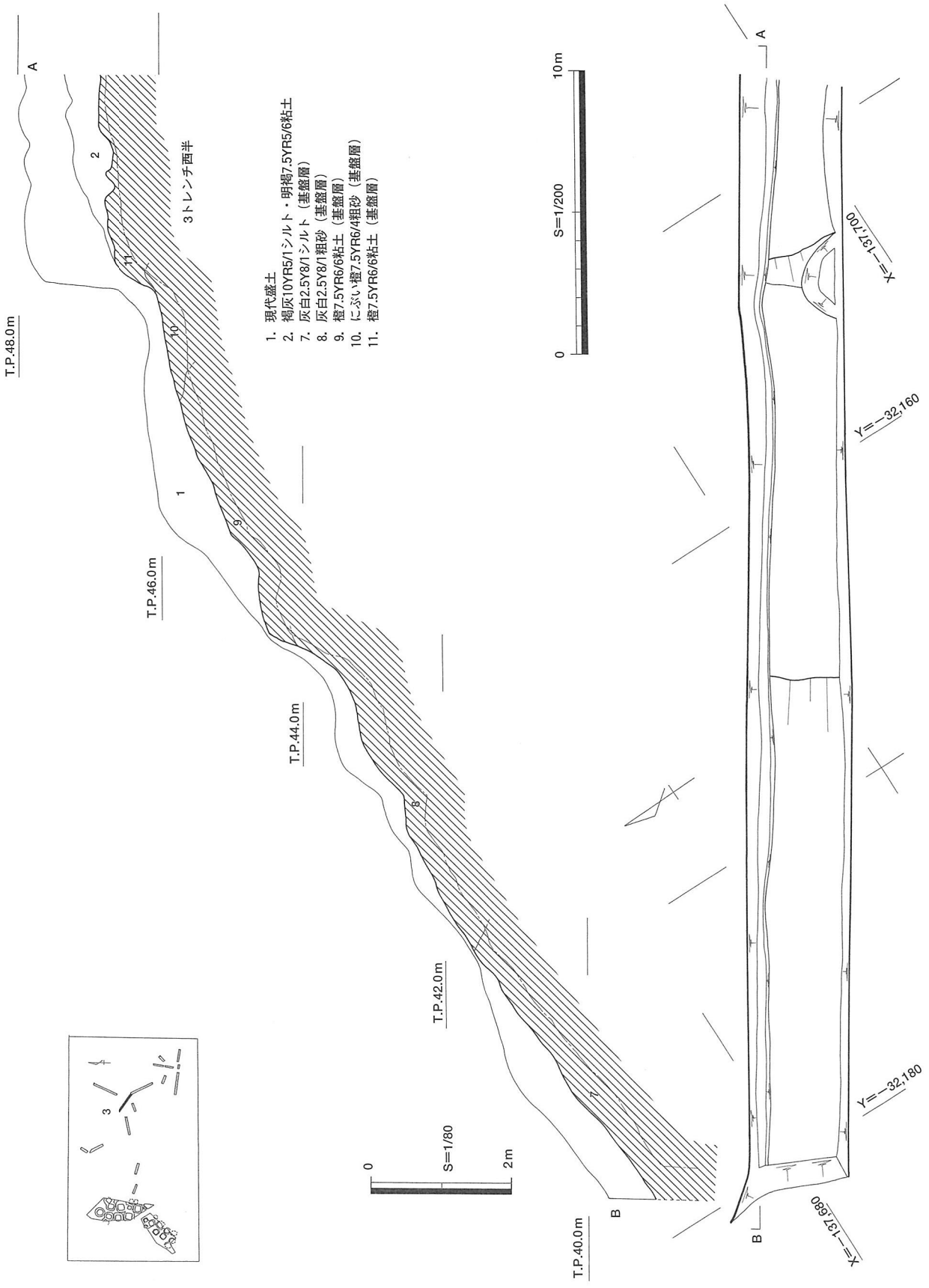


図8　3トレンチ西半平面・断面図

２．調査成果

１トレンチ（図５、図版１－１・２）

当調査地範囲の南東側に位置し、東西方向に長さ約70mのトレンチを設定した。塀等の障害物を考慮し、西から１－１、１－２、１－３トレンチの３分割に設置した。

１－１トレンチは厚さ約0.9mの盛土、約0.2mの耕作土があり、これらを除去することにより高さT.P.約47.2mの位置に灰黄褐色粘土を基盤層とする平坦面をトレンチ東端からY=－32,117付近の範囲に検出した。その西側には約0.9mの段差を有し、高さT.P.約46.3mの位置に平坦面を検出した。近現代の造成と考えられる。さらにY=－32,132付近から西側に向かって、この基盤層は下降していき、トレンチ西側の約13m部分はこの下降面を検出することはできなかった。

１－２トレンチは高さT.P.約48.3mから約２mまで機械掘削を行ったが、旧地表面を確認することはできなかった。安全上の理由から掘削深度を測量後、すぐに埋め戻し作業に入った。

１－３トレンチは盛土がなく、厚さ約0.2mの現代耕作土を除去することにより高さT.P.約47.7mの位置に橙色粘土を基盤層とする平坦面を検出した。近現代の溝を検出した。

１トレンチのいずれからも遺物は出土していない。

２トレンチ（図６、図版１－３・３－４）

１トレンチの北側に位置し、南北方向に長さ約35mのトレンチを設定した。排水路をはさんで分割し、北側を２－１トレンチ、南側を２－２トレンチとした。

２－１・２－２トレンチ共に厚さ約0.8mの盛土、約0.2mの耕作土、約0.1mのにぶい褐色微砂が観察できた。これらを除去することにより、高さT.P.約47.1mの位置に灰黄褐色から橙色の粘土の基盤層を検出した。

この基盤層は２－１トレンチではX=－137,745付近から南方向に下降する約0.2mの段差があり、X=－137,750付近から２溝を検出した。２溝は幅約3.0m、深さ約0.2mを測り、土壌化した黒色粘土を埋土とする。北東－南西方向に伸びる。２－２トレンチでもX=－137,760付近で２溝と同様の埋土を有した３溝を検出した。幅３m以上を測り、北西－南東方向に伸びると考えられる。

２溝・３溝及び上層の堆積土から遺物は出土していない。

３トレンチ（図７・８、図版１－４・５）

丘陵の尾根筋上と尾根先端斜面にかけて長さ約80mのトレンチを設定した。X＝－137,705から南側は厚さ0.2～1.0mの腐植土層・盛土があり、これらを除去することにより、灰黄色からにぶい黄橙色の粘土を基盤層とする平坦面を高さT.P.約45.8～46.8mの位置で検出した。

X＝－137,730付近では東西方向に幅0.3～0.5mの溝を８条検出した。近現代の耕作跡と思われる。この丘陵上は造成を受けており、平坦面を成している。X=－137,700付近には現状で高まりが観察できたが、これは約1.0mの盛土で構成されており、除去すると平坦面が検出された。

出土遺物はX＝－137,720付近から須恵器平瓶１片、X＝－137,700付近から須恵器坏身が２点出土した。いずれも腐植土層とその下層からの出土であり、これら遺物に伴う純粋な包含層はない。また、この基盤層上面から遺構は検出されていない。須恵器坏身は６世紀後半に属する。

トレンチ西半の斜面部分は厚さ0.1～0.8mの腐植土層を除去することにより、灰白色シルトの基盤層を検出した。トレンチ西端で高さT.P.約39.0mを測る。

４トレンチ（図９、図版１－６）

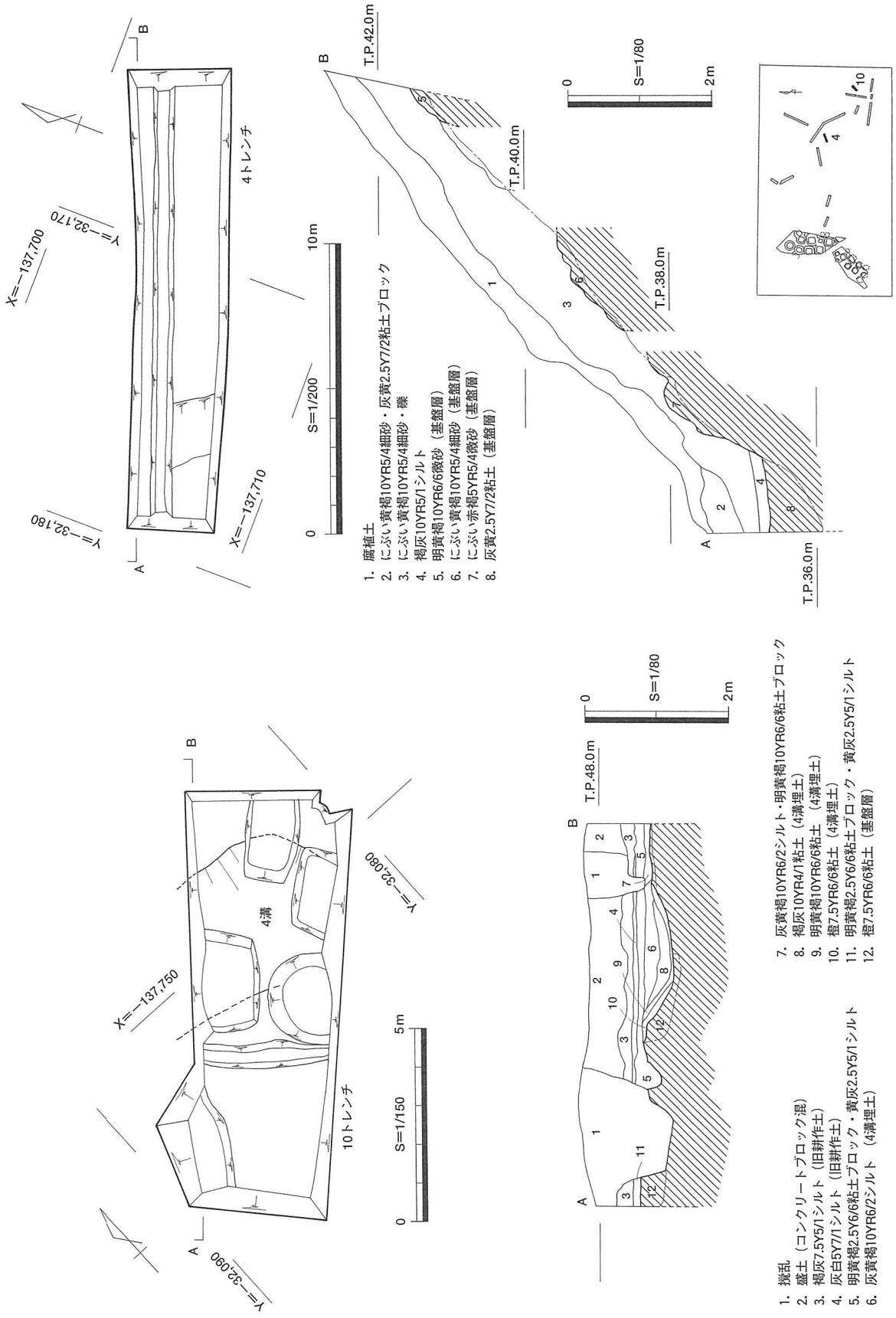


図9　4・10トレンチ平面・断面図

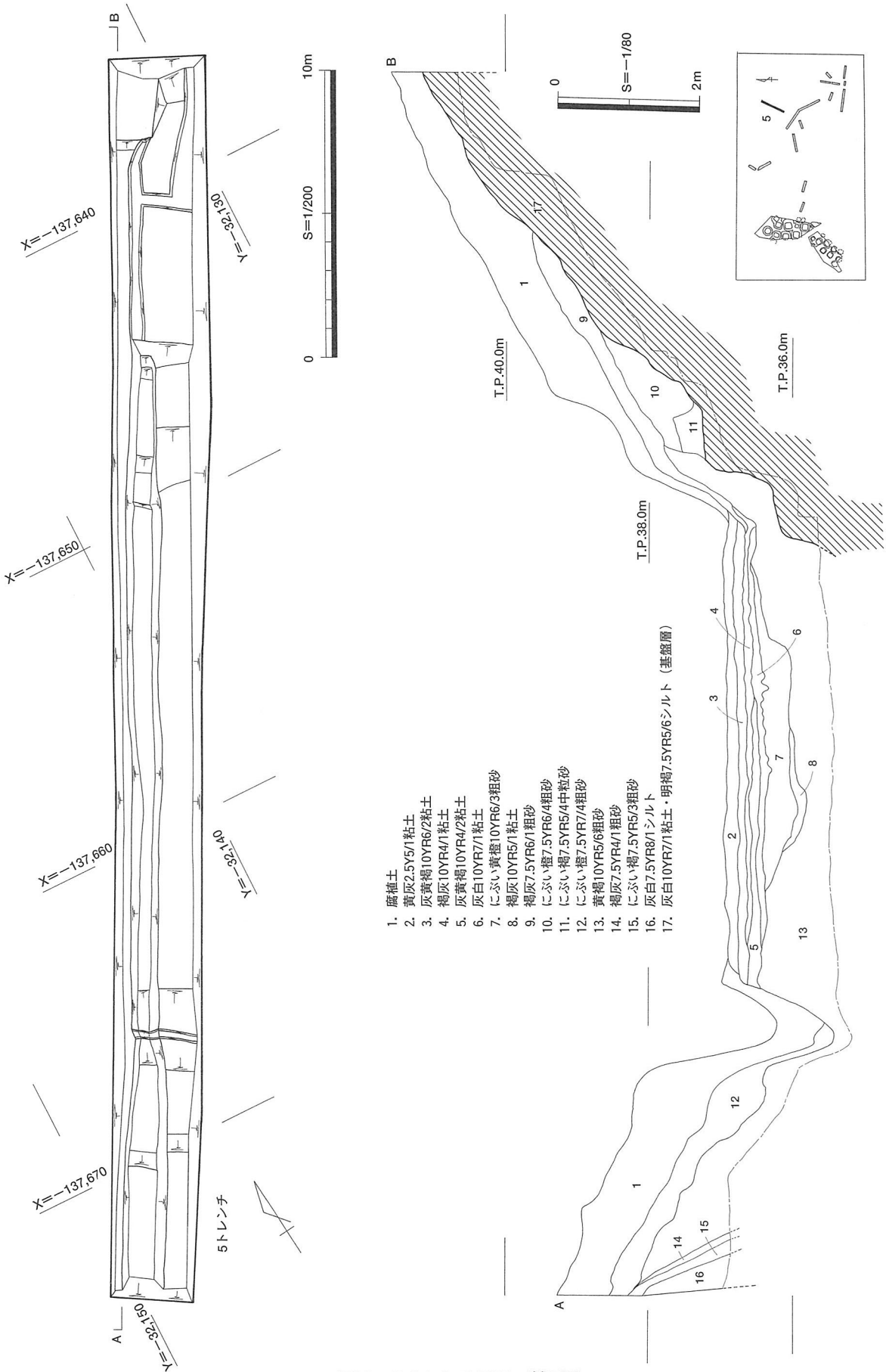


図10　5トレンチ平面・断面図

3トレンチの丘陵南西斜面に長さ約16mのトレンチを設定した。厚さ約0.4mの腐植土層の下部に厚さ0.5～0.9mのにぶい黄褐色細砂・礫の崩落土が堆積し、その下層から明黄褐色微砂・灰黄色粘土の基盤層を検出した。東端部でT.P.約41.6m、西端部でT.P.約36.6mの高さを測る。遺物は出土していない。

5トレンチ（図10、図版2－1）

3トレンチの北東に位置し、谷部分とその両側斜面に長さ約43mのトレンチを設定した。

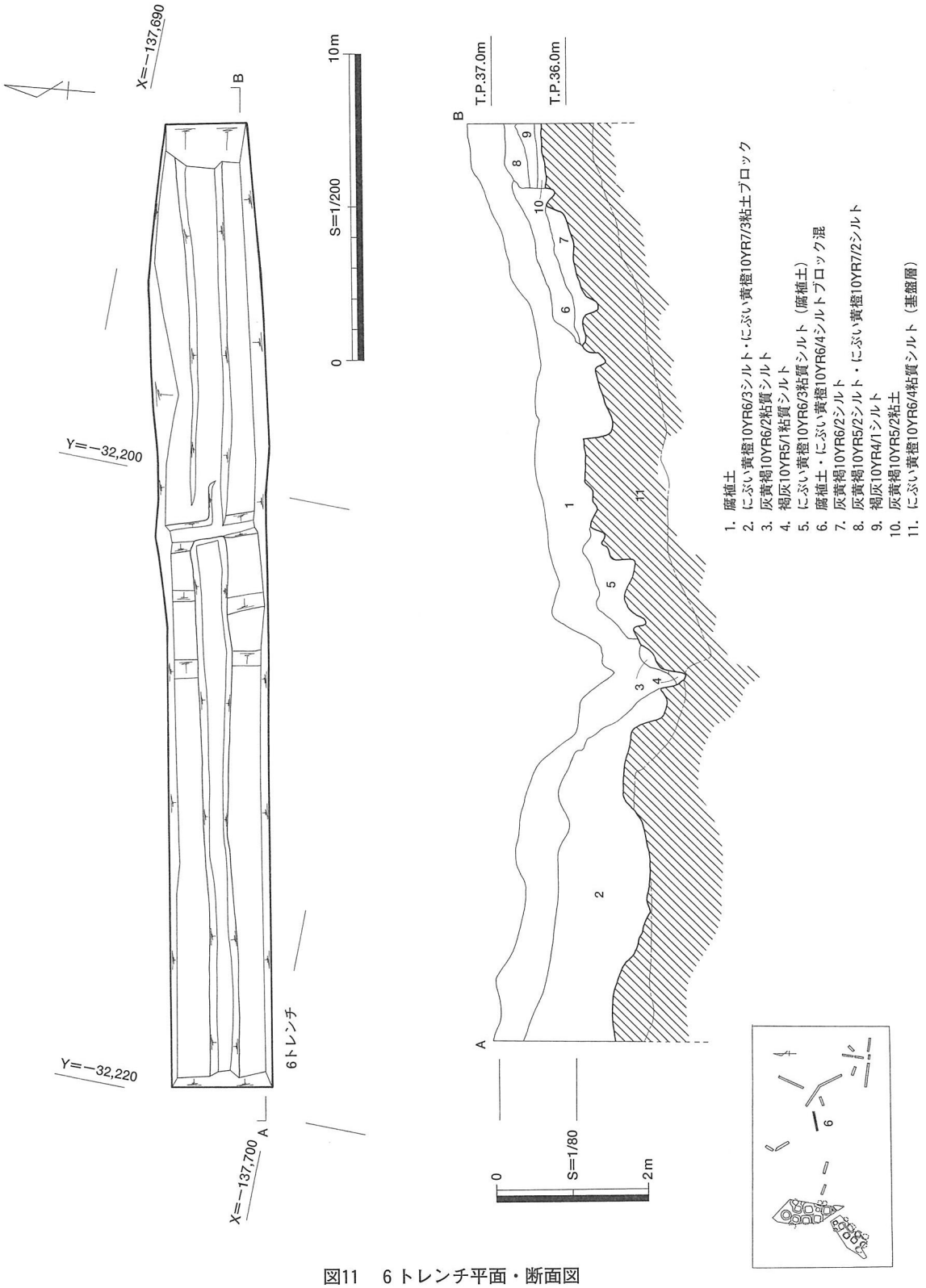
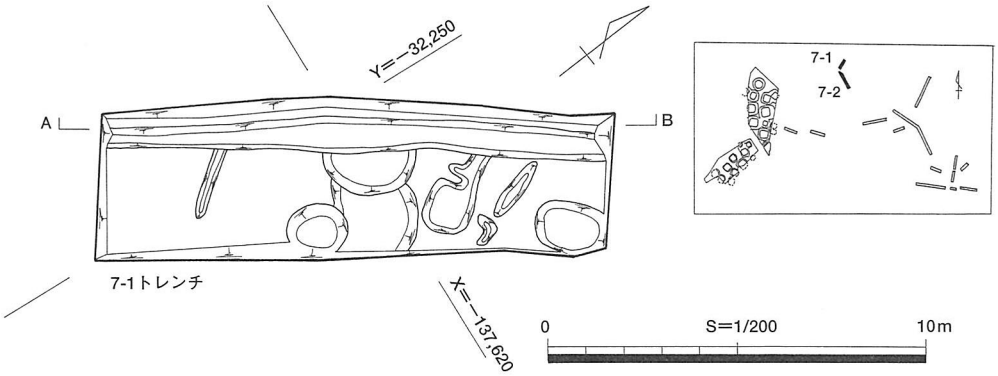
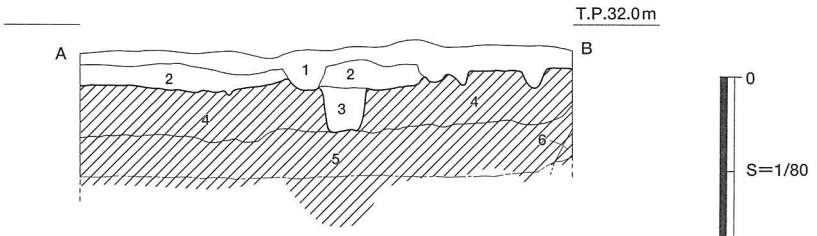
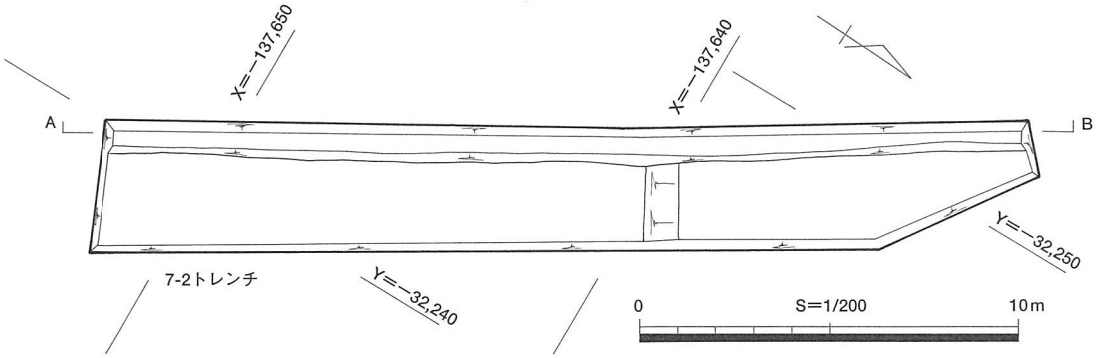


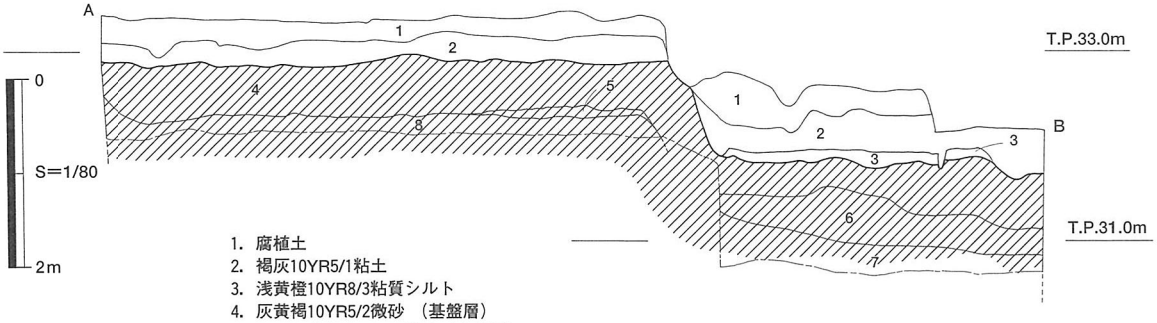
図11　6トレンチ平面・断面図





1. 腐植土
2. にぶい黄橙10YR6/4シルト・褐灰10YR5/1シルト
3. にぶい黄橙10YR6/4シルト・褐灰10YR5/1シルトブロック
4. にぶい黄橙10YR6/4シルト・粗砂（基盤層）
5. にぶい黄橙10YR7/3微砂・粗砂（基盤層）
6. 灰白10YR8/1シルト（基盤層）





1. 腐植土
2. 褐灰10YR5/1粘土
3. 浅黄橙10YR8/3粘質シルト
4. 灰黄褐10YR5/2微砂 （基盤層）
5. にぶい黄橙10YR7/3粘土（基盤層）
6. 灰白10YR8/2シルト・灰黄褐10YR6/2細砂（基盤層）
7. にぶい橙7.5YR7/3微砂（基盤層）
8. にぶい黄橙10YR7/3微砂（基盤層）

図12　７－１・７－２トレンチ平面・断面図

谷部分は厚さ約0.1mの褐灰色～灰黄褐色の粘土が水平に４層観察でき、近世から現代に谷部分の造成が行われたことが考えられる。下層に黄褐色粗砂の基盤層を高さT.P.約36.4mで検出した。両側斜面には厚さ0.5～1.0mの腐植土層、その下部には約0.2mの褐灰色粗砂の崩落土があり、さらに下層から灰白色粘土・黄褐色シルトの基盤層を検出した。遺物は出土していない。

６トレンチ（図11、図版２－２）

谷部分と西側にやや上がる斜面にかけて、長さ約30mのトレンチを東西方向に設定した。Y=－32,200付近には現代の水路が南北方向に伸びる。厚さ0.4～1.0mの腐植土層があり、その下部には、水路から西側では、にぶい黄橙色シルトとにぶい黄橙色粘土ブロックが混じる層が厚さ約1.0mみられる。トレンチ東端ではT.P.36.4mの高さに褐灰色シルトの耕作土が観察でき、近世～現代に造成されたことが考えられる。その下層からは、にぶい黄橙色粘質シルトの基盤層を検出した。西端部で高さT.P.約36.2mを測る。遺物は出土していない。

７トレンチ（図12、図版２－３）

谷部分の平坦部に現水路を挟んで　７－１・７－２トレンチを設定した。北側の７－１トレンチは長さ約13m、南側の７－２トレンチは長さ約25mを測る。

７－１トレンチは厚さ0.1～0.2mの腐植土層があり、その下部に厚さ約0.2mの褐灰色シルトとにぶい黄橙色シルトが観察できた。近世～現代の堆積層と考えられる。これらを除去することによりにぶい黄橙色シルトと粗砂を基盤層とする平坦面を高さT.P.約31.3mで検出した。基盤層上面では木の根の痕跡と考えられる窪みを検出した。遺物は出土していない。

７－２トレンチはX=－137,640付近に近世～現代と考えられる造成に伴う約1.0mの段差があり、双方に平坦面を作り出している。北側は厚さ0.2～0.5mの腐植土層、その下部に約0.4mの褐灰色粘土、さらに下部に0.1mの浅黄橙色粘質シルトが観察された。これらを除去することにより灰黄褐色微砂を基盤層とする平坦面を検出した。高さT.P.約31.8mを測る。南側は厚さ約0.2mの腐植土層、その下部に約0.2mの褐灰色粘土が観察された。腐植土層除去面で人の足跡を検出した。また、褐灰色粘土を除去することにより灰黄褐色微砂を基盤層とする平坦面を検出した。高さT.P.約32.9mを測る。遺物は出土していない。

８トレンチ（図13、図版２－４・５）

南北方向に伸びる谷の両側斜面に設定した。東側斜面の８－１トレンチは長さ約20m、西側斜面の８－２トレンチは長さ約17mを測る。

８－１トレンチの斜面には厚さ0.1～0.6mの腐植土層があり、下部に厚さ0.2～0.8mの灰黄褐色微砂の崩落土が堆積していた。これらを除去することにより灰白色シルト或いは明褐色微砂の基盤層を検出した。東端でT.P.約40.0m、西端でT.P.約34.4mの高さを測る。この基盤層は造成を受けており、階段状に５箇所の段差が観察できた。遺物は出土していない。

８－２トレンチの斜面には厚さ0.4～0.7mの腐植土層があり、下部には厚さ約0.8mの灰黄色微砂、さらに下部は黒色粘土の盛土を観察した。黒色粘土から近世陶磁器が出土した。これらを除去すると灰白色微砂の基盤層を検出した。トレンチ西端部で高さT.P.約39.2mを測る。

９トレンチ（図14、図版３－１～３）

太秦遺跡・太秦古墳群の遺跡分布範囲に位置し、丘陵上面に位置する。平成13年度調査地に隣接しており、Ｋ１号墳の南東側にあたり、西側周溝と南側周溝を検出した。

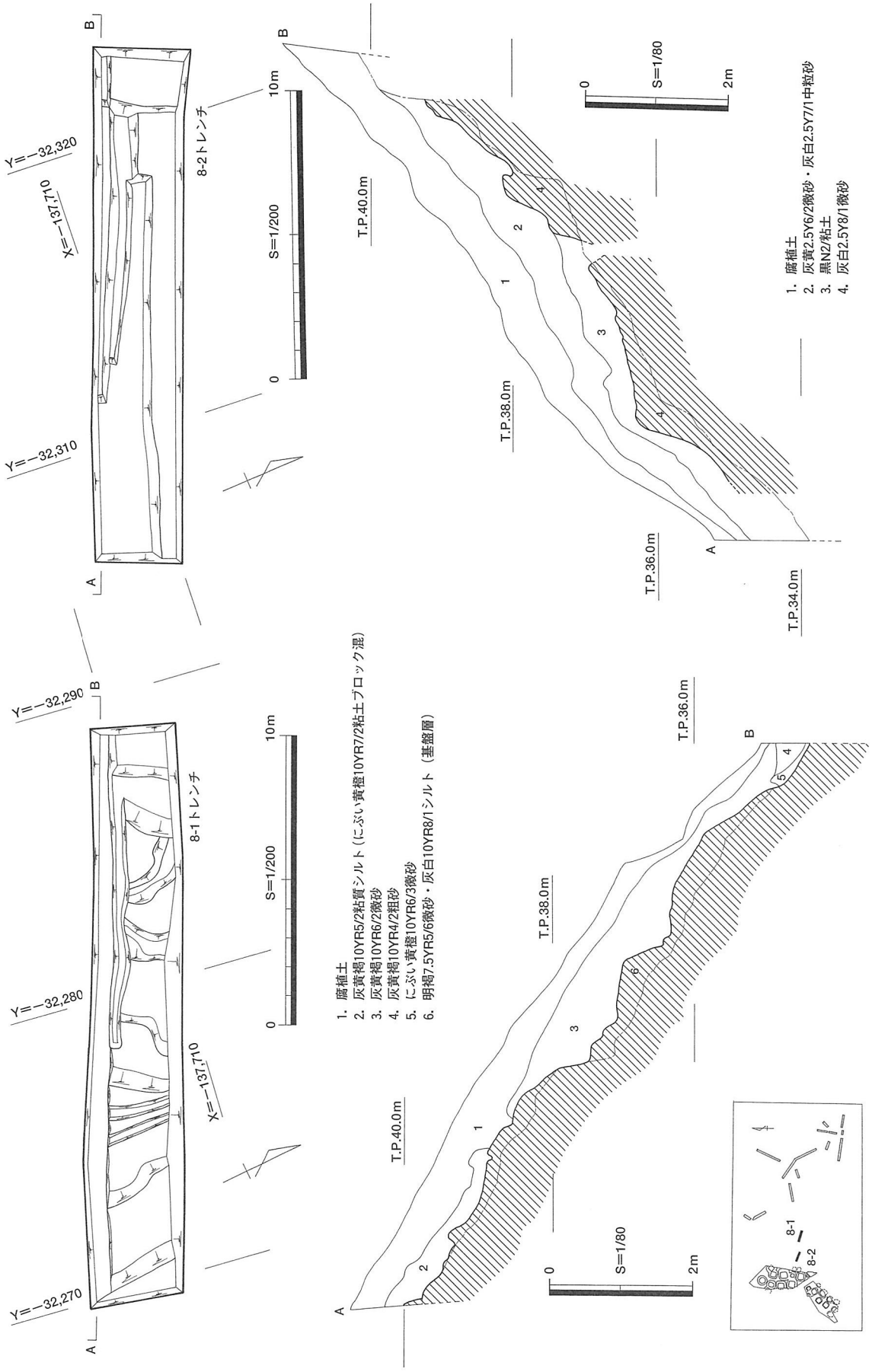


図13　8－1・8－2トレンチ平面・断面図

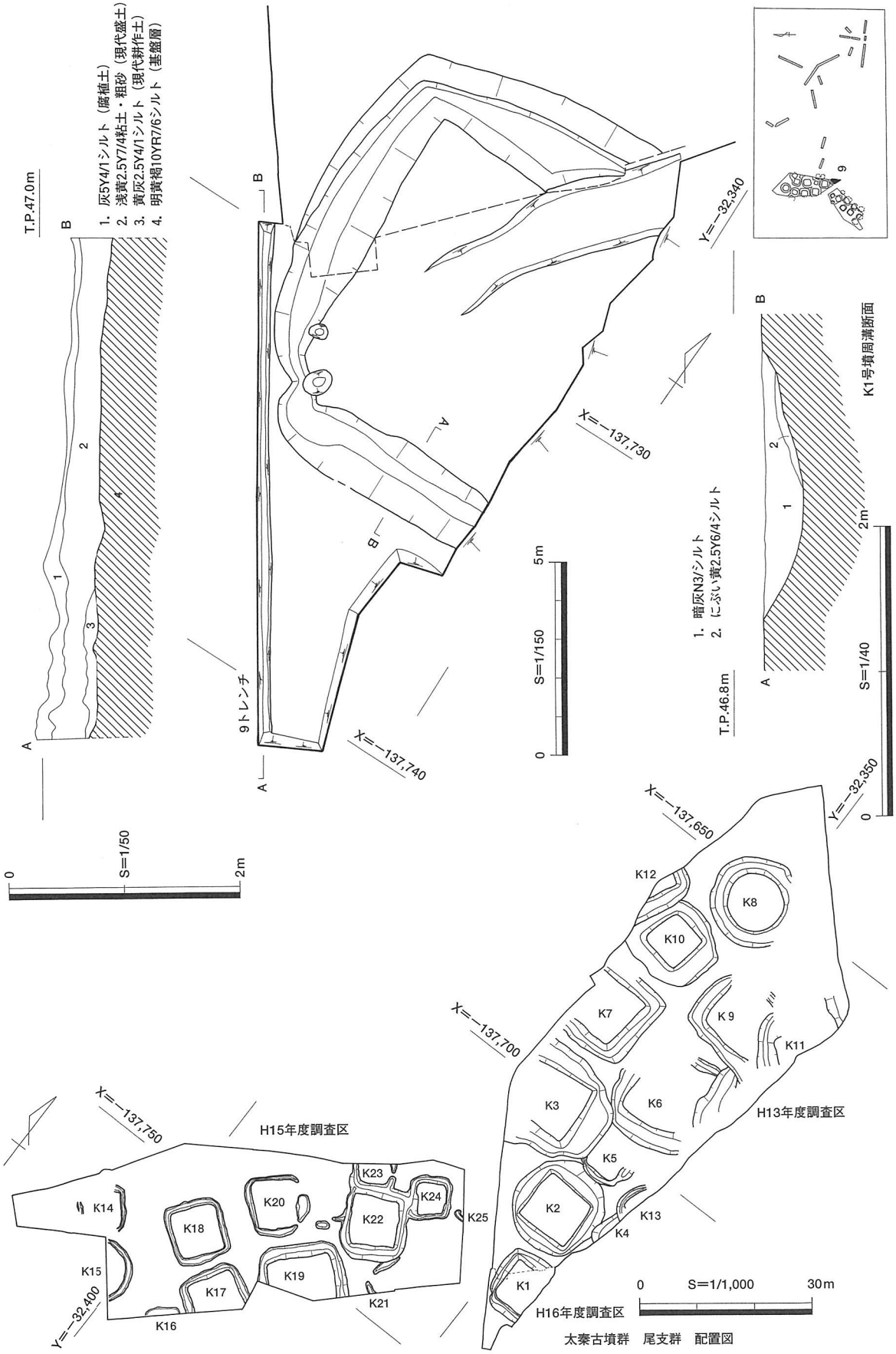


図14　9トレンチ平面・断面図

厚さ0.1mの腐植土層、その下部に約0.2mの現代盛土がある。これらを除去することにより明黄褐色シルトを基盤層とする遺構面を高さT.P.約46.5mで検出した。

周溝の平面形態は、西側周溝の内側ラインは直線を呈し、外側ラインは南西隅に向かって内側へ入り、その部分の幅が細くなっている。北端で幅約1.8m、南西隅で幅約0.5mを測る。深さは約0.2mである。南側周溝は西側周溝とほぼ直角に丘陵斜面に向かって伸び、途切れている。幅約1.7m、深さは約0.2mを測る。埋土は土壌化した暗灰色粘土である。南側周溝の中央部から須恵器壺の破片が1点出土した。

10トレンチ（図9、図版2－6）

2トレンチにおいて溝が検出され、その遺構面の様相を確認するため、2トレンチの東側に長さ約10mのトレンチを設定した。厚さ約0.5mの盛土、約0.1mの褐灰色シルトの旧耕作土、約0.1mの黄灰色シルトがあり、これらを除去することにより、高さT.P.約47.5mの位置に橙色粘土の基盤層を検出した。この基盤層上面において4溝を検出した。攪乱により著しく破壊されているが、東西方向に伸びており、幅約3.5m、深さ約0.4mを測る。埋土は土壌化した褐灰色粘土が下層部分に堆積し、その上層に灰黄褐色シルトが観察できる。遺物は出土していない。

11トレンチ（図4）

2トレンチにおいて溝が検出され、その遺構面の様相を確認するため、2トレンチの西側にも長さ約15mの11トレンチを設定した。高さT.P.約46.0mまで機械掘削を行ったが、すべて盛土であり、調査対象土層を確認することはできなかった。遺物は出土していない。

3．小結

2・10トレンチから溝を検出した。時期は不明であるが、埋土の状況から中世以前の可能性が考えられる。北西－南東方向に伸びる丘陵上に遺構が存在することが判明した。なお、10トレンチの4溝、2トレンチの2溝・3溝が同一の溝であるかは不明確である（図15）。

3トレンチからは須恵器が出土したが、遺構は確認できなかった。ほぼ完形で6世紀後半に属する坏身であり、古墳が存在していたことも考えておきたい。

9トレンチは周知の太秦遺跡・太秦古墳群範囲内に位置しており、平成13年度調査地に隣接する。今回の調査によりK1号墳の南東側半分を検出することができ、その結果、墳形が従来、想定されていた前方後円形ではなく、一辺約9.5mの方形であることが明らかになった。埋葬施設は確認できなかった。

参考文献
(1) 『太秦古墳群』（財）大阪府文化財センター調査報告書　第99集　2003　財団法人 大阪府文化財センター
(2) 市本芳三 2004.9 『太秦遺跡の調査』「大阪府埋蔵文化財研究会（第49回）資料」 財団法人　大阪府文化財センター

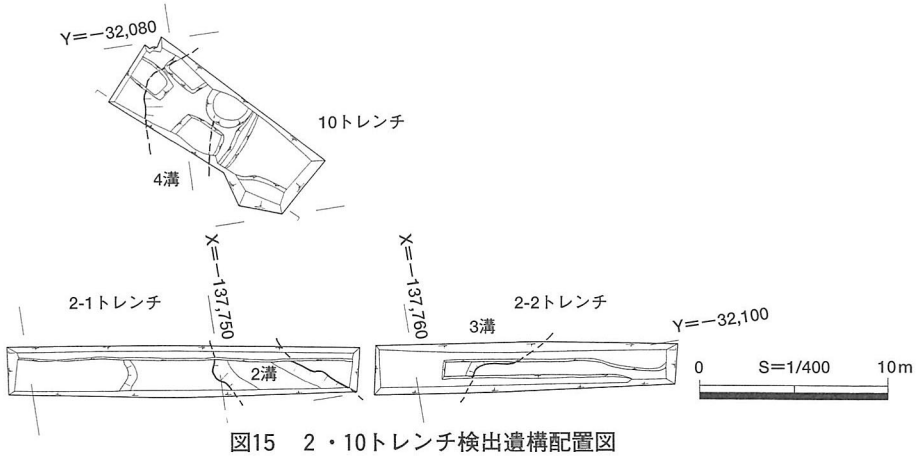


図15　2・10トレンチ検出遺構配置図

第２節　大尾遺跡〔大尾遺跡04-１〕

１．調査に至る経緯と調査方法

大尾遺跡は大阪府寝屋川市国守町に所在する。当該地は一般国道１号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路建設予定地に含まれており、それに先立ち当センターが発掘調査を行った。平成12年度の小路遺跡確認調査では41箇所のトレンチを設定し調査した結果、初めて当遺跡が周知された[(1)]。続いて平成14年度に大尾遺跡の範囲確認調査をし、平成13年度と15年度には大尾遺跡の本調査を行い、弥生時代から近世にかけての遺構を検出した[(2)]。主な遺構として弥生時代では竪穴住居跡、方形周溝墓群とそれに伴う木棺墓、土壙墓、溝、古墳時代では竪穴住居跡、土坑、木棺墓、古代では掘立柱建物跡、塀跡、火葬墓、土坑、溝、中世では火葬墓、溝があげられる（図17）。

これらの調査結果に基づき、当センターは国土交通省近畿地方整備局　浪速国道事務所の委託を受け、日本道路公団関西支社　枚方工事事務所の協力、大阪府教育委員会の指導のもと平成16年５月から９月までの間、埋蔵文化財発掘調査を実施した。調査面積は849㎡である。これまでの調査面積は、平成13年度調査が4,970㎡、平成15年度調査が4,143㎡であり、延べ9,962㎡におよぶ。

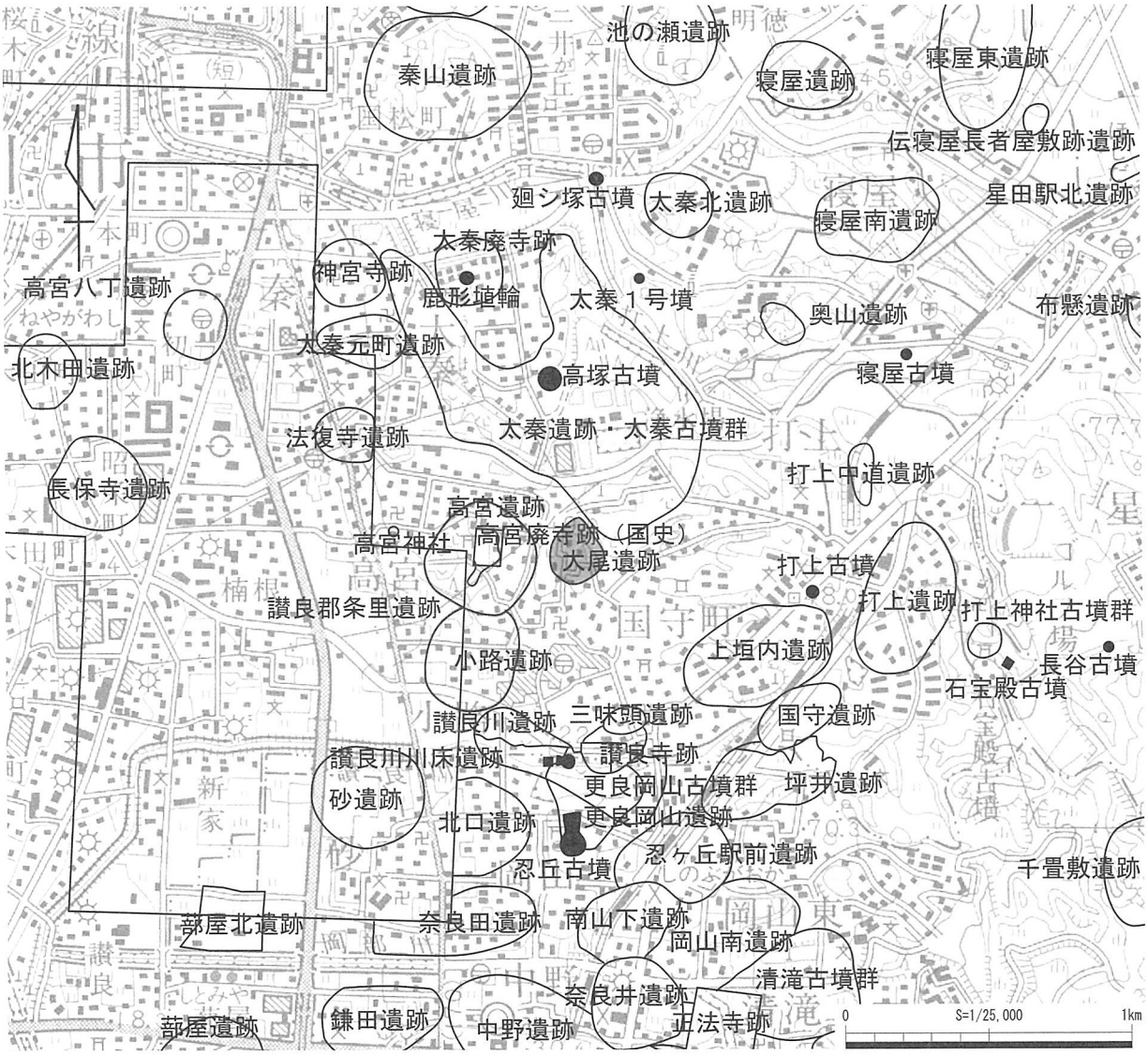


図16　調査地と周辺遺跡

調査対象地は、道路建設予定地のうち、平成13年度調査で調査が出来なかった現在使われている道路や宅地跡である。このため調査に先立って、既調査地へ迂回路を設置し、通行の切り替えを行った。また現有道路であったため水道本管が埋設されており、電気・電話線が架空設置されていた。水道本管については、調査前にあらかじめ試掘を行い、埋設深度を確認した上で現状のまま残した形で調査を実施し、消火栓部分を調査対象地から外した。架空設置の電気・電話線に関しては電柱から半径２ｍ控えて調査を行った。

調査区は、北から南にかけて道路の形状を考慮し、１から５区に分けて設定した。但し、１区の北と５区の南は迂回路にかかる部分のため調査することが出来なかった。また、２区と５区に関しては電柱からの控えのため、北側調査区と南側調査区に分かれている。掘削は、近・現代のアスファルト、盛土を機械により除去したのち、最終遺構面である地山面までを人力で掘り下げて遺構を検出し、遺物を取り上げた。調査では必要に応じ、平面図・断面図や写真撮影による記録を行った。

また、調査を進めるにあたり、当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』[(3)]を基に、遺構登録・遺物登録・遺構実測を行った。

地区割りは、平面直角座標系（日本測地系）を基準とし、今回の調査ではⅠ～Ⅵの６段階のうちⅠ～Ⅳ区画を使用している。この区画方法は大阪府下全域の共通の地区割である。第Ⅰ区画は１万分の１の地形図を基にし、第Ⅱ区画は2500分の１を基にしている。詳細についてはここでは割愛するが、詳しくは第１節（図４）を参照していただきたい。

遺構番号は遺構の種類別にそれぞれ１から番号を遺構名称の後に付した（例：溝１・墓壙１など）。また、遺構の中で建物や周溝墓などまとまる遺構については遺構番号とは別に遺構名称の後に番号を付した。こちらも種類別にそれぞれ１から番号を付している（例：周溝墓１・建物１）。なお、本書掲載遺構番号は、調査時に付けた遺構番号とは違うため対応表（表１）にて明示しておく。

遺構・調査区平面図については、単点測量の座標杭を設置し、杭を基準に図面を作成した。縮尺は必要に応じ、平面図は100分の１・50分の１・10分の１・１分の１、断面図は20分の１・１分の１ で実測している。遺物の取り上げは、先に述べた遺構番号と地区割り（Ⅰ～Ⅳ）を使用して行った（図18）。尚、地区割りの表記については第Ⅲ区画と第Ⅳ区画を用い、アルファベットの後に番号を付している（例：Ｄ６－ａ２）。

２．調査成果

今回の調査区は、平成13年度調査区に囲まれており、たびたび以前の調査と併せて説明することがある。よって、平成13年度調査区と同一遺構名が今回の調査区でも存在し、煩雑になることから以下13年度調査の遺構については、「遺構名（13年度）」と表記する。

１区（図19・20、図版４）

調査地のもっとも北東側に位置する。調査区の規模は東西約6.0～8.0ｍ、南北約18.5ｍである。現地盤高は調査区北端ではT.P.42.9ｍ、南端ではT.P.42.8ｍである。現地盤から30～95㎝掘り下げると遺構検出面になる。層序をみると現地盤から約50㎝盛土（第１層）が堆積し、その下ににぶい黄色極細粒砂、灰オリーブ色極細粒砂（第２層）が10～20㎝ところどころ確認できる。この２層目を除去すると遺構検出面となる。遺構検出面は北と南の高低差が約35㎝と現地盤に比べ急勾配になり、北から南へと下がっていく。これは丘陵の裾に向かって下がっていく地形を反映しているものである。遺構は古墳時代の溝と土壙墓を検出した。

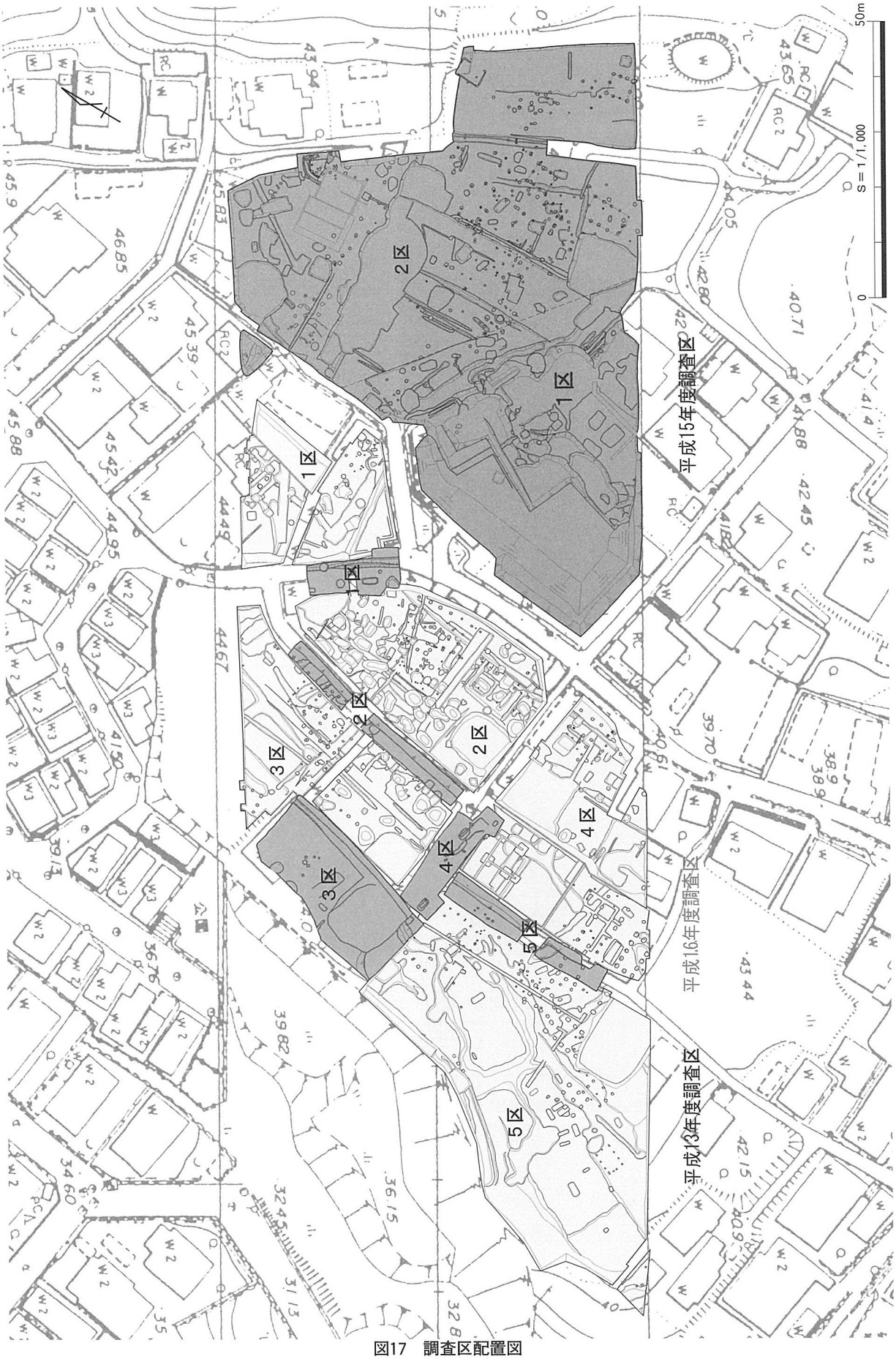


図17　調査区配置図

表１　遺構番号対応表

報告書遺構番号	調査時遺構番号	地区割
１区		
溝１	１溝	C６-j2、D6-a1・a2・b1
墓壙１	２墓壙	D6-a2
２区		
溝２	12溝	D6-a4・a3
溝３	８溝	D6-a4・b4
溝４	５溝	D6-b4
溝５	１溝	D6-b4
塀１	２土坑、３・12・13・14柱穴	D6-a4・b4
塀２	４・６・13・15柱穴	D6-b4
土坑２	16土坑	D6-d4
土坑３	17土坑	D6-d4
土坑４	18土坑	D6-d4
３区		
溝６	８溝	D6-b7
溝７	４溝	D6-c7・d7

報告書遺構番号	調査時遺構番号	地区割
３区		
溝８	２溝	D6-e7
土坑５	１土坑	D6-c7
土坑６	５土坑	D6-c7・d7
土坑７	３土坑	D6-e7
柱穴群１	７柱穴群	D6-c6・c7
４区		
溝９	３溝	D6-e4・e5
墓壙８	１墓壙	D6-e6
墓壙９	２墓壙	D6-e5
土坑10	４土坑	D6-e5
土坑11	５土坑	D6-e5
５区		
溝10	１溝	D6-g6・h6
建物１	２柱穴列	D6-h6
	３柱穴列	D6-h6

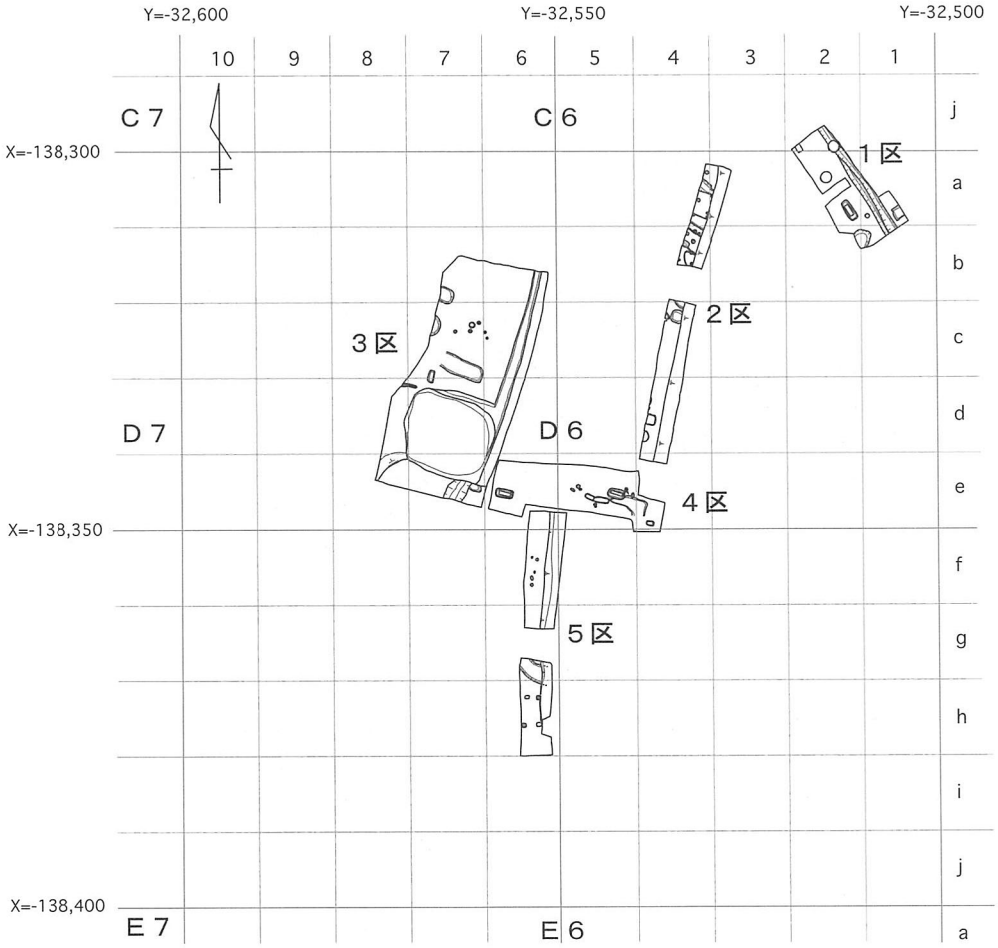


図18　地区割図

古墳時代の遺構

溝１（図版４－２） 調査区の東壁に沿って検出した。規模は検出長18.2m、北端幅0.9m、南端幅1.9m、最深120cmである。溝20（13年度）と同一の溝であり、今回の調査で西肩を確認した。溝の幅は広いところで3.8mになる。横断面はＶ字形を呈し、北西から南東に向かって下がっていく。溝底の北端と南端の比高差は110cmである。溝埋土は、下層から黄褐色シルト、灰黄褐色シルト、オリーブ褐色極細粒砂、にぶい黄褐色極細粒砂の順で堆積しており、北端部の窪みには最下層に粗い砂が堆積している。遺物は下層より６世紀から７世紀と思われる須恵器の甕体部２片が出土した(図31－47)。溝の機能時期を考える上で重要な資料である。溝の東・西側では同時期に比定される掘立柱建物跡が数棟検出されており、主に丘陵上部からの排水の機能を果たしていたと考えられる。また、区画溝として機能していた可能性がある。

墓壙１（巻頭図版４－１・２、図19、図版４－３） 調査区南半部で検出した。時期については、遺物が出土していないため明らかでない。しかし、木棺周囲に貼り付けたと考えられる褐灰色粘土が検出されたことなど墓壙１（13年度）と類似する点があり、以前の報告にならい、古墳時代の墓壙とする。但し、前報告書においても時期については検討の余地があるとしている。

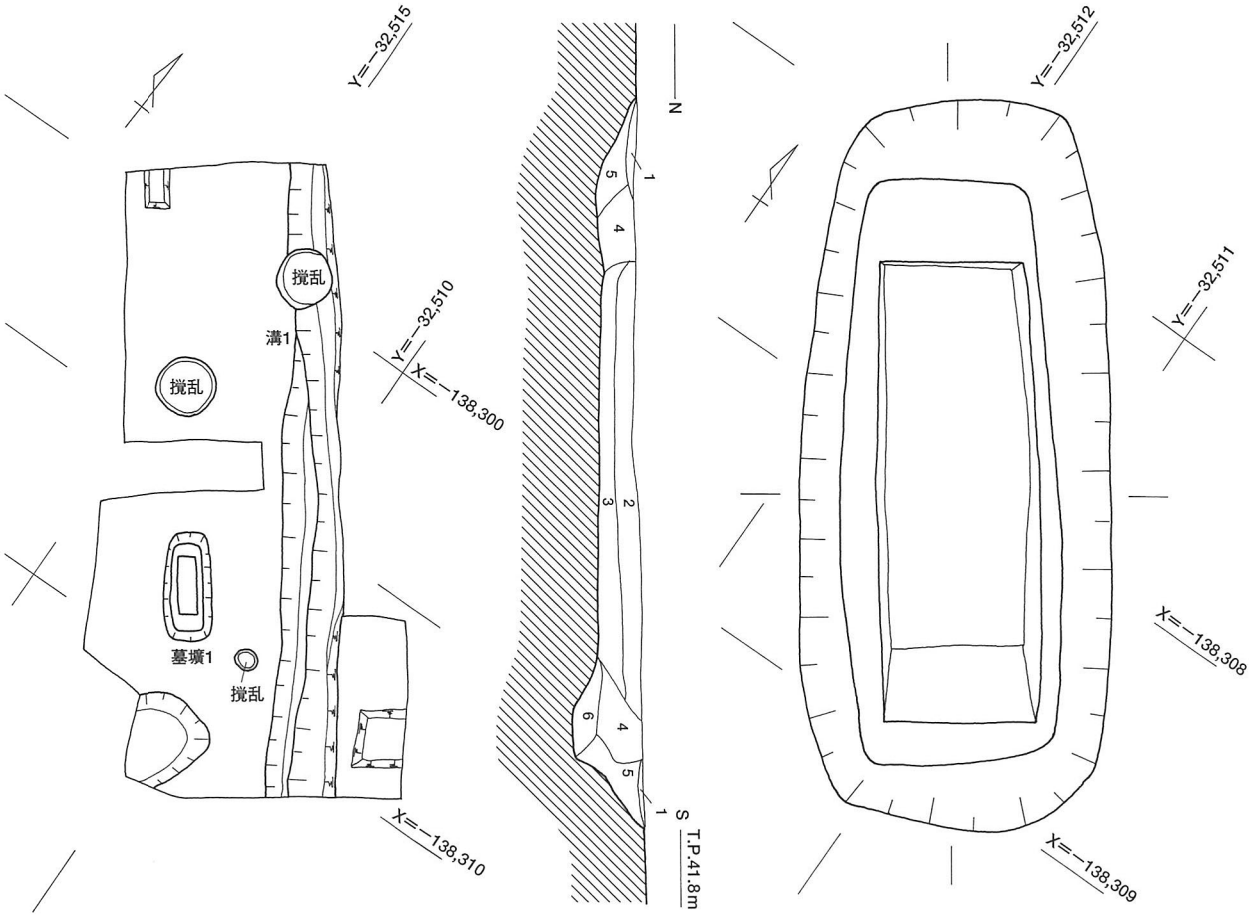
墓壙の掘形平面形は全長2.9m、北幅1.0m、南幅1.2mの隅丸長方形を呈する。残存する最深は約28cmである。木棺自体は残存していなかったが、木棺内の埋土と墓壙を埋めた土との境は、褐灰色粘土がめぐり、平面と断面で明瞭に検出できた。粘土内側の規模は、全長1.8m、幅0.6m、掘形北端から粘土北内側まで0.7m、掘形南端から粘土南内側まで0.4m、掘形東端から粘土東内側まで0.3m、掘形西端から粘土西内側まで0.3mで掘形のほぼ中央に木棺が据えられていた。主軸は座標北から西へ35°振る。褐灰色粘土は、木棺側板および小口板周囲にめぐらしており、木棺底部には認められなかった。墓壙内の粘土分布範囲は東西長0.6m、南北長1.8m、高さ15cmでその粘土の様相は北小口板側粘土の北側が墓壙に沿って斜めに立ち上がるのに対して南側（木棺側）は真っ直ぐに立ち上がる。粘土の幅はそれぞれ北小口板側が0.3m、南小口板側が0.1～0.2m、東側板が0.1m、西側板が0.1～0.2mで北・西側に比べ南・東側の方が粘土を薄く貼っている。木棺を据える際の固定のために使っていたと考えられ、粘土の検出状況は、東西側はやや外側に広がって立ち上がり、北側小口側が垂直に立ち上がるのに対して南側小口側は外側に向かって立ち上がることが分かる。この検出状況から木棺の規模および形状が復原できる。しかし、木棺が腐り、周囲からの土砂流入で埋没する際、粘土が変形した可能性が考えられる。墓壙掘形埋土は黄褐色シルト～極細粒砂で木棺内埋土は下層からにぶい黄橙色シルト、灰黄褐色シルトの２層に分かれる。墓壙内からは遺物は出土していない。この遺構から10m程南にいくと先に述べた墓壙１（13年度）があることを付け加えておきたい。

２区（図21・22、図版５）

１区の南西、４区の北に位置する調査区である。北側と南側に調査区が分かれる。規模は北側調査区が南北14.1m、東西3.4m、南側調査区が南北21.5m、東西3.8mである。現地盤高は調査区北端でT.P.44.5m、南端でT.P.44.3mと南へ緩やかに下がっていく。自然地形においても北から南へと下がっており、それを反映しているものである。現地盤から30～40cm掘り下げると遺構検出面になる。遺構は７世紀後葉から８世紀前葉の塀、弥生時代の溝と土坑を検出した。

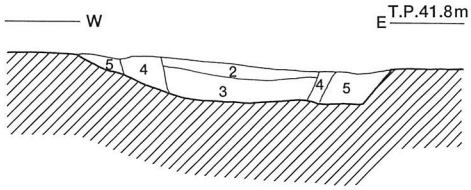
７世紀後葉から８世紀前葉の遺構

塀１ 北側調査区の西端で検出した。柱間４間の南北に延びる塀である。柱間の間隔から本調査区内で



1区平面図

0 S=1/200 5m

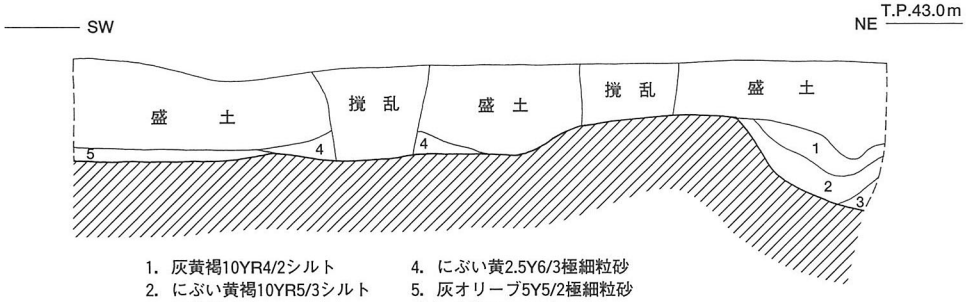


1. 黄褐10YR5/6極細粒砂
2. 灰黄褐2.5Y5/2シルト
3. にぶい黄橙2.5Y6/4シルト
4. 褐灰7.5YR6/1粘土
5. 黄褐2.5Y5/4極細粒砂
6. 黄褐2.5Y5/3シルト

地山 黄褐10YR5/8シルト

墓壙1平面・断面図

0 S=1/30 1m



1. 灰黄褐10YR4/2シルト
2. にぶい黄褐10YR5/3シルト
3. 灰黄褐10YR5/2シルト
4. にぶい黄2.5Y6/3極細粒砂
5. 灰オリーブ5Y5/2極細粒砂

地山 赤橙10YR6/8シルト

0 S=1/50 3m

1区北壁断面図

図19　1区全体図、墓壙1平面・断面図

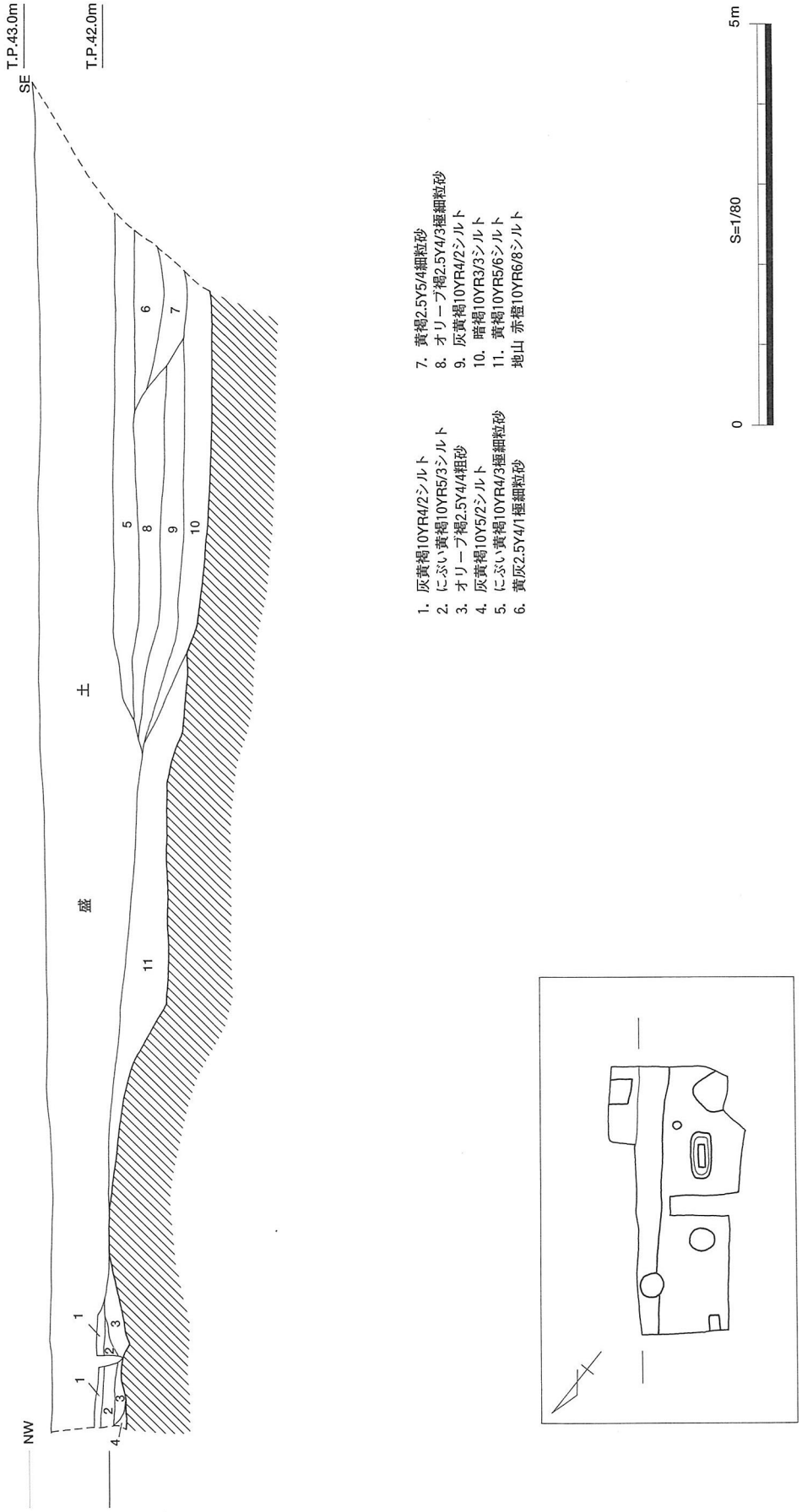


図20　1区東壁土層断面図

6間あったと推定する。また、この柱列は南北へ調査区外に延びる可能性がある。規模は径約0.4m、深さ5～12cmである。柱間は2.0～3.0m間隔で、軸を座標北から14°東に振る。柱掘形は円形または楕円形を呈する。遺物は弥生土器の細片が出土した。既往の調査成果から古代の遺構と考えられる。

塀2　塀1の東側で柱穴4基を検出した。柱間3間の南北に延びる塀である。検出した柱列は3間であるがさらに南へ延びる可能性がある。規模は径約0.4～0.5m、深さ9～17cmである。柱間は1.5m間隔で、軸を座標北から5.5°東に振る。柱掘形は円形を呈する。遺物は弥生土器の細片が出土した。既往の調査成果から古代の遺構と考えられる。

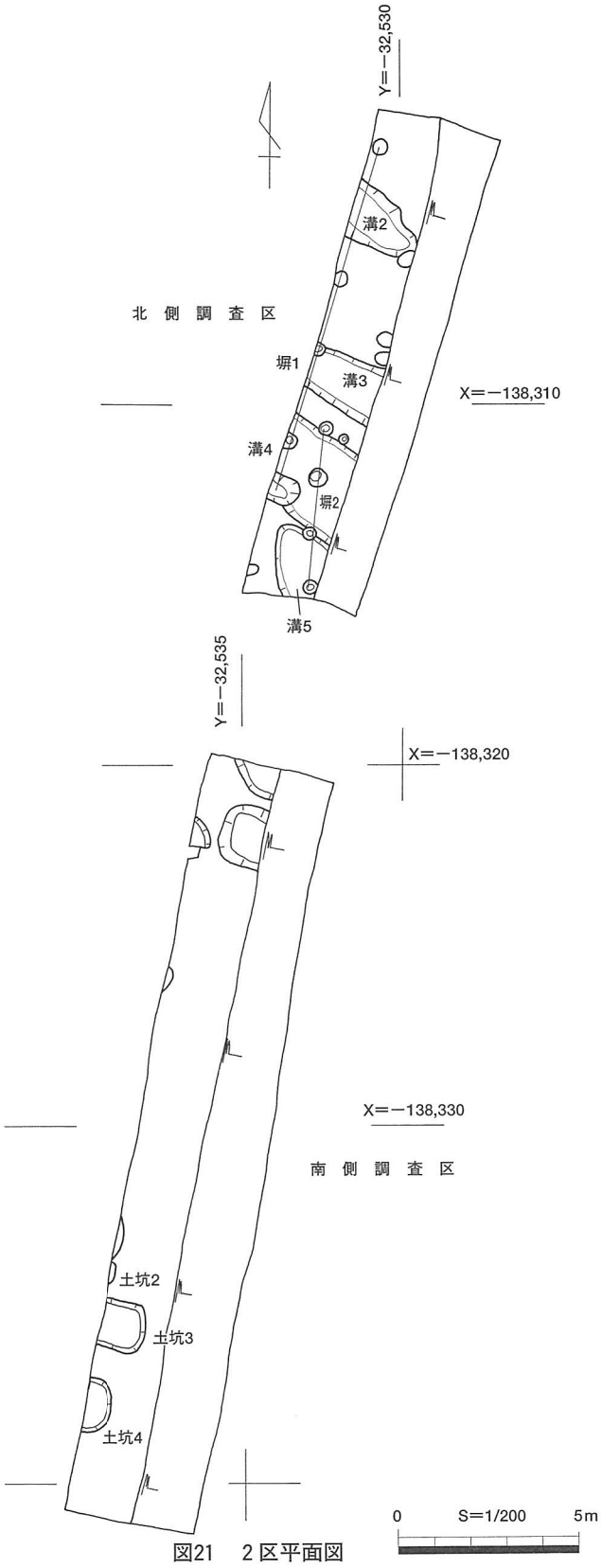


図21　2区平面図

弥生時代中期後半の遺構

溝2　北側調査区の東壁際で検出した。規模は検出長1.8m、幅1.7m、深さ18cmで東西方向に延びる。溝の主軸は後で述べる溝3・溝4とほぼ平行する。西は墓壙3（13年度）に続き（註1）、東端は後世の削平を受けており確認できなかったが溝の規模は全長3.0m以上、最大幅1.75m、最深18cmに復原できる。

幅は北西側で広く、南東側で狭まる。溝の機能についてであるが周溝墓6と周溝墓38の共有溝の可能性がある。遺物は出土していない。

溝3　北側調査区の南部で検出した周溝墓7の北辺溝である。規模は検出長2.0m、幅1.7m、深さ16cmで東西に延びる。溝の主軸は溝2・溝4とほぼ平行している。西は溝9（13年度）に続き、東端は後世の削平を受けており、確認できなかったが溝の規模は全長6.6m以上、最大幅1.7m、最深16cmに復原できる。幅は北西側で狭まり、南東側で広くなる。遺物は出土していない。

溝4（図22、図版5－4）　北側調査区の中央南寄りで検出した周溝墓38の南辺溝である。規模は検出長2.2m、幅2.5m、深さ約20cmで東西に延びる。溝の主軸は先に述べた溝2・溝3とほぼ平行している。西は溝13（13年度）に続き、東端は後世の削平により確認できなかったが溝の規模は全長6.0m以上、最大幅2.8m、最深23cmに復原できる。前報告書において2条の溝が重複

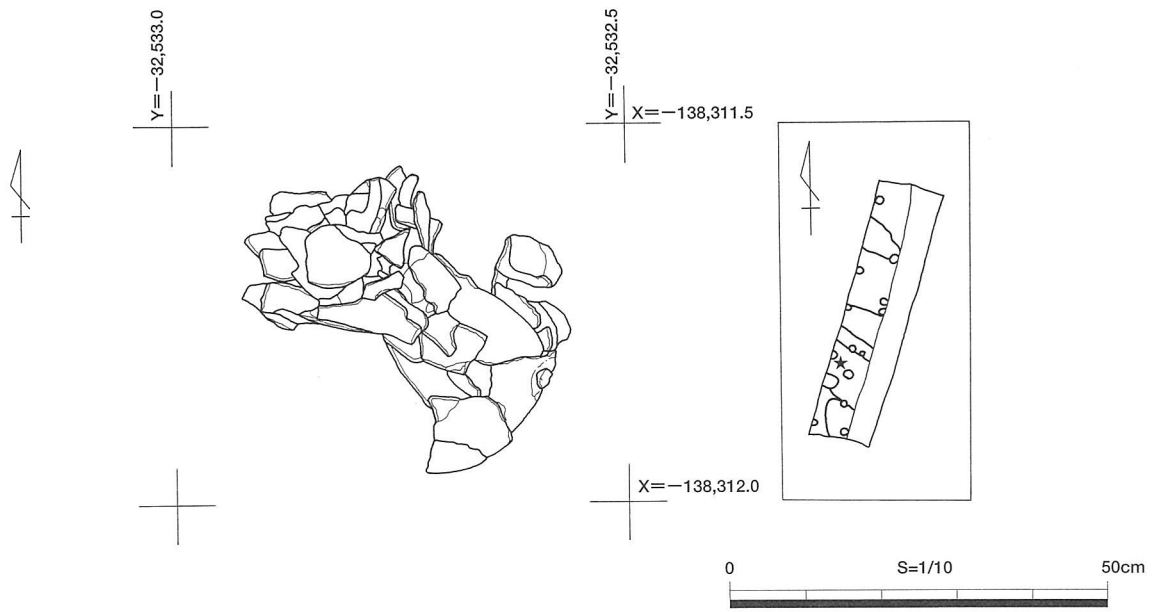


図22　2区溝4土器出土状況図

しているとあり、今回の調査でも平面の検出段階から重複する2条の溝を確認することができた。幅は北西側・南東側共にほぼ同じである。溝の底では炭が堆積し、炭層の上面で弥生土器壺（図29－1、図版11－1）が1個体出土した（図22）。

溝5　北側調査区の南側で検出した周溝墓38の南辺溝である。規模は検出長2.0m、幅1.7m、深さ13cmで東西に延びる。4溝と接した状況で確認され、接する部分は溝がやや浅くなる。溝の主軸は溝2・溝3・溝4と比べ南へ振る。本調査区では西端は確認できたが東端は確認できず、さらに東へ延びていたと推定する。また、検出状況などを含めて考えると4溝を含む重複する3条の溝であった可能性が高い。溝は溝底部に炭層が確認され、弥生土器壺が5個体以上出土した。

土坑2　南側調査区南半の西壁寄りで検出した。周溝墓12の墓壙の可能性がある。規模は検出長0.1m、幅0.6m、深さ4cmで土坑の東端を確認した。西は土坑4(13年度)へ続き、全長2.5m、幅0.9m、深さ12cmに復原できる。主軸は座標西から北に約21°振る。埋土は2層に分かれ、下層から地山ブロックを多く含む黄褐色シルト、下層に比べ地山ブロック含有量が少ない黄褐色シルトになる。遺物は出土していない。

土坑3　南側調査区南半の土坑2の南、西壁寄りで検出した。周溝墓12の墓壙の可能性がある。規模は検出長1.2m、幅1.3m、深さ29cmで土坑の東端を確認した。西は土坑5（13年度）へ続き全長3.3m、幅1.3m、深さ34cmに復原できる。主軸は座標西から北に約10°振る。埋土は黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

土坑4　南側調査区南半の土坑3の南、西壁寄りで検出した。周溝墓12の墓壙の可能性がある。規模は検出長0.7m、幅1.5m、深さ47cmで土坑の東端を検出した。西は土坑6（13年度）へ続き全長3.7m以上、幅約1.5m、深さ52cmに復原できる。主軸は座標西から北に約19°振る。埋土は土坑2の上層と同一である。遺物は出土していない。

3区（図23・24、図版6）

2区と4区の西に位置する。規模は南北約32.0m、東西約14.0mである。現地盤高は調査区北東端でT.P.44.4m、北西端でT.P.43.7m、南東端でT.P.44.2m、南西端でT.P.42.8mと東・南へ下がっていく。自

然地形をみると、丘陵上の尾根から谷地形に向かって南東に下がるものと南の丘陵裾に向かって緩やかに下がる位置にこの調査区があることから、地形を反映しているものである。現地盤から15～70cm掘り下げると遺構検出面になり、盛土（第１層）の下には灰色土層（第２層）が堆積している。この層は東から西に向かって徐々に厚くなり、おそらく丘陵上方から流出し、堆積したものと考えられる。第２層を除去することにより遺構検出面が見えた。遺構は、中世の柱穴群、弥生時代の溝と土坑を検出した。弥生時代の溝は周溝の可能性があり、この地区内においても周溝墓が広がっていたものと考えられる。

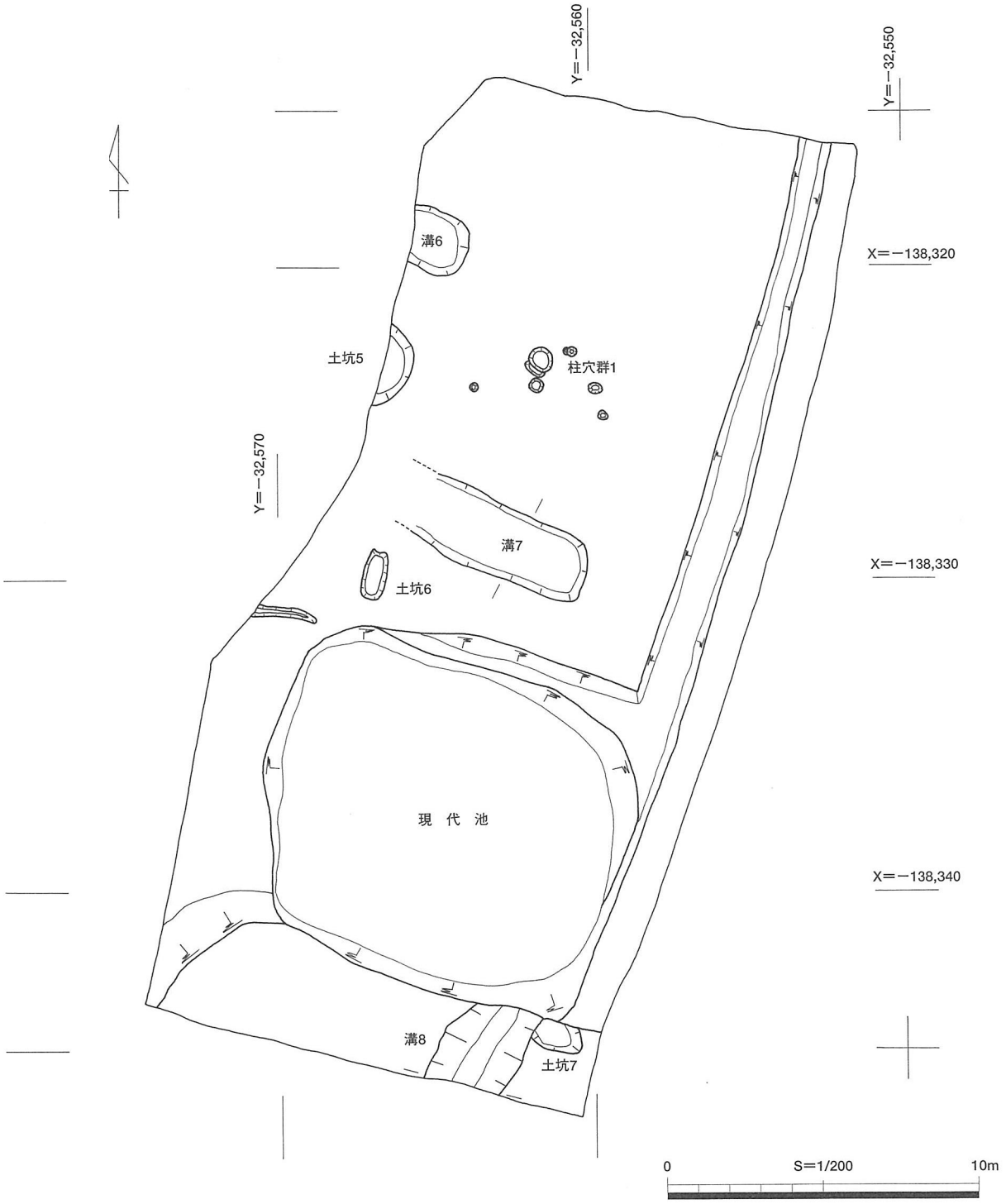


図23　３区平面図

中世の遺構

柱穴群１　調査区中央北寄りで６基確認した。規模は径0.3～0.8mで深さは５～87cmである。平面形は円形、楕円形、隅丸方形とさまざまである。これらは柱列として並ばず、機能は不明である。ところどころ埋土に弥生土器片や須恵器片を包含する柱穴があるが遺構内埋土が３区斜面に堆積する流出土に類似するため、中世以降の遺構の可能性がある。

弥生時代中期後半の遺構

溝６　調査区北側の西壁寄りで検出した。東西にはしる溝で東端は確認できたが、西端は調査区外の谷へと延びており、確認できなかった。規模は検出長約2.0m、幅2.0m、深さ25cmである。埋土の最下層に炭層が認められる。遺物は出土していない。周溝墓40と周溝墓41に伴う共有溝の可能性がある。

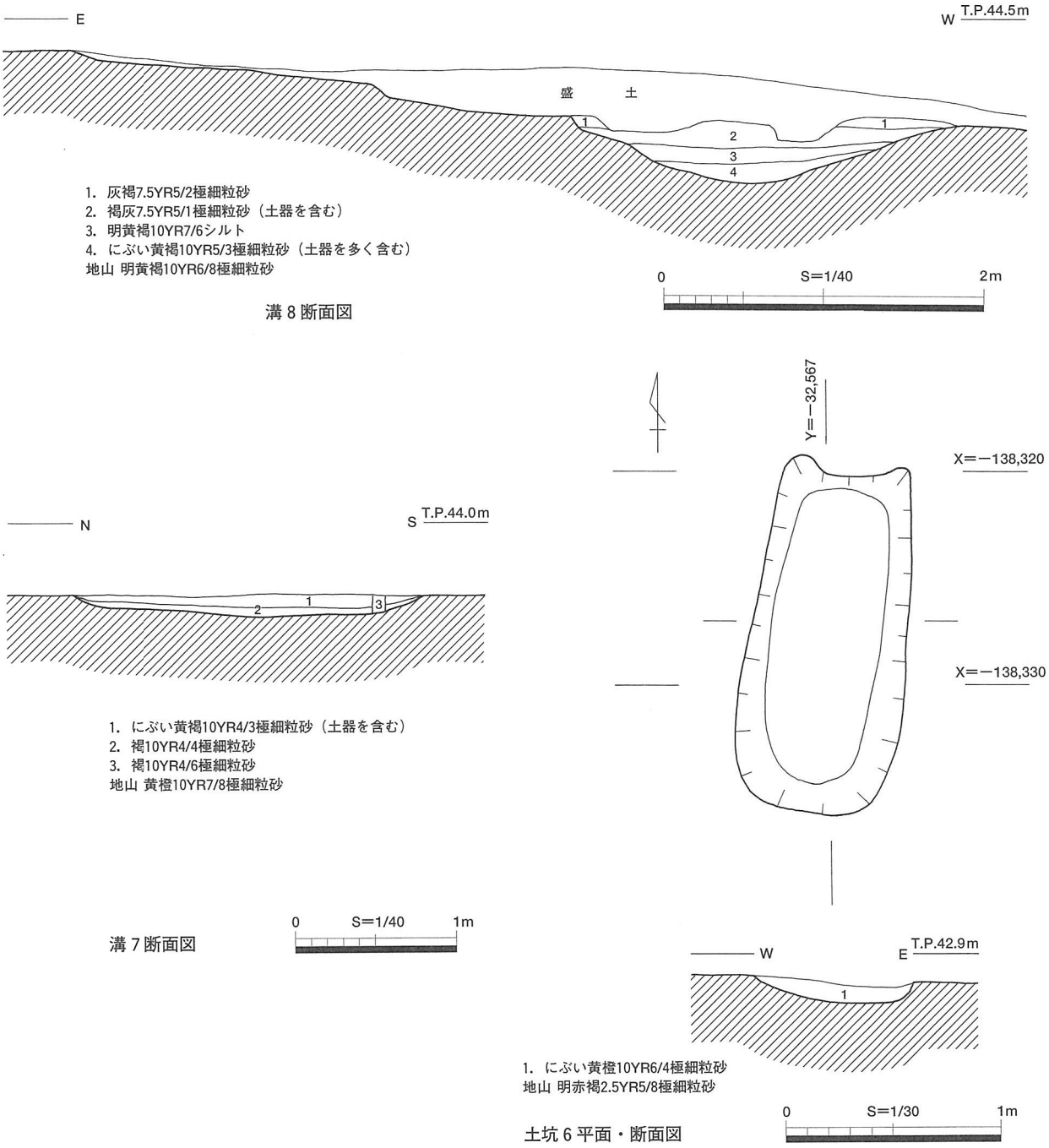


図24　３区溝８断面図、溝７断面図、土坑６平面・断面図

溝７（図24、図版６－４）　調査区中央で検出した。規模は、検出長約5.6m、幅2.2m、深さ15cmである。東西にはしる溝で東端は確認できた。溝は西になるにつれ浅くなり西端が確認できなかった。おそらく後世の削平によるものである。埋土は２層に分かれ、下層から褐色極細粒砂、にぶい黄褐色極細粒砂の順に堆積し、焼土の塊を含んでいた。遺物は、弥生時代の高坏などが出土している。周溝墓41・周溝墓42に伴う共有溝の可能性がある。

溝８（図24、図版６－２）　調査区南端東寄りに位置する周溝墓24と周溝墓25の共有溝である。規模は、検出長約3.0m以上、幅2.5m、深さ約40cmである。溝は南北に延びており、北の延長は後世の削平を受けているために確認できなかった。南の延長は、溝60（13年度）へと続き、規模は全長約8.5m以上、幅1.7～2.5m、最深40cmに復原でき、やや円弧を描いた溝である。埋土は、４層に分かれ、下層から順ににぶい黄褐色極細粒砂、明黄褐色シルト、褐灰色極細粒砂、灰褐色極細粒砂と堆積し、炭を含む。遺物は、弥生時代の壺・甕・高坏・不明土製品などである。

土坑５　調査区北半西寄りで検出した。規模は、長径2.7m、短径0.9m以上、深さ約30cmである。検出した平面は半円形で東端を確認したが調査区外のため西端は確認できなかった。埋土からは弥生土器の壺が出土している。機能については不明であるが周溝墓41の西辺溝か周溝墓41よりさらに西に続く周溝墓がありその周溝であった可能性がある。

土坑６（図24、図版６－５）　調査区中央西寄りで検出した。規模は、全長1.6m、幅0.7m、深さ８cmである。平面形は長方形で主軸を座標北より12°東へ振る。埋土はにぶい黄橙色極細粒砂である。遺物は出土していない。溝７が周溝墓42の周溝である可能性が高く、土坑６は、その位置、規模から周溝墓42の墓壙と思われる。

土坑７（図版６－３）　調査区南東端、溝８の東肩に接して検出した。規模は検出長径1.6m、検出短径4.6m、深さ18cmである。検出した平面は楕円形で西側を溝８に切られる。そのため、遺構の東端は確認できたが西側および北側は確認できなかった。埋土には焼土の塊が含まれていた。遺物は弥生時代の甕が出土した。これは、溝８から出土した甕と同一個体である。機能については不明であるが周溝墓24と周溝墓25の共有溝の可能性がある。

４区の遺構（図25・26・27、図版７・８・９）

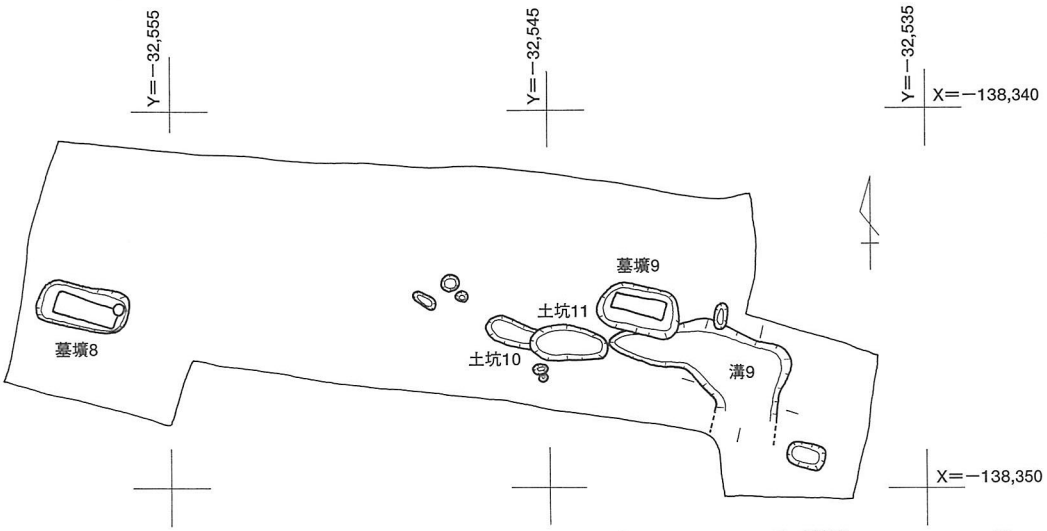
２区と３区の南、５区の北に位置する。規模は南北約5.5～8.0m、東西約22.5mである。現地盤高は調査区北端でT.P.44.3m、南端でT.P.44.4mと平坦である。現地盤から20～40cm掘り下げると地山面になり、遺構を検出した。遺構の内容については地山上面で弥生時代の溝１条と墓壙２基と土坑２基を検出した。

弥生時代中期後半の遺構

溝９（巻頭図版８－１、図25、図版７－４）　調査区の東半で検出した。規模は東西検出長3.1m、南北検出長2.2m、幅1.6～2.2m、深さ12cmである。溝は東西に延び、東端で南に向かって延びており、溝41（13年度）へと続き、規模は東西長3.1m以上、南北長約10.0m、幅1.6～2.2m、最深32cmと復原できる。この遺構は方形周溝墓に伴う溝であり、また今回検出した溝が周溝墓15の北東コーナーにあたることが判明した。底面付近に大量の炭層を包含し、弥生土器の壺と鉢が出土した。

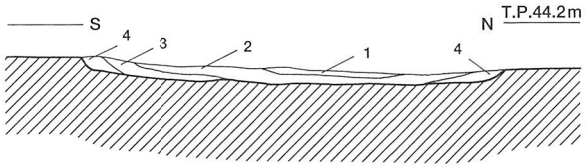
墓壙８（巻頭図版５－１・２、６－１・２、７－１・２、図26・27、図版８－１・２、９－１・２）

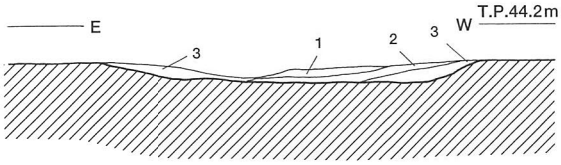
調査区西半で検出した周溝墓24に伴う墓壙である。平面形は隅丸長方形で規模は、全長2.3m、幅1.1m、残存する深さは約８cmである。木棺自体は残存していなかった。しかしながら木棺内の埋土と墓壙



4区平面図

0 S=1/200 10m

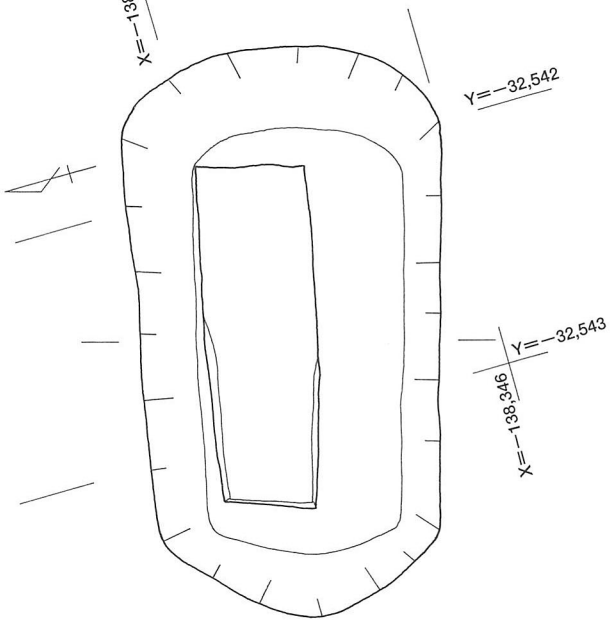


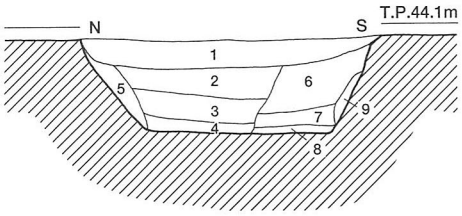


1. 橙7.5YR6/6シルト（炭を少し含む）
2. にぶい褐7.5YR5/3シルト（炭を少し含む）
3. 灰褐7.5YR6/2シルト（炭を多く含む、焼土・黄砂土ブロックを含む）
4. 橙7.5YR6/8シルト
地山 橙5YR6/8極細粒砂

溝9断面図

0 S=1/40 2m



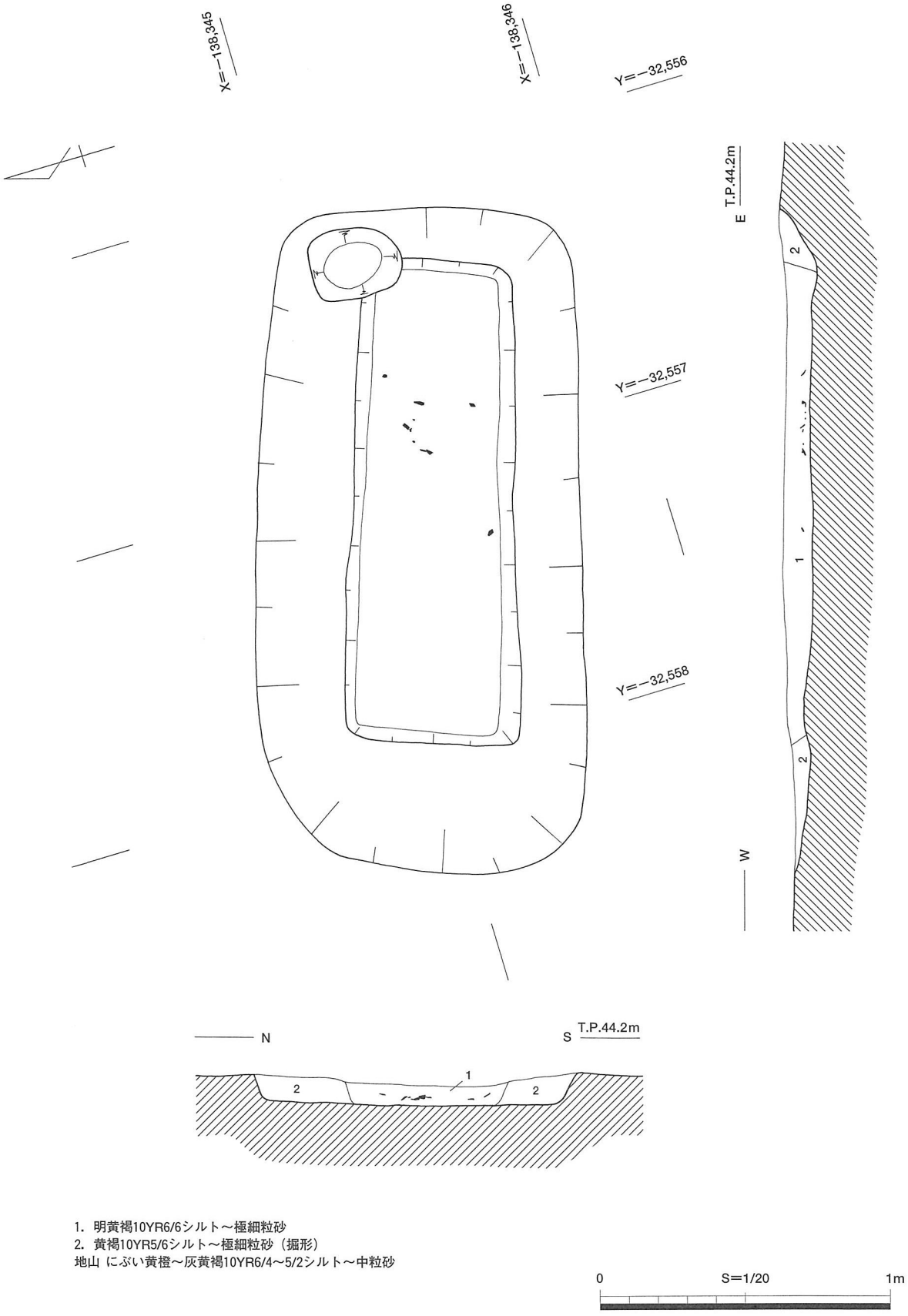


1. にぶい黄橙10YR6/4シルト
2. 黄褐10YR5/6シルト
3. 明黄褐10YR6/8シルト
4. 灰黄褐10YR5/2シルト
5. 明褐7.5YR5/6極細粒砂
6. にぶい黄 2.5Y6/4極細粒砂
7. 黄褐2.5Y5/6極細粒砂
8. にぶい黄褐10YR5/4極細粒砂
9. にぶい黄褐10YR5/3極細粒砂
地山 橙7.5YR6/8極細粒砂

墓壙9平面・断面図

0 S=1/30 1m

図25　4区全体図、溝9断面図、墓壙9平面・断面図



1. 明黄褐10YR6/6シルト～極細粒砂
2. 黄褐10YR5/6シルト～極細粒砂（掘形）
地山 にぶい黄橙～灰黄褐10YR6/4～5/2シルト～中粒砂

0 S=1/20 1m

図26　4区墓壙8平面・断面図

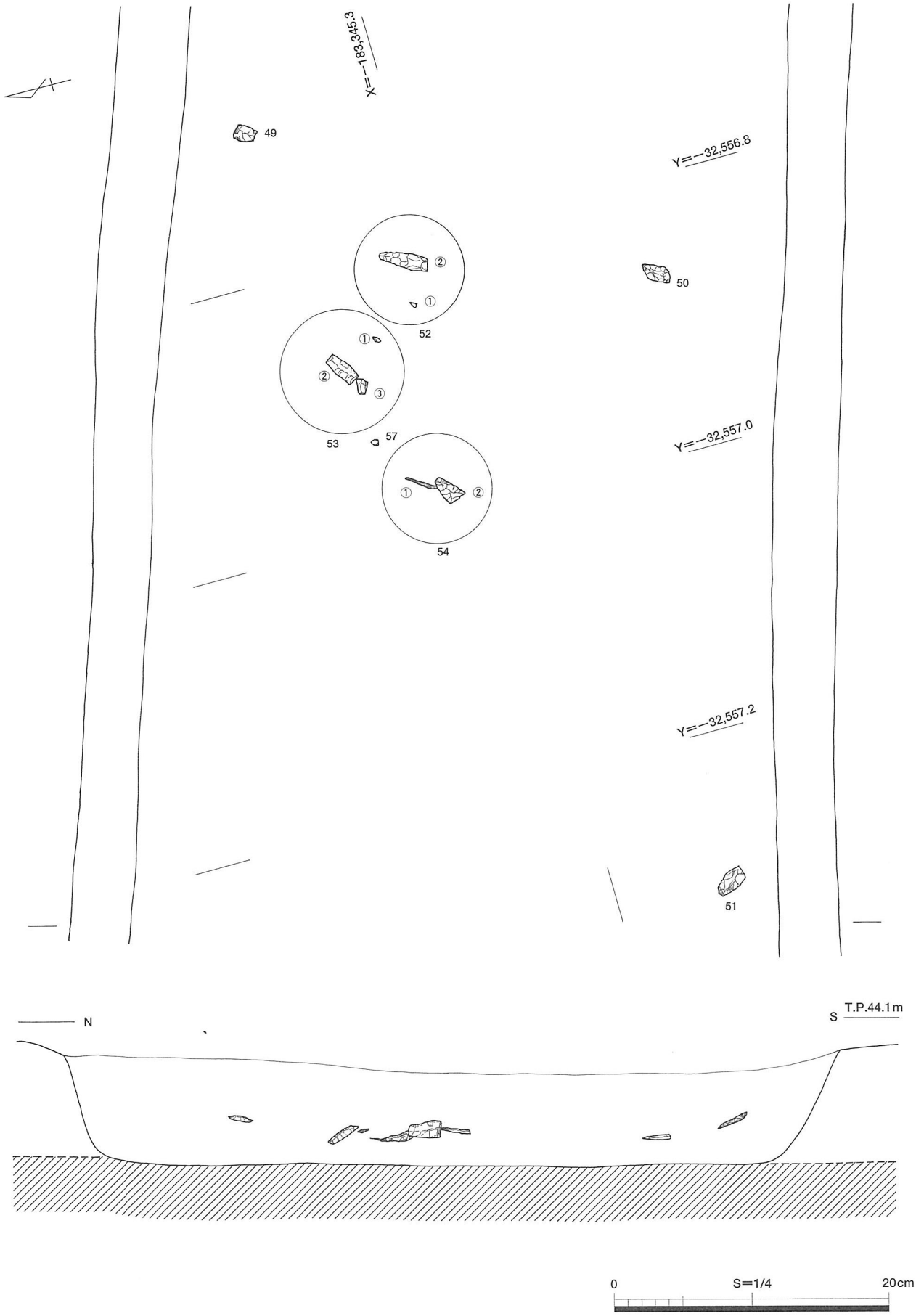


図27　4区墓壙8木棺内石鏃出土位置図

を埋めた土との境は、平面と断面で明瞭に検出できた。木棺部の規模は、全長1.7m、幅0.5m、残存する深さは約８cmである。土層断面を見ると側板・小口板がやや外に向かって立ち上がっていることがわかる。これは木棺が腐り、周囲からの土砂流入で埋没する際、変形した可能性がある。主軸は座標西から約12°北に振っている。また木棺東半部床面辺りからサヌカイト製打製石鏃６～８点分が出土した。

打製石鏃は、ほとんどが先端・基端部を下にし、傾いた状態で出土した。すべて木棺部床面から1.2～3.8cm上に位置する。全ての石鏃は先端・基端部が欠けた状態にあり、２点の先端が見つかり接合できた。また基端部も２点接合できた。石鏃の剥離痕跡から体に射こまれた時に先端・基端部が折れたものと思われる。

出土した石鏃は墓壙中央寄りの東側に分布している。人骨が遺存していないが、石鏃が上半身に射られたものとすると、その出土位置から頭位は東であったと推定できる。その場合仰臥埋葬なら石鏃は遺体の右腕や右胸付近で４点、左胸付近で１点、左腰付近で１点、墓壙内東半埋土から出土したものが２点となる。

墓壙９（巻頭図版８－１・２、図25、図版７－３）　調査区東半の溝９北西隣で検出した。周溝墓15に伴う墓壙である。平面形は隅丸長方形で、規模は、全長2.2m、幅約1.3m、残存する深さは約36cmである。木棺自体は残存していなかったが、木棺内の埋土と墓壙を埋めた土との境は、平面と断面で検出できた。木棺部の規模は、全長1.4m、幅0.5m、残存する深さは約26cmである。この木棺は墓壙内の北半部に寄せて設置されており、土層断面を見ると側板がやや外に向かって立ち上がっていることがわかる。これは、木棺が腐り、周囲からの土砂流入で埋没する際、変形した可能性がある。主軸は座標西から約13°北に振る。

墓壙堀形埋土は下層からにぶい黄褐色極細粒砂、黄褐色極細粒砂、にぶい黄色極細粒砂、にぶい黄橙色シルトの４層に分かれ、木棺内埋土は下層から灰黄褐色シルト、明黄褐色シルト、黄褐色シルトの順で堆積する。墓壙内からは遺物は出土していない。墓壙は溝９と切り合っており、溝９が造られた後に墓壙が掘られた。また墓壙８に比べ残存する深さが深いことや、溝９との切り合いなどを考えると溝９に伴う周溝内墓壙の可能性がある。

土坑10　調査区東半の土坑11に切られる形で検出した。全体は不明であるが残存部の平面形は隅丸長方形を呈している。規模は検出長1.3m、幅0.6m、深さ13cmである。断面は逆台形を呈している。主軸は座標西から約26°北に振る。遺物は出土していない。周溝墓15に伴う墓壙の可能性がある。

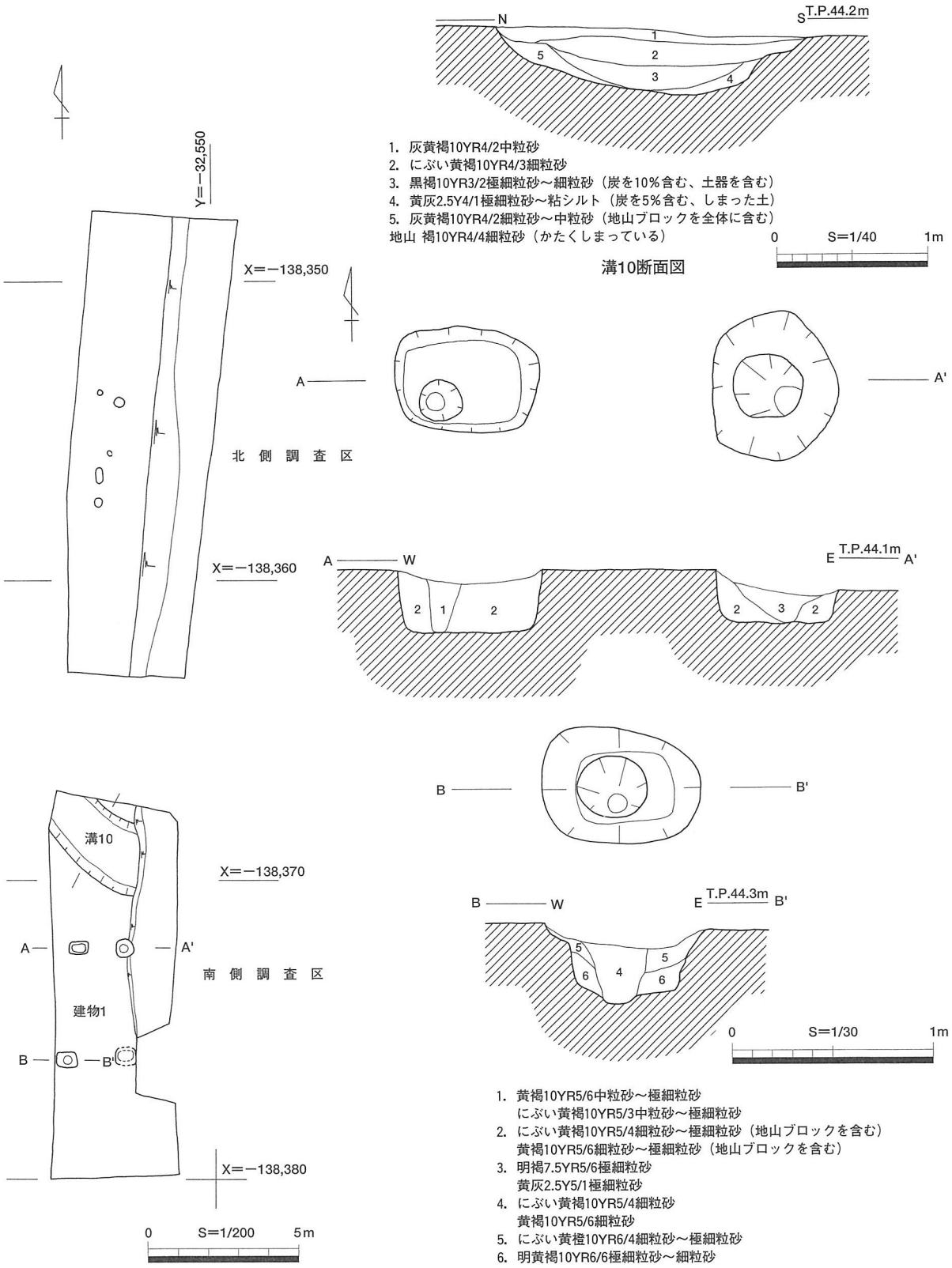
土坑11　調査区東半の溝９の西で検出した。平面形は隅丸長方形で、土坑10と切り合う。規模は全長2.1m、幅0.9m、深さは14cmである。断面は逆台形を呈している。座標西から約６°北に振る。遺物は出土していない。周溝墓15に伴う墓壙の可能性がある。

５区の遺構（図28、図版10）

４区の南に位置し、今回の調査地で最南端にあたる。北側調査区と南側調査区に分かれる。規模は北側が南北15.4m、東西3.9～4.8m、南側が南北約13.0m、東西約4.0mである。現地盤高は調査区北端でT.P.44.4m、南端でT.P.44.2mと平坦である。現地盤から20～30cm掘り下げると地山面になり、遺構を検出した。遺構については地山上面で７世紀後葉から８世紀前葉の建物跡と弥生時代の溝を検出した。

７世紀後葉から８世紀前葉の遺構

建物１（図28）　南側調査区の中央で４基の柱穴を検出した。柱穴の掘形は隅丸方形で規模は一辺約50～80cm、最深40cmである。平成13年度の調査で東西柱列の続きである建物12（13年度）が検出されてい



5区平面図

建物1平面・断面図

図28　5区全体図、溝10断面図、建物1平面・断面図

ることから梁間２間、桁行５間の東西棟であることが判明した。柱間は梁間が2.0m等間、桁行が1.8m等間である。座標北から東に３°振る。遺物は出土していない。

弥生時代中期後半の遺構

溝10（図28、図版10－３・４）　南側調査区の北端で検出した、周溝墓16と周溝墓23の共有溝である。規模は検出長3.6m、幅2.0m、深さ46cmで平面形が北西から南東へ円弧を描く。今回の調査では周溝のコーナー部分を検出した。溝は北西と東へと延び、北西の延長は溝58（13年度）へと続き、東の延長は後世の削平により確認できなかった。しかし、やや溝幅に差があるが溝36（13年度）へと続く可能性がある。これまでの調査成果から、規模が全長約14.0m、幅2.0m、最深46cmに復原できる。

埋土は、下層から地山ブロックを多く含む灰黄褐色細粒砂～中粒砂、少量の炭を含む黄灰色極細粒砂～粘シルト、土器片と炭を含む黒褐色極細粒砂～細粒砂、地山ブロックを含むにぶい黄褐色細粒砂、地山ブロックを含む灰黄褐色中粒砂の順で堆積する。断面観察をすると黒褐色土層と黄灰色土層の下面が土壌化の影響を受けており、最下層である灰黄褐色土には多くの地山ブロックを含み、溝を掘ってすぐに堆積した層と溝として機能していた時に堆積した層がはっきりと分かった。遺物は、弥生土器の壺・甕・高坏が出土した。

３．出土遺物

今回の調査では、主に周溝・墓壙・溝・柱穴から整理用遺物箱３箱分の遺物が出土している。遺物内容を見ると、土器は弥生土器、古墳時代の須恵器、古代の須恵器、中世の瓦質土器が出土しており、石器は弥生時代の石鏃や剥片が出土している。遺物全体のうち、弥生土器が多く、周溝からの出土が目立つ。遺物のほとんどが細片で、図示出来る遺物は、50点ほどである。以下、時期・遺構ごとに遺物をみていく。土器に関しては、一覧表（表２）を付す。

弥生時代中期後半

周溝内出土遺物

溝４（図29－１、図版11－１）　弥生土器壺（１）が出土した。溝４は周溝墓38の南辺溝で、溝の中央で口縁部を東に、底部を西に向けてほぼ完形で出土した。しかし、整理作業で、口縁部・体部・底部全て揃っているがところどころ土器片が無いため１個体に接合できなかった。おそらく、周溝墓の墳丘に置かれていた土器が完形の状態で周溝内に転落し、割れた後、後世の削平により土器の一部が無くなったものと考えられる。土器の出土位置から墳丘の南東部に置かれていた供献土器の可能性がある。溝４の最下層である炭層上面で出土した。１は口径27.0cmで器高は44cm以上に復元できる。口縁部は緩やかに屈曲して垂下し、外折面には櫛描廉状文が施され、口縁端部には刻み目が廻る。口頸部は外湾して上外方にのび、体部は球形を呈す。頸部から体部にかけて櫛描廉状文８条を左方向に施している。底部は平らである。調整は内外面共に表面の剥落が著しく、不明瞭である。

溝５（図29－２～５、図版11－２～５）　弥生土器壺（２～５）が出土した。溝５は周溝墓38の南辺溝である。２はほぼ完形で出土した。整理作業で頸部から体部をつなぐ破片が無かったため１個体に復元できなかった。出土状況から、おそらく墳丘上の南東部に置かれていた土器がほぼ完形の状態で周溝内に転落し、割れたものと考えられる。２は口径12.2cm、器高は約26cmに復元できる。口縁部は短く水平にひらいた後、屈曲してやや垂下する。端部は丸い。口頸部はやや直立してのびた後外上方にのびる。体部最大径は中位にある。底部は平らである。調整は、内面頸部より上はナデ調整で体部は下から上方への粗いハケ目がみられる。外面は全体に粗いハケ目を施した後に体部下半部から底部にかけてヘラミガ

キ、体部上半部からくびれ部にかけては上方から直線文２条、櫛描波状文１条、直線文１条、櫛描波状文１条と文様を施す。口縁部から頸部にかけては、内外面共に表面の剥落・摩耗が著しく、調整が不明瞭である。

３は、口縁部である。口径18.4cm、残存高7.6cmである。口縁端部は、下端部のみ外方に稜を有する。口頸部はやや外上方にのび、外湾している。内面は横方向のハケ目、外面は頸部が縦方向のハケ目で、口縁部は横方向のナデを施している。粘土紐の継ぎ目部分の整形はやや粗く凹凸が激しい。

４は、底部である。底径は、8.0cmで残存高は4.0cmである。底部外面は、中央が指オサエによりややくぼんでいる。内面には、指オサエの痕跡が残る。調整は内外面共に表面の剥落が著しく、不明瞭である。生駒西麓産の胎土特徴を持つ土器である。

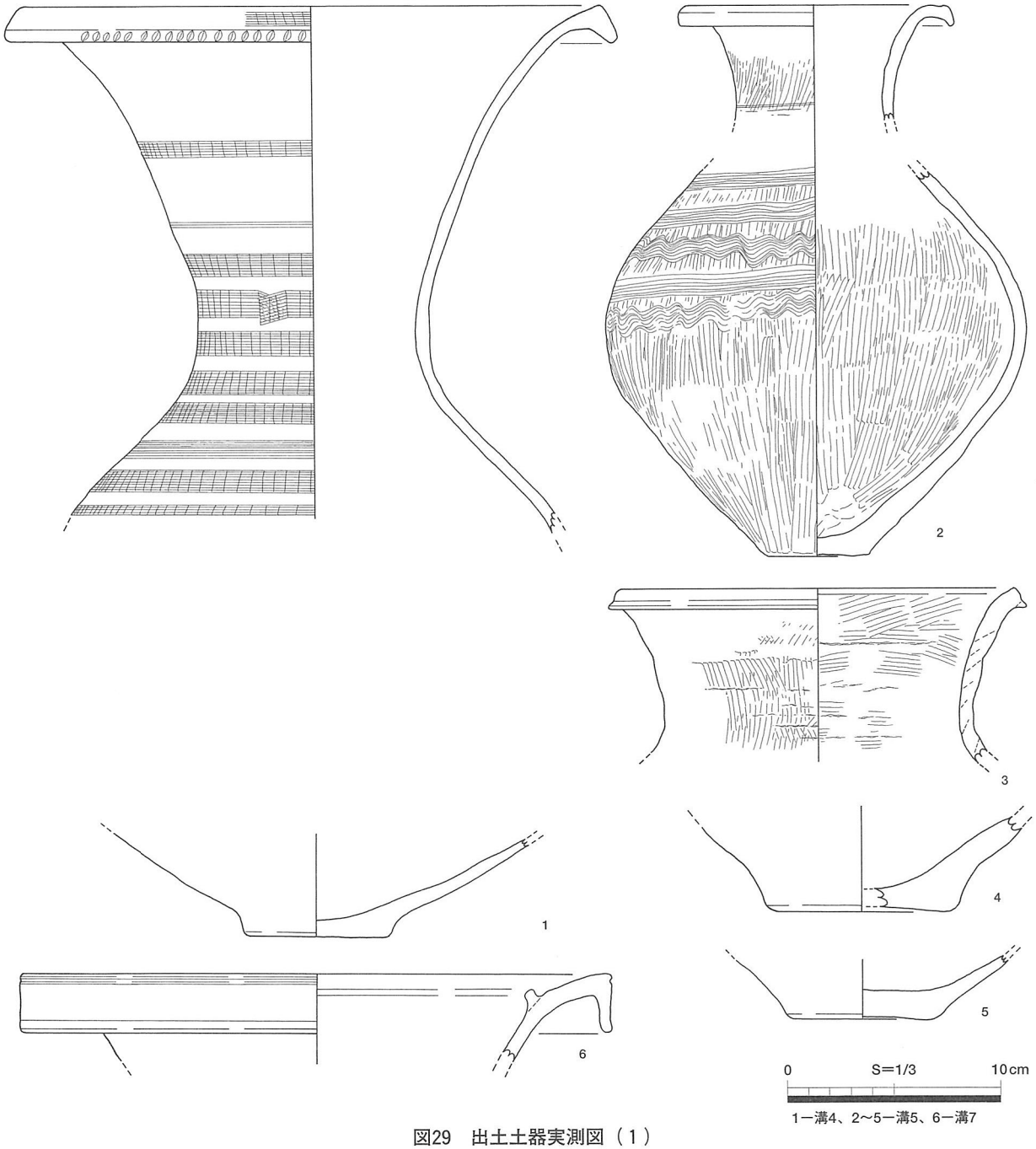


図29　出土土器実測図（１）

5は、底部である。底径は、6.7cmで残存高は2.8cmである。底部外面はほぼ平らである。内外面共に表面の剥落が著しく、調整は不明瞭である。底部内面全体が黒変している。二次的焼成によるものか。炭化物が僅かに付着している。

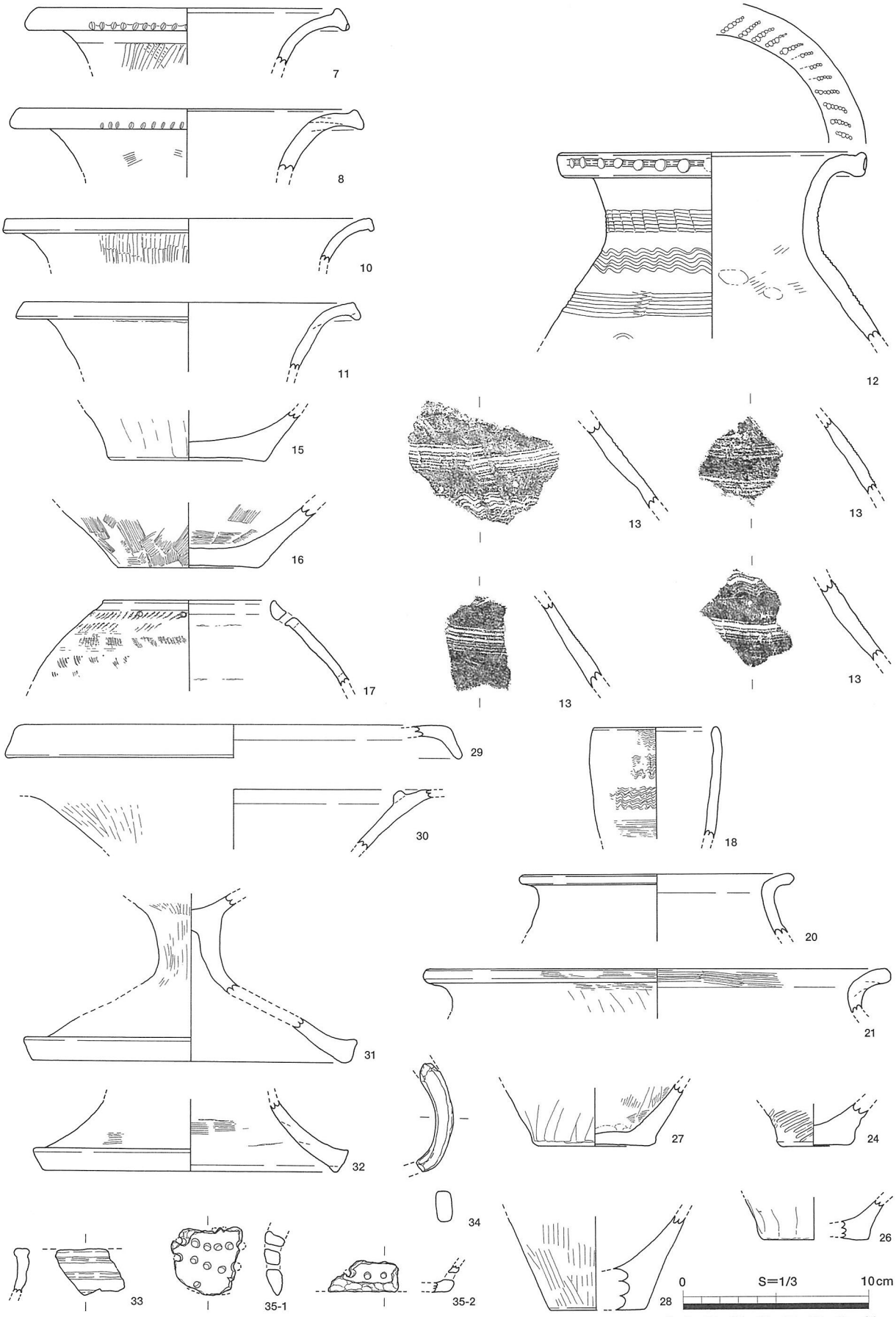
溝7（図29－6、図版11－6） 高坏（6）が出土した。溝7は周溝墓41･周溝墓42の共有溝である。6は、高坏の口縁部であり、口径27.4cmで残存高4.1cmである。体部から口縁部にかけて内湾気味に上外方にのび、やや屈曲して上外方にひらき、さらに屈曲して垂下する。口縁端部は丸い。屈曲部突帯は内傾する。内外面共にナデ調整で、垂下する口縁部外面屈曲部近くには凹線文が1条廻る。調整は内外面共に表面の剥落が著しく、不明瞭である。

溝8（図30－7～8・10～13・15～18・20～21・24・26～35、図版12－7～28・13－29～35）

壺（7～18）・甕（19～28）・高坏（29～32）・鉢（33）・把手（34）・不明土製品（35）が出土した。溝8は周溝墓24・周溝墓25の共有溝である。今回の調査で検出した周溝の中でもっとも土器の種類に富んでいる。出土した壺のうち17は無頸壺、18は細頸壺である。

7は、口縁部であり、口径16.2cmで残存高3.0cmである。口縁端部は上・下方に肥厚し、上方は内傾、下方は外傾する。調整は、内面が横方向のナデ、外面はハケ目の後にヘラミガキを施す。口縁端部下方には、ヘラによる刻み目が廻る。8は口縁部で、口径18.0cm、残存高3.4cmである。口縁端部は上・下方に肥厚し、上方は内傾、下方は外傾する。口頸部は、外上方にのびた後、屈曲して外下方に下がる。口縁端部下方には刻み目がある。調整は内外面共に表面の剥離が著しく、不明瞭であるがナデ・ハケ目が僅かにみられる。9は口縁部である。残存高1.5cm、口径は細片のため不明である。口縁は屈曲して上外方にひらき、端部は下方に肥厚して垂下する。調整は内外面共に横方向のナデである。10は口縁部である。口径19.6cm、残存高2.4cmである。口縁端部は下方に肥厚し、口頸部は外湾して上外方にのびる。内面は、ナデ調整で外面は粗いハケ目を施す。11は口縁部である。口径17.7cm、残存高3.6cmである。口縁端部は下方に肥厚し、口頸部は外湾して上外方にのびる。調整は内外面共に表面の剥離が著しく不明瞭である。12は、口縁部から体部上部にかけての部分である。口径16.2cm、残存高10.0cmである。口縁端部は上・下方に肥厚する。口頸部は上方にやや直立してのびた後、屈曲して外下方に下がる。口縁部内面には櫛描列点文が施され、口縁端部には帯状沈線を施した後、沈線の中に赤色顔料を塗布した円形浮文を等間隔に丁寧に貼り付けている。頸部から体部にかけては上から櫛描廉状文・櫛描波状文・櫛描直線文・櫛描波状文の順に文様が施されている。調整は内面が表面の剥離が著しく不明瞭であるが、内外面共にナデの後、僅かであるがハケ目の痕跡が窺える。13は体部である。全て同一個体と思われる。外面に細かな櫛描文様が施されている。14は底部で底径5.8cm、残存高2.4cmである。外面は縦ハケ目を施す。内外面共に表面の剥離が著しく調整は不明瞭である。15は底部で底径8.5cm、残存高2.7cmである。底部はほぼ平らで、内外面共に表面の剥離が著しく調整不明である。16は底部で底径7.7cm、残存高3.4cmである。底部はほぼ平らで、内面はハケ目の後ナデを施し、外面はハケ目調整をしている。

無頸壺（17）は、口縁部で口径9.3cm、残存高4.3cmである。口縁端部は小さくつまみ上げる。口縁端部付近で凹線が見られることから擬口縁で粘土帯を付していたものが外れたものと思われる。外面には口縁部から体部にかけて上方から櫛描列点文2条・櫛描廉状文・櫛描扇状文2条の順に文様が施されている。また、上方にある櫛描列点文の上には、文様を施した後に穿孔しており、残存部で2箇所認められる。調整は内外面共にナデ調整で外面はところどころにヘラミガキがみられる。



7～8・10～13・15～18・20～21・24
26～27・29～35ー溝8、28ー溝8・土坑7

図30　出土土器実測図（2）

細頸壺（18）は、口縁部で口径6.7cm、残存高5.9cmである。口縁端部は丸く、口頸部はやや内傾して立ち上がる。外面には口頸部上方から櫛描波状文３条・櫛描直線文１条の順に文様が施されている。調整は内外面共に横方向のナデである。

甕は10個体出土している。19は口縁部で残存高1.4cm、口径は、細片のため不明である。口縁端部は上方に肥厚し、外端面は上方がやや内側に傾く平坦面を成す。調整は、内外面共に剥離が著しく、不明瞭であるがナデ調整がみられる。20は口縁部で口径14.4cm、残存高3.2cmである。口縁端部は丸く、口頸部は屈曲して短く外反している。調整は、内外面共に剥離・摩耗が著しく、不明瞭である。21は口縁部で口径24.6cm、残存高2.2cmである。口縁端部はやや平らで面取りを行っており、口頸部は屈曲して短く外反している。調整は口縁端部から屈曲部までは内外面共にハケ目、屈曲部から下方は内外面共にナデを施している。外面は、ところどころにヘラの当たった痕跡が見られる。22は底部で底径2.9cm、残存高0.9cmである。底部はやや上げ底状を呈する。底部から体部にかけての立ち上がりは摩耗が著しく不明瞭である。調整も底部にある指オサエの痕跡のみで、内外面共に剥離、摩耗が著しく不明瞭である。底部を二次的に加工して円盤状の土製品を作り出している可能性がある。23は底部である。細片のため図化できず、写真でのみ掲載した。底径3.4cm、残存高3.1cmで底部はややくぼんでいる。調整は、内外面共に表面の剥離が著しく不明瞭である。24は底部で底径3.6cm、残存高2.3cmである。底部は平らで、内面は、ナデ・ヘラナデを施し、ヘラの当たった痕跡を残す。外面はナデ後タタキを行っている。内外面の側面一部が黒変している。25は底部である。細片のため図化できず、写真でのみ掲載した。底径5.5cm、残存高2.0cmである。平底状を呈し、内外面共にナデ調整である。これは弥生時代後期のものである。26は底部で底径5.8cm、残存高2.2cmである。底部はほぼ平らで、内外面共に摩耗が著しく、調整が不明瞭である。27は底部で底径5.9cm、残存高3.3cmである。底部はほぼ平らである。内面はナデ上げと僅かなハケ目の痕跡があり、底部内面には指ナデの他に指オサエの痕跡がある。体部外面は、ヘラによるナデあげを行っており、底部外面は指オサエ、ナデの痕跡、ハケ目調整の痕跡がある。底部の外端には面取りを行ったと思われる痕跡がある。28は、底部で溝８と土坑７で出土した土器片が接合したものである。底径5.1cm・残存高5.0cmである。底部はほぼ平らである。内面は指オサエとナデ調整で、外面は、ナデ調整後縦方向のハケ目を施している。内外面共に表面の摩耗が著しく、調整は不明瞭である。

高坏は４個体出土している。29は口縁部である。口径23.4cm、残存高1.8cmである。口縁端部は水平にひらき屈曲して下外方にのびる。口縁端部垂下が発達していない段階のものである。内外面共に剥離・摩耗が著しく、調整は不明瞭である。30は体部から口縁部にかけての部分で口縁部を欠いている。残存高は3.2cmで体部から口縁部にかけて内湾気味に上外方にのび屈曲している。口縁部途中で欠損しているがおそらく水平にひらき屈曲して垂下すると思われる。屈曲部突帯は外傾している。外面にヘラミガキ痕跡が残るが、内外面共に剥離・摩耗が著しく、調整が不明瞭である。31は基部と脚端部であり、同一個体である。底径16.8cm、器高は9.0cm以上に復元できる。基部をみると、脚部と坏部を連続して作り、粘土板を充填している。脚端部は、上方に肥厚し、外端面は上方を外傾して、平らである。坏部内面はナデ調整、外面にはヘラミガキ痕跡がみられる。しかし、内外面共に剥離・摩耗著しく、調整は不明瞭である。32は脚部である。底径15.7cm、残存高は3.8cmである。脚端部はほぼ平らで僅かに上・下方に肥厚がみられる。調整は内外面共に剥離が著しく、不明瞭であるが、僅かに横方向のハケ目の痕跡がある。

鉢（33）は、口縁部である。残存高2.5cm、口径は細片のため不明である。口縁端部は、内外方に肥厚して上端面は平らでやや丸みを帯びる。外面には３条の凹線文がみられ、内外面共に表面の剥離が著し

く、調整は不明瞭である。

把手（34）は残存長5.9cm、幅0.95cmで、中央断面が隅丸長方形を呈する。水差・鉢・短頸壺のいずれかに付くものか。

不明土製品（35）は２点あり、35－１は縦3.6cm、横3.8cm、厚さ1.05cmである。一面に径0.4cmぐらいの孔が規則的に並び、14孔確認できる。台付壺か高坏の脚部にあたるものなのか。35－２は縦1.7cm、横3.8cm、厚さ0.5cmである。屈曲して、上外方に立ち上がる。内外面共にナデ調整がみられる。底・側面共に径0.4cmぐらいの孔があり、５孔確認できる。壺の口縁部か高坏の脚部にあたるものか。

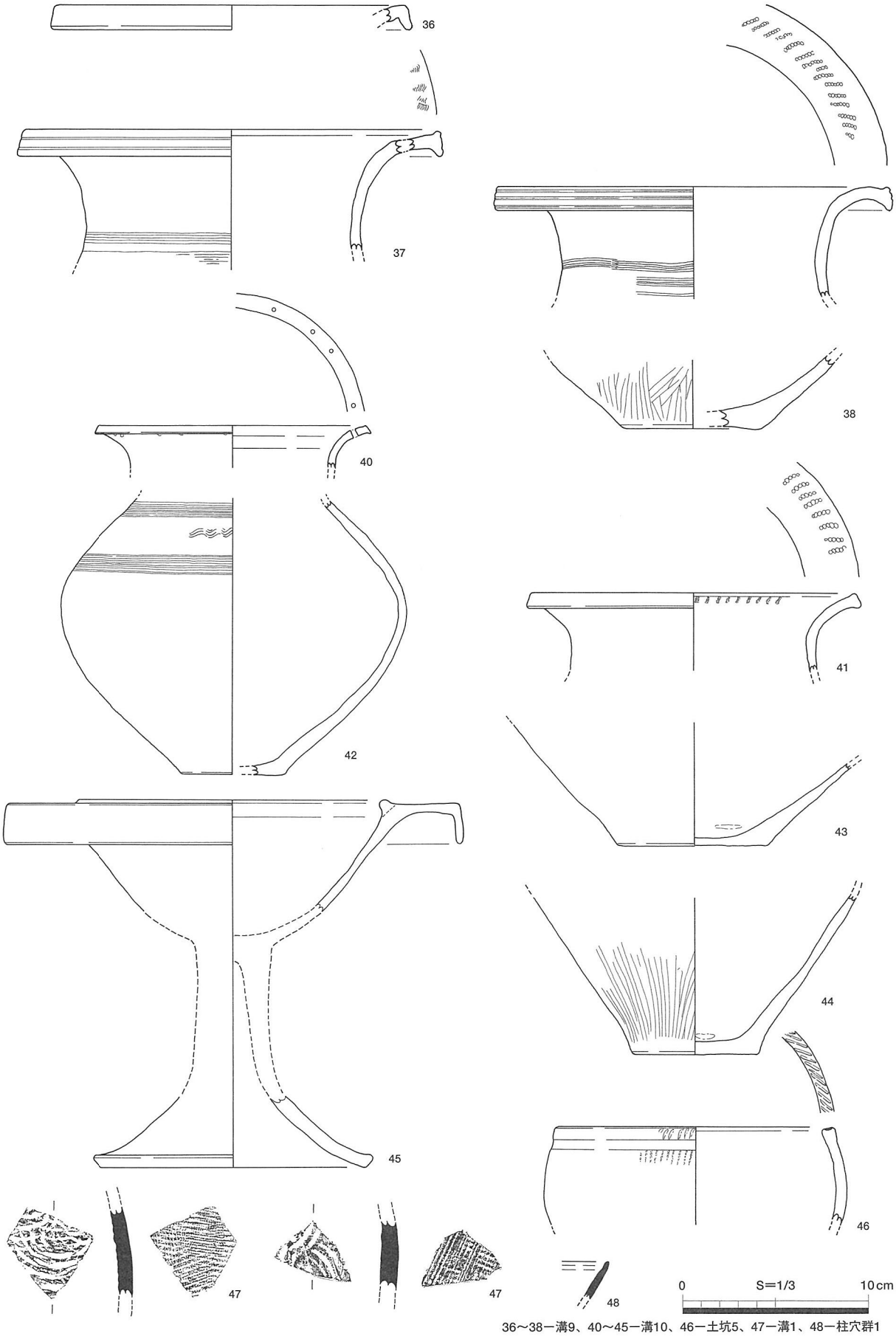
溝９（図31－36～38、図版13－36～39）　壺（36～38）と鉢と思われる（39）が出土した。36は、口縁部である。口径18.6cm、残存高1.3cmである。口縁端部は上外方にひらき、屈曲して垂下する。壺の口縁部としたが、高坏の口縁部の可能性もある。内外面共に表面の剥離、磨耗が著しく、調整は不明である。37は、口縁部と頸部が出土し、同一個体である。口径22.1cm、残存高7.2cmである。口縁端部は上方に肥厚し、下方に稜を有する。口頸部は、内湾して立ち上がり、外上方へ開き、屈曲する。口縁端部外面には、２条の凹線文がみられ、口縁部内側には、櫛描波状文が廻る。頸部には櫛描直線文が２条みられる。外面はナデによる調整で、内面は、表面の剥離、磨耗が著しく、調整は不明である。38は、口縁部と底部が出土し、同一個体である。口径20.8cm、底径7.2cmで器高は20.0cm以上に復元できる。口縁端部は、下方に肥厚して垂下する。上方は横方向のナデを廻らすことにより肥厚している。口頸部は外湾して上外方にのび、屈曲して外下方に下がる。口縁部内面には、横方向のナデの内側に櫛描列点文を施し、口縁端部には３条の凹線文を廻らせ、頸部は外面に櫛描直線文が３条みられる。底部はほぼ平らで、体部の下部外面はナデの後、縦方向のヘラミガキを施している。内面は調整不明である。内外面共に表面の剥離が著しく、調整が不明瞭である。

鉢（39）は、口縁部である。細片のため図化できず、写真でのみ掲載した。残存高2.0cm、口径は細片のため不明である。内外面共に表面の剥離、磨耗が著しく、調整は不明である。

溝10（図31－40～45、図版13－40～42・14－43～45）　壺（40～43）・甕（44）・高坏（45）が出土した。溝10は、周溝墓16・周溝墓23の共有溝である。

40は口縁部である。炭を含む黒褐色極細粒砂～細粒砂（図28溝10断面図の３の土層）から出土した。口径14.3cm、残存高2.3cmである。口縁端部は上方下方に稜を有し、外端面は上方を内傾しており平らである。口頸部は外湾して上外方にのびている。口縁部には、穿孔が施され、２孔を単位として、間隔をあけて廻っている。口縁部は横方向のナデ、頸部は内外面共にナデ調整を行っている。41は壺の口縁部である。炭を含む黒褐色極細粒砂～細粒砂から出土した。口径17.3cm、残存高4.1cmである。口縁端部は上方と下方に肥厚し、外端面は上方が内傾して、平らな面を作り出す。口頸部は上方にのびた後、外上方にのびている。口縁部内側には１条の櫛描列点文を廻らせている。調整は、内外面共に表面の剥離が著しく、不明瞭である。42は、頸部から上を欠く。体部最大径は18.4cm、底径は5.5cm、残存高は14.7cmである。体部最大径は中位にあり、底部は平らである。文様は上から櫛描直線文１条、櫛描波状文１条、櫛描直線文１条が廻る。内外面は、表面の剥離が著しく、調整は不明瞭であるが、底部内面に指オサエ、体部の内面にはところどころにヘラ工具が当たった痕跡がみられる。43は底部である。底径7.8cm、残存高6.5cmである。底部は平らである。底部から体部にかけて外上方に大きくひらく。調整は内外面共にナデで、底部内面に指オサエの痕跡がみられる。摩耗が著しく、調整が不明瞭である。

甕の底部（44）は、底を上にして炭を含む黒褐色極細粒砂～細粒砂から出土した。出土位置は周溝墓



36～38ー溝9、40～45ー溝10、46ー土坑5、47ー溝1、48ー柱穴群1

図31　出土土器実測図（3）

23寄りで底部を北東に傾ける。底径6.6cmで残存高8.6cmである。底部は平らで、外面はナデと縦方向のヘラミガキ、内面はナデで底部内面に指オサエが見られる。内外面共に表面の剥離が著しく、調整は不明瞭である。

高坏（45）は、口縁部と脚部が炭を含む黒褐色極細粒砂～細粒砂から出土した。同一個体である。口径24.0cm、底径14.0cm、器高は19.7cm以上に復元できる。体部から口縁部にかけて内湾気味に上外方へのび、屈曲して水平にひらき更に屈曲して垂下する。屈曲部突帯は内傾している。脚部はやや外下方へ下り、裾部より外方にひらく。端部は平らで上方にやや肥厚している。調整は内外面共に表面の剥離が著しく、不明瞭である。

土坑５（図31－46、図版14－46）　無頸壺（46）が出土した。土坑５は周溝墓41に伴う西辺溝の可能性がある遺構である。46は、口縁部で口径14.8cm、残存高5.2cmである。口縁端部は水平な平面を呈し、刻み目を廻らす。口頸部は体部から口縁部にかけて内湾しながら上方へのびる。口縁部外面には、上から刻み目が１条、櫛描列点文１条が廻る。調整は内外面共に表面の剥離・摩耗が著しく、不明瞭である。

土坑７（図30－28、図版12－28）　甕の底部（28）が出土した。先にも述べたが溝８から出土した土器片と接合した。土器についての説明は、溝８の出土遺物（28）を参照していただきたい。

墓壙内出土遺物

墓壙８（巻頭図版７－１・２、図32－49～58、図版14－49～58）　打製石器（49～58）が出土した。墓壙８は、周溝墓24の墳丘上に築かれた遺構である。墓壙のほぼ床面（T.P.=44.03～44.01m）で石鏃（49～56）と剥片（57～58）が出土した。いずれも、石材は二上山産サヌカイトである。全ての石鏃が先端部を欠いた状況で検出された。石鏃は離れた位置から出土しながら接合出来る。接合するものに関しては、遺物番号に枝番号を付す。

49は、墓壙東半部北側からA面を上にして出土した。先端部は北東を向き、基部を下にして傾いている。52－②から北東へ12.2cm離れたところに位置する。柳葉形石鏃で先端部と基部を欠いている。基部の表面には研磨痕がみられる。また、先端部・基部共に挫屈しており、衝撃剥離の可能性がある。残存長1.90cm、幅1.25cm、厚さ0.25cm、重さ0.97gである。中央断面は扇形を呈する。

50は、墓壙東半部南側からA面を上にして出土した。先は、北東を向き、52－②から南へ15.6cm離れている。柳葉形石鏃で、先端部と基部を欠く。先端部は挫屈しており、衝撃剥離の可能性がある。基部は、不明折損で古い風化面である。残存長2.15cm、幅1.25cm、厚さ0.30cm、重さ1.16gである。中央断面は扇形を呈する。

51は、墓壙中央部南側にある南北畦からA面を上にして出土した。先は北西を向き、50から西へ43.0cm、54－②から南西へ33.0cm離れている。先端部と基部を欠く。残存基部の形態をみると、柳葉形石鏃である。先端部・基部共に衝撃剥離が明確に見られないため不明である。残存長2.40cm、幅1.30cm、厚さ0.25cm、重さ1.10gである。中央断面は扁平な扇形を呈する。

52－①は、墓壙東半部北側からA面を上にして出土した。石鏃の先端部で先は、北東を向く。52－②は、墓壙東半部北側からB面を上にして出土した。先端部は、北東を向く。柳葉形石鏃である。出土位置をみると52－①と52－②は東西に2.2cm離れている。52－③は、墓壙東半部にある東西畦から出土した。詳細な位置は特定できない。石鏃から剥離した剥片である。

52－①・②・③はそれぞれ接合する。52－①が先端部、52－②が基部、52－③は基部から剥離したものである。基部には研磨痕がみられる。また、先端部は、斜め方向の衝撃剥離で基部は縦方向の衝撃剥

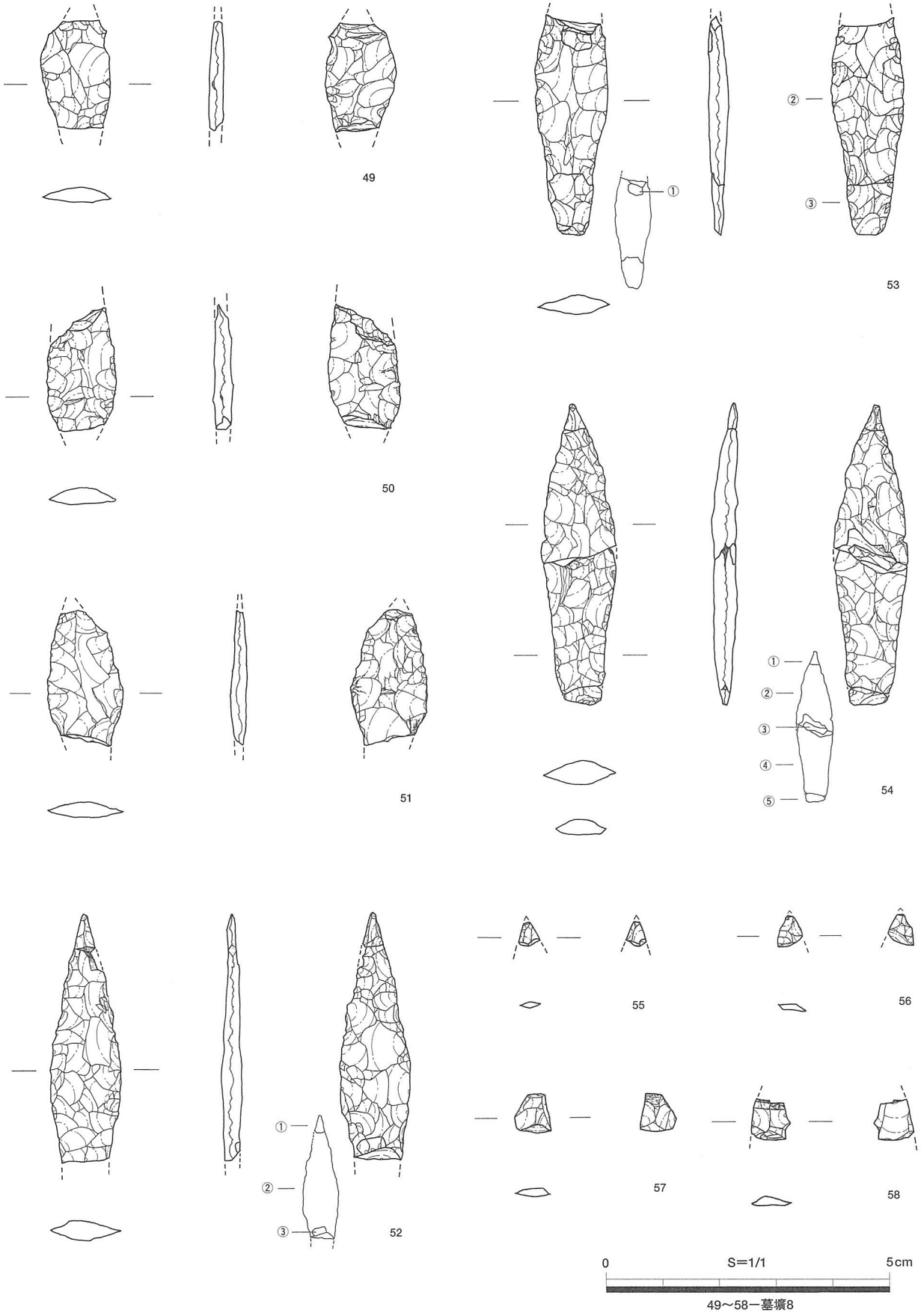


図32　出土石器実測図

離の痕跡が認められる。残存長4.40cm、幅1.25cm、厚さ0.35cm、重さ2.03gである。中央断面は菱形を呈する。出土地点が明確な52－①・②の出土状況は、上記のように離れて出土しているところから52が被葬者の体内で折損したのち、木棺内が埋没するまでの間に動いたものと考えられる。

53－①は、墓壙東半部北側からA面を上にして出土した。石鏃から剥離した剥片である。53－②は、墓壙東半部北側からA面を上にして出土した。先端部は北東を向き、先端部と基部を欠く。53－③は、墓壙東半部北側からA面を上にして出土した。石鏃の基端部で先端部は東を向く。出土位置をみると53－①から2.5cm北西に53－②があり、53－②から0.1cm西に53－③がある。

53－①・②・③はそれぞれ接合する。53－①が基部から剥離したもので、53－②・③が基部である。形式をみると柳葉形石鏃である。先端部･基部共に挫屈しており、縦方向の衝撃剥離である。残存長3.90cm、幅1.20cm、厚さ0.35cm、重さ1.83gである。中央断面は菱形を呈する。それぞれの出土状況は、上記のように離れて出土しているところから53が被葬者の体内で折損したのち、木棺内が埋没するまでの間に動いたものと思われる。

54－①は、墓壙東半部にある東西畦から出土した。詳細な位置は特定できない。石鏃の先端部である。54－②は、墓壙東半部北側からB面を上にして出土した。先端部は北東を向き、54－④の基部と接している。石鏃の先端部である。54－③は、墓壙東半部にある東西畦から出土した。詳細な位置は特定できない。石鏃から剥離した剥片である。54－④は、墓壙東半部北側からB面の左側縁を上にして立った状態で出土した。基端部は北東を向き、先端部が54－②の先端部に接している。先端部と基端部を欠く。54－⑤は、墓壙東半部にある東西畦から出土した。詳細な位置は特定できない。石鏃の基端部である。

54－①・②・③・④・⑤はそれぞれ接合し、ほぼ完形になった。54－①が先端、54－②が先端部、54－③が54－②と54－④の接続部、54－④が基部、54－⑤が基端部である。先端部は衝撃剥離が明確に見られなかった。基部は、挫屈しており、斜め方向の衝撃剥離が認められる。また、石鏃は中央で折損している。全長5.30cm、幅1.30cm、厚さ0.40cm、重さ2.66gである。中央断面は五角形を呈する柳葉形石鏃である。

55は、墓壙東半部から出土した。詳細な位置は特定できない。石鏃の先端部である。残存長0.40cm、幅0.35cm、厚さ0.10cm、重さ0.02gである。中央断面は菱形を呈する。

56は、墓壙東半部にある東西畦から出土した。詳細な位置は特定できない。石鏃の先端部である。残存長0.55cm、幅0.45cm、厚さ0.10cm、重さ0.03gで中央断面は扁平である。

57は、墓壙東半部北側からＢ面を上にして出土した。54－④から東へ3.2cm、53－②から西へ4.2cm離れたところに位置する。石鏃から剥離した剥片である。中央に稜線があり、一部側辺が残存していることから、鏃身の中央部につくものである。残存長0.70cm、幅0.65cm、厚さ0.15cm、重さ0.11gである。中央断面は扁平である。

58は、墓壙東半部にある東西畦から出土した。詳細な位置は特定できない。石鏃から剥離した剥片である。中央に稜線があり、おそらく先端部の中央につくものである。残存長0.70cm、幅0.70cm、厚さ0.15cm、重さ0.10gである。中央断面は扇形である。

古墳時代

溝１（図31－47、図版14－47）　弥生土器の細片は数点出土したが、最下層から６世紀から７世紀と思われる須恵器甕腹片２点（47）が出土したことにより、溝の上限年代が判明した。しかし、細片であり、

表２　出土土器一覧表

※（数字）は残存・復元値

挿図番号	写真図版	遺物	地区	地区割	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	実測図番号
29-1	11-1	壺	2	D6-b4	溝4	(27.0)	(44.0)以上	(6.7)	やや粗（0.2～4.0mm大の砂礫を多く含む）	良	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：明赤褐5YR5/6 断面：橙2.5YR6/8	1
29-2	11-2	壺	2	D6-b4	溝5	12.2	(25.7)	(4.9)	やや粗（0.5～1.5mm大の砂粒を含む）	やや軟	外：黄褐2.5Y5/3 内：明黄褐2.5Y7/6 断面：黄褐2.5Y5/3 暗灰黄2.5Y4/2	2
29-3	11-3	壺	2	D6-b4	溝5	(18.4)	(7.6)	－	密（0.2～5.0mm大の砂礫を含む）	良	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR6/4 断面：灰黄褐10YR5/2	3
29-4	11-4	壺	2	D6-b4	溝5	－	(4.0)	(8.0)	やや粗（0.2～4.0mm大の砂礫を多く含む）	良	外：褐7.5YR4/3 内：にぶい褐7.5YR5/4 断面：灰黄褐10YR4/2	4
29-5	11-5	壺	2	D6-b4	溝5	－	(2.8)	6.7	密（0.2～3.0mm大の砂粒を含む、雲母片を少量含む）	良	外：橙5YR6/6 内：黄灰2.5Y4/1 断面：明黄褐10YR7/6	5
29-6	11-6	高坏	3	D6-c7	溝7	(27.4)	(4.1)	－	密（0.2～2.0mm大の砂粒を含む）	良	外：明黄褐10YR7/6 内：明黄褐10YR7/6 断面：黒褐2.5Y3/2	6
30-7	12-7	壺	3	D6-e7	溝8	(16.2)	(3.0)	－	密（0.2～2.0mm大の砂粒を含む）	良	外：にぶい赤褐2.5YR4/4 灰褐7.5YR4/2 内：浅黄橙10YR7/3 断面：にぶい黄橙10YR7/4	11
30-8	12-8	壺	3	D6-e7	溝8	(18.0)	(3.4)	－	やや粗（0.2～3.0mm大の砂粒をやや多く含む）	良	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：淡黄2.5Y8/3 断面：浅黄2.5Y7/3	12
－	12-9	壺	3	D6-e7	溝8	－	(1.5)	－	密（1.0mm以下の砂粒を微量含む）	良	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4 断面：にぶい黄橙10YR7/4	10
30-10	12-10	壺	3	D6-e7	溝8	(19.6)	(2.4)	－	密	良	外：明黄褐10YR6/6 内：明黄褐10YR6/6 断面：明黄褐10YR6/6	8
30-11	12-11	壺	3	D6-e7	溝8	(17.7)	(3.6)	－	やや粗（0.2～4.0mm大の砂粒を多く含む）	良	外：橙5YR7/6 内：橙7.5YR6/6 断面：橙7.5YR6/6	9
30-12	12-12	壺	3	D6-e7	溝8	(16.2)	(10.0)	－	密（0.2～6.0mm大の砂礫を含む）	良	外：明黄褐10YR7/6 明赤褐2.5YR5/6(赤色顔料) 内：明黄褐10YR7/6 断面：明黄褐10YR7/6	13
30-13	12-13	壺	3	D6-e7	溝8	－	－	－	密（0.1～1.0mm大の礫を含む）	良	外：橙7.5YR6/6 内：にぶい橙7.5YR6/4 断面：明黄褐10YR7/6	14
－	12-14	壺	3	D6-e7	溝8	－	(2.4)	(5.8)	密	良	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断面：にぶい黄橙10YR7/2	15
30-15	12-15	壺	3	D6-e7	溝8	－	(2.7)	8.5	密（0.2～3.0mm大の砂粒を含む）	良	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4 断面：灰5Y4/1	16
30-16	12-16	壺	3	D6-e7	溝8	－	(3.4)	(7.7)	密（0.2～1.0cm大の砂礫を含む）	良	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：明黄褐10YR7/6 断面：明黄褐10YR7/6	17
30-17	12-17	無頸壺	3	D6-e7	溝8	(9.3)	(4.3)	－	密	良	外：橙7.5YR6/6 内：橙7.5YR7/6 断面：橙7.5YR6/6	18
30-18	12-18	細頸壺	3	D6-e7	溝8	(6.7)	(5.9)	－	密（0.5～1.5mm大の砂粒を少量含む）	良	外：明黄褐10YR6/6 内：明黄褐10YR6/6 断面：明黄褐10YR6/6	19
－	12-19	甕	3	D6-e7	溝8	－	(1.4)	－	密（1.0mm以下の砂粒を極微量含む）	良	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：明赤褐5YR5/6 断面：橙7.5YR6/6	20
30-20	12-20	甕	3	D6-e7	溝8	(14.4)	(3.2)	－	やや粗（0.5～1.0mm大の砂粒を少量含む）	やや軟	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：明黄褐10YR6/6 断面：黒褐10YR3/1	21
30-21	12-21	甕	3	D6-e7	溝8	(24.6)	(2.2)	－	密（0.2～4.0mm大の砂粒を含む）	良	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4 断面：橙7.5YR6/6	22
－	12-22	甕	3	D6-e7	溝8	－	(0.9)	2.9	密（1.0mm以下の砂粒を極微量含む）	良	外：褐灰10YR4/1 内：灰黄褐10YR5/2 断面：灰黄褐10YR5/2	23
－	12-23	甕	3	D6-e7	溝8	－	(3.1)	3.4	密	良	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：黒褐2.5Y3/1 断面：にぶい黄橙10YR7/2	24
30-24	12-24	甕	3	D6-e7	溝8	－	(2.3)	3.6	やや粗（0.2～4.0mm大の砂粒を多く含む）	良	外：にぶい橙7.5YR6/4 明赤褐2.5YR5/6 内：緑黒10GY2/1 断面：にぶい赤褐2.5YR5/3	25

挿図番号	写真図版	遺物	地区	地区割	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	実測図番号
–	12-25	甕	3	D6-e7	溝8	–	(2.0)	(5.5)	密	良	外：褐灰10YR4/1 内：灰黄褐10YR5/2 断面：褐灰10YR5/1	26
30-26	12-26	甕	3	D6-e7	溝8	–	(2.2)	5.8	やや密（少量の小石を含む）	良	外：明黄褐10YR7/6 内：明黄褐10YR7/6 断面：黒N2/0	27
30-27	12-27	甕	3	D6-e7	溝8	–	(3.3)	(5.9)	密（0.2～2.0mm大の砂粒を含む）	良	外：黄褐10YR5/6 黒褐2.5Y3/1 内：橙7.5YR6/6 断面：にぶい黄褐10YR5/4	28
30-28	12-28	甕	3	D6-e7	溝8 土坑7	–	(5.0)	(5.1)	やや粗（0.5～2.0mm大の小石を含む）	良	外：明赤褐2.5YR5/6 内：橙5YR6/6 断面：明赤褐2.5YR5/6	29
30-29	13-29	高坏	3	D6-e7	溝8	(23.4)	(1.8)	–	密	やや軟	外：明赤褐5YR5/6 内：明赤褐5YR5/6 断面：明赤褐5YR5/6	30
30-30	13-30	高坏	3	D6-e7	溝8	–	(3.2)	–	密（1.0～3.0mm大の小石を少量含む）	やや軟	外：橙5YR6/6 内：橙5YR6/8 断面：明赤褐5YR5/6	31
30-31	13-31	高坏	3	D6-e7	溝8	–	(9.0)	(16.8)	やや粗（0.5～3.0mm大の小石を含む）	やや軟	外：明黄褐10YR6/6 内：明黄褐10YR6/6 断面：褐7.5YR4/6	32
30-32	13-32	高坏	3	D6-e7	溝8	–	(3.8)	(15.7)	密（0.2～2.0mm大の砂粒を含む）	良	外：橙7.5YR6/6 内：橙2.5YR6/6 断面：橙7.5YR6/6	7
30-33	13-33	鉢	3	D6-e7	溝8	–	(2.5)	–	密（0.2～2.0mm大の砂粒を含む）	良	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR6/4 断面：浅黄橙7.5YR8/6	33
30-34	13-34	把手	3	D6-e7	溝8	長さ：(5.9)　幅（0.95）			密	良	外：橙7.5YR6/6 内：橙7.5YR6/6 断面：橙7.5YR7/4	34
30-35	13-35	不明 土製品	3	D6-e7	溝8	孔径：0.4cm			密	良	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR6/4 断面：にぶい黄橙10YR7/4	35
31-36	13-36	壺	4	D6-e5	溝9	(18.6)	(1.3)	–	粗（0.5～2.0mm大の小石を多く含む）	軟	外：明褐7.5YR5/6 内：明褐7.5YR5/6 断面：黒褐10Y3/2	36
31-37	13-37	壺	4	D6-e4	溝9	(22.1)	(7.2)	–	やや粗（0.1～3.0mm大の礫を多く含む）	良	外：にぶい黄褐10YR5/4 内：にぶい橙7.5YR6/4 断面：灰黄褐10YR4/2	37
31-38	13-38	壺	4	D6-e4	溝9	(20.8)	(20.0) 以上	(7.2)	密（0.2～3.0mm大の砂粒を多く含む）	良	外：灰黄褐10YR4/2 内：にぶい黄褐10YR5/3 断面：にぶい黄褐10YR5/4	38
–	13-39	鉢	4	D6-e4	溝9	–	(2.0)	–	粗（0.5～3.0mm大の砂粒を多く含む）	やや軟	外：黄褐10YR5/6 内：褐10YR4/4 断面：黒褐10YR3/2	39
31-40	13-40	壺	5	D6-e6	溝10	(14.3)	(2.3)	–	やや密（1.0～2.0mm大の小石を含む）	良	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：明褐7.5YR5/6 断面：明褐7.5YR5/6	40
31-41	13-41	壺	5	D6-e6	溝10	(17.3)	(4.1)	–	密	良	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：明褐7.5YR5/6 断面：にぶい黄橙10YR7/4	41
31-42	13-42	壺	5	D6-e6	溝10	–	(14.7)	(5.5)	やや粗（0.2～3.0mm大の砂粒を含む）	良	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4 断面：にぶい黄橙10YR6/4	42
31-43	14-43	壺	5	D6-g6	溝10	–	(6.5)	7.8	やや密（小石を含む）	やや良	外：明褐7.5YR5/6 内：にぶい褐7.5YR5/4 断面：にぶい褐7.5YR5/4	43
31-44	14-44	甕	5	D6-e6,D6-g6	溝10	–	(8.6)	6.6	やや粗（0.2～3.0mm大の砂粒を多く含む）	良	外：橙7.5YR6/6 内：にぶい黄褐10YR5/3 断面：橙7.5YR6/6	44
31-45	14-45	高坏	5	D6-e6	溝10	(24.0)	(19.7)	(14.0)	密（0.2～1.0mm大の砂粒を多く含む）	良	外：明赤褐2.5YR5/6 内：黄灰2.5Y5/1 明赤褐2.5YR5/6 断面：にぶい赤褐2.5YR5/4 黒褐10YR3/1	45
31-46	14-46	無頸壺	3	D6-c7	土坑5	(14.8)	(5.2)	–	密（1.0～2.5mm大の小石を少量含む）	やや軟	外：明黄褐10YR7/6 内：明黄褐10YR7/6 断面：灰5Y5/1	46
31-47	14-47	甕	1	D6-a1	溝1	–	–	–	密	良	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断面：灰N6/0	48
31-48	14-48	坏	3	D6-c7	柱穴群1	–	(2.0)	–	やや粗（1.0～3.5mm大の小石を含む）	良	外：灰N6/0 内：灰N7/0 断面：灰N7/0	47

下限年代は断定できない。

柱穴群１（図31－48、図版14－48）　弥生土器の細片の他、須恵器の坏（48）が出土している。48は口縁部のみで残存高2.0㎝、口径は細片のため不明である。内外面共に回転ナデ調整である。時期は、８世紀の可能性がある。上記の遺物が出土しているが遺構の埋土の観察から遺構の所属時期は中世と考えている。遺構の時期を特定する遺物が出土していないため、掲載しておく。

４．小結

大尾遺跡は、生駒山地へと続く枚方丘陵から派生し、南下した尾根上に立地しており、今回を含むこれまでの調査で尾根上での弥生時代中期後半から近世に至るまでの生活の営みが明らかとなった。ここでは、今までの調査をふまえ時期ごとに見ていき、結びとしたい。

弥生時代中期後半（図33・34、表３）

今回の調査で、新たに周溝墓が確認され、これまでの調査で復原したものを合わせて計42基の周溝墓を確認した。表３に示したように、周溝墓の規模は一辺14.5～16.0ｍと大規模なものから一辺5.0ｍと小規模なものまで多種多様である。周溝は、それぞれ溝を共有しており、中央には墓道と思われる空間が存在する。この墓道は、北から南へと丘陵の尾根筋を延び、周溝墓16辺りで行き止まりとなる。この尾根筋に延びる墓道を軸として東側、西側、南側で周溝墓が展開し、共有する溝で墓を区画し整然と並んでいたものと考えられる。平成13年度調査区および、今年度調査区の北・南・西端においても周溝や墓壙が検出されることからもさらに遺構が広がっている可能性がある。特に西端では今回の調査区が丘陵の端にも関わらず、さらに西へと続く周溝が検出された。おそらく、後世の開発により丘陵が削られたために、周溝墓の一部が破壊され、このような形で検出されたものと思われる。よって実際の周溝墓の数も大幅に増えるであろう。これまでの調査から丘陵上で大小多数の周溝墓が尾根に沿って築かれ、大規模な墓域が広がっていたことが明らかとなった。

周溝については、周溝内埋土から炭の出土が目立つ。炭は、最下層の地山ブロックを含む層位およびその上層の堆積層で見られる。周溝墓を築いた後、この一帯で周溝に炭が入るような火を用いた何かが行われていた可能性がある。これは、今後検討する必要がある。

出土遺物の時期はほとんどが濱田氏の編年[(4)]で第Ⅲ様式中段階～第Ⅳ様式新段階に相当する。溝４から出土した弥生土器壺（１）は、出土状況から周溝墓の墳丘南東部に置かれていた土器が完形の状態で周溝内に転落し、割れた後、後世の削平により土器の一部が無くなったものと考えられる。

また、溝５から出土した弥生土器壺（２）は、出土状況から、おそらく墳丘上の南東部に置かれていた土器がほぼ完形の状態で周溝内に転落し、割れたものと考えられる。しかし、なぜ頸部と体部をつなぐ部分が出土しなかったのか不明である。

この墓域では供献土器以外の遺物は僅かで、周溝墓24においては石剣や石鏃が出土し、出土遺物の内容が際だっている。周溝墓24の築かれた位置も北から延びる墓道の南端西側にあり、尾根筋の中央に当たる。この墓域の中で、おそらく有力者を埋葬していたと考えられる。特に墓壙８は今回の調査で唯一石鏃が出土した遺構である。墓壙に伴う石鏃は、本遺跡で墓壙19（13年度）の木棺底板面で１点出土しており（註２）、これに引き続き２例目である。出土点数は墓壙19（13年度）に比べ６～８点と群を抜いている。出土状況も先に述べたが、先端・基端部分が全て欠損している。また、石鏃のいくつかには縦方向の力による衝撃剥離痕跡がみられる。これらの事から、副葬品である可能性は低い。骨が残っていなかったため実際に骨に刺さった状況で検出されたものではないが、出土した石鏃のうち数点は射込ま

れた時に折損したものと考えられる。もし射込まれたものだとしたら、墓域の中で１基しか見つかっておらず、墓域の中における位置付けを考える上で重要である。

このように石鏃が刺さった大阪府下の例は、東大阪市久宝寺遺跡[5]や八尾市山賀遺跡[6]・亀井遺跡[7]などがある。本遺跡の近くでは、四條畷市の雁屋遺跡で打製石鏃12点が腹から胸のあたりで見つかっている[8]。雁屋遺跡は、生駒西麓の平地にある、弥生時代前期から後期の全期間にわたる遺跡で方形周溝墓を10基程確認している。その中の１基で棺材が残存した木棺底板に接する位置から打製石鏃12点が腹部から腰辺りで出土している。他にも石鏃を伴って出土した周溝墓はあるが、12点もの石鏃が集中して出土したのは１基のみであり、大尾遺跡と類似する。

また、これまで38基の墓壙を検出したうち周溝墓23の墓壙19（13年度）と周溝墓33の墓壙30（13年度）の２基は木棺内に水銀朱が塗られていた。墓域におけるこれらの位置を見ると墓道とその南に延びる周溝を中軸線として東西脇にそれぞれ築かれており、これら墓壙に葬られた人物は有力者であると考えられる。また同様の立地条件である周溝墓24も同じく有力者の可能性がある。

調査区全体を概観すると、水銀朱および石器出土周溝墓は調査区中心軸際の南半部にある。しかしながら、周溝の検出状況からも分かるように南半部に比べ北半部の標高が高く、後世の削平が激しいため検出できなかったが北半部においてもこのような遺物を含む墓壙の存在が予想される。

居住域についてであるが、これまでの調査で弥生時代中期後半の竪穴住居２・３（15年度）の２棟を確認している。竪穴住居跡は調査区の北東端で検出された２棟重複する住居跡で、１回建て替えが行われていることがわかる。また、谷を隔てた東側の丘陵上には大尾遺跡とほぼ同時期に営まれた弥生時代の集落跡である太秦遺跡がある。

大尾遺跡の周辺にある弥生時代の遺跡として、高宮八丁遺跡[9]と太秦遺跡[10]等がある。高宮八丁遺跡は弥生時代前期中葉から中期中葉の溝・土坑・柱穴・貯蔵穴などを検出しており、多量の土器、石器、木製品が出土した。前期から集落が営まれ、中期以降に姿を消す遺跡である。太秦遺跡は、同じく弥生時代中期の遺跡である。平成15年度調査で直径10ｍの大型竪穴住居跡を含む竪穴住居跡39棟、周溝墓１基を確認している。また、平成16年度にも引き続き調査を行い、竪穴住居跡３棟と方形周溝墓を１基確認している。これらの、存続時期および遺跡の位置をふまえて考えると、河内潟周辺の平地に所在する高宮八丁遺跡で生活していた集団がやがて大阪平野を一望できる太秦遺跡・大尾遺跡に移り住み、高地性集落を築いてそこを拠点として尾根ごとに墓域と居住域に谷を隔てて区画していた様子が窺われる。

古墳時代（図35）

これまでの調査で溝１条・土坑墓１基・木棺墓２基・竪穴住居跡１棟・土坑１基を確認した。溝１については平成13年度調査では、弥生時代中期の区画溝としていたが今回の調査で溝埋土の最下層より６世紀から７世紀と思われる須恵器が出土したことにより、溝の時期が古墳時代に属することが明らかとなった。土坑墓である墓壙４（13年度）は６世紀末から７世紀初めの土器が出土し、時期が特定できたが、墓壙１と墓壙１（13年度）は遺物が出土しておらず、時期特定が出来なかった。しかし、２基の墓壙は特徴が似ており、ほぼ同時期に属するものと考えられる。２基の墓壙と弥生時代の墓壙を比較すると、２基の墓壙は粘土を裏込めに使用している。墓壙１（13年度）は船の転用材で棺を作り出した可能性があり、弥生時代の墓壙とは全く様相が異なっているのである。そのため、13年度調査と同じく、古墳時代と推定した。大尾遺跡北東部には、太秦古墳群があるため、墳丘は見つかっていないがこの丘陵上にも弥生時代の墳丘を利用して古墳が築かれていた可能性も考えられている。

図33　弥生時代検出遺構図

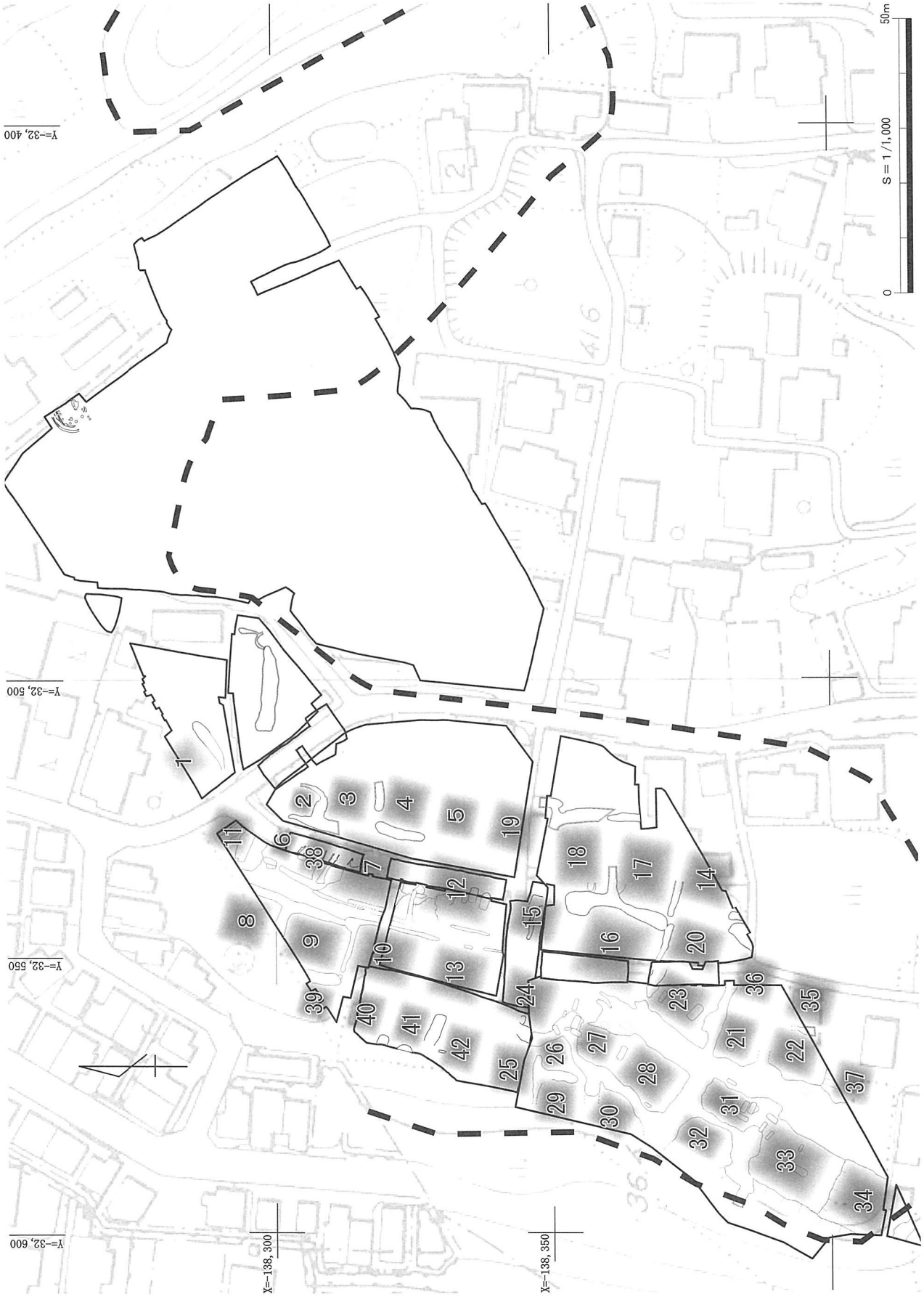


図34　弥生時代周溝墓群復原図

表３　方形周溝墓および墓壙一覧表

※規模の単位はm/平成13年度調査に関しては遺構名の後に(13)と表記

方形周溝墓			墓　壙			
周溝墓No.	規模(東西×南北)	振れ	墓壙No.	規模(長×幅×深)	振れ	特徴・遺物
周溝墓１	9.5×？	N-32°-W	－	－	－	
周溝墓２	5強×？	W-18°-N	墓壙2(13)	1.3以上×0.85×0.18	W-18°-N	小口穴あり
周溝墓３	？×8.5	N-12°-E	－	－	－	
周溝墓４	？×8	N-15°-E	－	－	－	
周溝墓５	－	周溝墓４と同	－	－	－	
周溝墓６	9×12	N-25°-E	墓壙３(13)	1.75×0.6以上×0.14	N-25°-E	
周溝墓７	13×13→14×16	N-16°-E	－	－	－	
周溝墓８	－	周溝墓９と同	－	－	－	
周溝墓９	9.5×12	N-15°-E	－	－	－	
周溝墓10	周溝墓9と同規模か	N-15°-E	土坑7(13)	1.5以上×1.25×0.32	N-15°-E	木棺内への堆積層あり
周溝墓11	－	N-24°-E	－	－	－	
周溝墓12	周溝墓7と同規模か	N-14°-E	土坑4(13)/土坑2	2.5×0.9×0.12	W-21°-N	
			土坑5(13)/土坑3	3.3×1.3×0.34	W-10°-N	
			土坑6(13)/土坑4	3.7以上×1.5×0.52	W-19°-N	
周溝墓13	－	周溝墓10と 同	－	－	－	
周溝墓14	－	N-17°-E	－	－	－	
周溝墓15	－	N-16°-E	墓壙9	2.2×1.3×0.36	W-13°-N	木棺痕跡あり
			墓壙10	1.3以上×0.6×0.13	W-26°-N	
			墓壙11	2.1×0.9×0.14	W-6°-N	
周溝墓16	14.5×14.5	N-26°-E	－	－	－	
周溝墓17	15×10	N-13°-E	－	－	－	
周溝墓18	12.5×9.5	N-3°-E	土坑26?(13)	1.5以上×1.1×0.2	W-8°-N	小口穴？
周溝墓19	－	－	－	－	－	
周溝墓20	9前後×12.5	N-25°-E	－	－	－	
周溝墓21	9×8	N-16°-E	墓壙20(13)	2.2以上×1.5×0.6	W-34°-N	木棺内堆積層が明瞭。小口穴あり
周溝墓22	8×10.5	N-16°-E	墓壙33(13)	1.96×1.05×0.16	N-30°-E	周溝内
周溝墓23	9×10.5	N-32°-E	墓壙17(13)	2.35×0.8～0.95×0.15	W-37°-N	木棺痕跡あり
			墓壙18(13)	2.15×0.7×0.08	W-30°-N	木棺痕跡(底板)。小口穴あり
			墓壙19(13)	3.23×1.53×0.6	W-43°-N	木棺痕跡。底板上面に水銀朱。石鏃
周溝墓24	－	N-19°-E	墓壙10(13)	0.86以上×0.46×0.15	W-21°-N	
			墓壙14(13)	2.1×0.7～0.83×0.07	W-19°-N	木棺痕跡(底板)か。石剣出土
			墓壙8	1.7×0.5×0.08	W-12°-N	木棺痕跡あり。石鏃６～８点出土
周溝墓25	9.5以上×？	N-8°-E	－	－	－	
周溝墓26	5×5	N-8°-W	墓壙9(13)	1.9×最大0.9×0.2	N-61°-E	
			墓壙11(13)	1.12×0.51×0.15	N-9°-W	
周溝墓27	6.5×6.5	N-25°-E	墓壙12(13)	2.0×1.0×0.25	N-30°-E	木棺痕跡あり
			墓壙13(13)	2.55×1.3×0.23	W-25°-N	木棺痕跡あり
			墓壙15(13)	1.0以上×0.72×0.07	N-4°-W	
			墓壙31(13)	1.7×1.1×0.2	N-25°-E	周溝内
			墓壙32(13)	2.24×1.24×0.5	N-25°-E	周溝内
周溝墓28	8.5×10	N-35°-E	墓壙16(13)	2.5×1.12×0.2	W-30°-N	周溝内か。木棺痕跡あり
			墓壙37(13)	1.35×0.5～0.55×0.14	N-33°-E	
周溝墓29	？×8	N-13°-E	－	－	－	
周溝墓30	？×9	N-35°-E	－	－	－	
周溝墓31	6×7	N-31°-E	墓壙21(13)	1.9×0.7×0.13	N-30°-E	周溝内
			墓壙22(13)	1.65×0.7～0.8×0.15	W-24°-N	
			墓壙23(13)	2.2×0.85×0.09	N-28°-E	周溝内か
			墓壙24(13)	2.2×0.95×0.27	W-29°-N	周溝内か。木棺痕跡あり
			墓壙25(13)	2.18×1.0×0.18	W-26°-N	周溝内か
周溝墓32	？×10	N-28°-E	－	－	－	

方形周溝墓			墓　　壙			
周溝墓No.	規模(東西×南北)	振れ	墓壙No.	規模(長×幅×深)	振れ	特徴・遺物
周溝墓33	11×14.5	N-30°-E	墓壙26(13)	2.05×0.7×0.15	W-37°-N	周溝内か。木棺痕跡あり
			墓壙27(13)	1.83×0.6×0.1	W-41°-N	周溝内か。木棺痕跡(底板)か。小口穴
			墓壙28(13)	2.25×1.0×0.1	N-38°-E	周溝内か。木棺痕跡(底板)か
			墓壙29(13)	1.37×0.56×0.14	W-29°-N	
			墓壙30(13)	2.75×1.35×0.35	N-30°-E	木棺痕跡あり。内面に水銀朱。
周溝墓34	11.5×13.5	N-30°-E	－	－	－	
周溝墓35	－	周溝墓22と同	－	－	－	
周溝墓36	－	周溝墓21と同	－	－	－	
周溝墓37	－	周溝墓22と同	－	－	－	
周溝墓38	9×6	周溝墓6と同	－	－	－	
周溝墓39	－	周溝墓9と同	－	－	－	
周溝墓40	－	－	－	－	－	
周溝墓41	?×6	W-22°-N	－	－	－	
周溝墓42	－	周溝墓22と同	土坑6	1.6×0.7×0.08	N-12°-E	

竪穴住居１（15年度）は調査区の東端にて検出されており、みつかった遺構のさらに東側に展開する可能性がある。時期は、報告書によると７世紀に下る可能性があるとしている。

全体において古墳時代の遺構は希薄である。これは、後世における大幅な土地開発により削平されたために遺構を確認できなかった可能性がある。

古代（図36）

今回の調査では、２区で塀１・塀２、５区で建物12（13年度）の東から３・４間目にあたる柱穴を確認した。今までの調査成果を見ると塀１は主軸を北から14°東に振っており、建物７（13年度）と近接することから建物７（13年度）に伴うものと考えられる。塀２については、主軸を北から5.5°東に振っており、建物５・６（13年度）と近接することから、建物５・６（13年度）に伴うものとした。

今回の調査成果を合わせると大尾遺跡では38棟の建物跡を確認しており、７谷（15年度）を境に東と西の丘陵でそれぞれ東が17棟、西が21棟建つ。13年度調査で確認された建物跡については、Ⅰ－１～３、Ⅱの４時期に分けて報告されており、15年度調査で確認された建物跡については、Ａ～Ｃの３期に分けて報告されている。今回は、これまでの調査をまとめて時期変遷を見ていきたい。

主に建物跡を検出している調査は平成13・15年度である。この２つの調査区にまたがって検出された遺構である塀１（13年度）・柵１（15年度）を中心にそれぞれの時期変遷を対応させた。時期は５期に分かれ、それぞれⅠ～Ⅴ期とした。また、どの時期に対応するか不明な遺構に対してはⅥ期とする。Ⅰ期に属する建物跡は３棟あり、全てが谷を挟んで東側に築かれる。Ⅱ期になると、17棟に増え、位置も調査区の全域におよび集落が拡大する。分布を見ると調査区の中でだいたい６箇所に分かれて建っている。Ⅲ期は11棟建ち、谷を挟んで東と西に分布している。建物20（13年度）は該当しないが、他の建物跡は調査区南西端と東端の２箇所にまとまって建つ。Ⅳ期になると１棟と数が減り、谷を挟んで南西端に建つ。確認された建物跡は１棟であるが、南に集落がある可能性がある。Ⅴ期は３棟確認されており、全て谷を挟んで西側に位置する。この３棟は調査区の北端と南端の２箇所に建つ。Ⅰ～Ⅴ期の変遷を見ると、谷を挟んで東側の丘陵に営まれていた集落が谷の西側まで広がり、谷の東側には建物が無くなり、西側へと集落を移動させていく。おそらくⅣ・Ⅴ期に集落は南下している可能性が考えられる。他にも古代の遺構として墓壙３基を検出している。３基の墓壙はいずれも平面形が隅丸方形で遺構の一

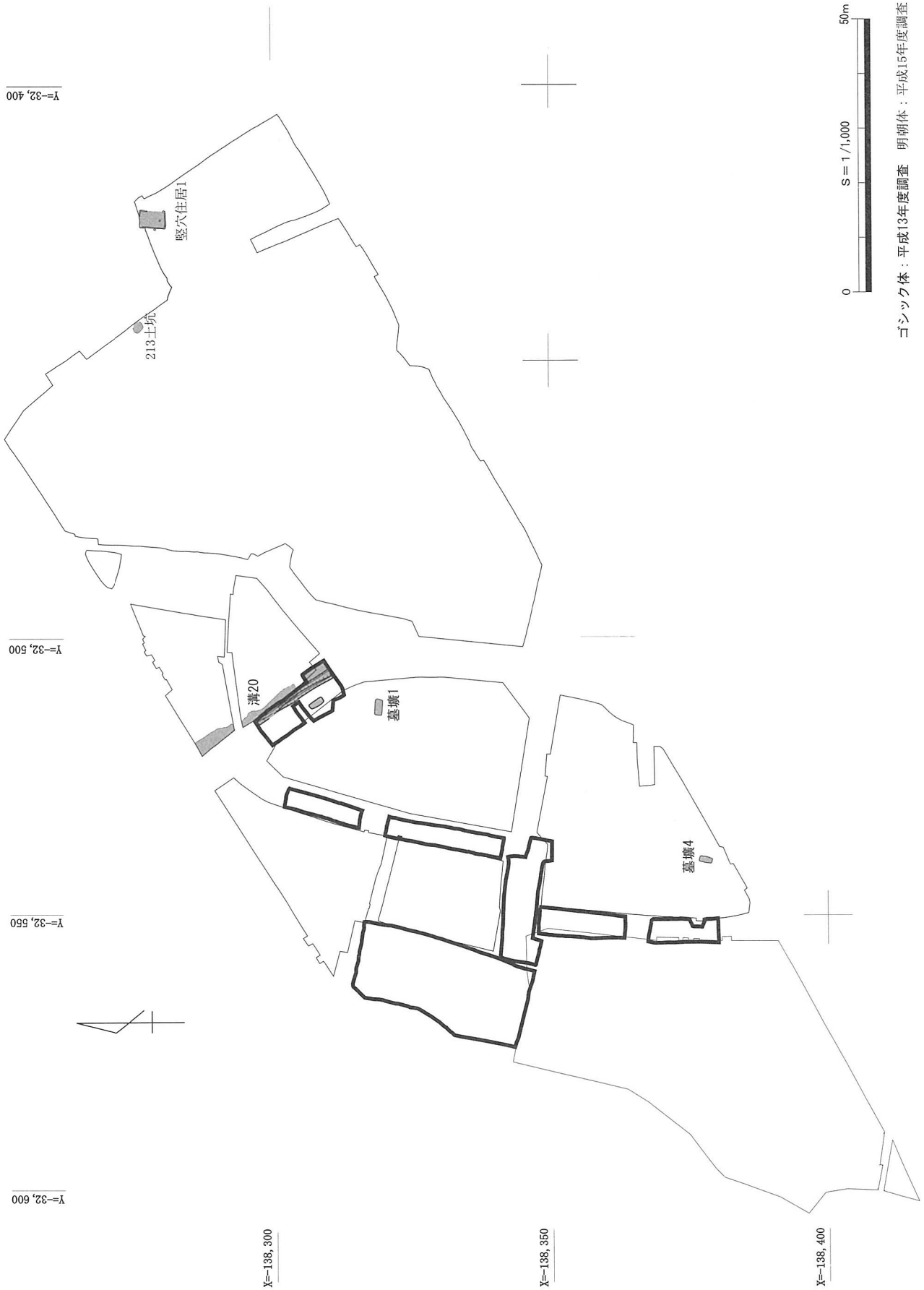


図35　古墳時代検出遺構図

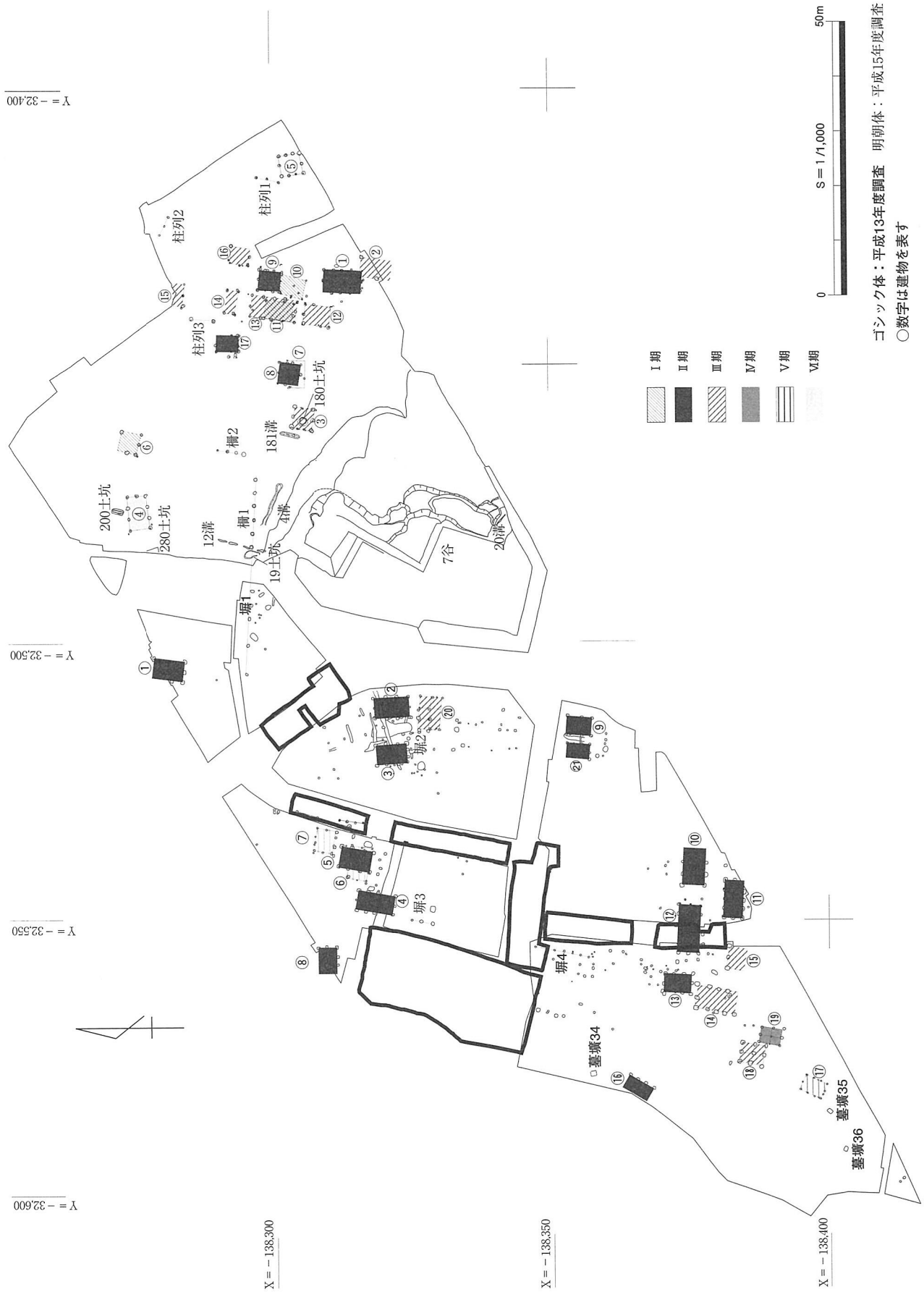

Y＝－32,400
Y＝－32,500
Y＝－32,550
Y＝－32,600
X＝－138,300
X＝－138,350
X＝－138,400
柱列1
柱列2
柱列3
180土坑
181溝
柵2
柵1
200土坑
280土坑
12溝
19土坑
4溝
7谷
20溝
塀1
塀2
塀3
塀4
墓壙34
墓壙35
墓壙36
Ⅰ期
Ⅱ期
Ⅲ期
Ⅳ期
Ⅴ期
Ⅵ期
0
S＝1/1,000
50m
ゴシック体：平成13年度調査　明朝体：平成15年度調査
○数字は建物を表す

図36　古代検出遺構図

部に被熱痕跡があり、埋土に炭化物を含む。遺物が出土していないが、建物跡との位置関係から集落廃絶後につくられたものと報告している。

これまでの調査から、７世紀から大幅な土地開発が行われ、弥生時代の周溝墓により凸凹になっていた土地を平坦地化し、集落を築いた様子が窺われる。また、この土地開発は丘陵上だけに限らず谷においても行われていたことが15年度調査で明らかになっている。

同時期の遺跡として、国指定史跡である高宮廃寺があげられる。高宮廃寺は、大尾遺跡から谷を隔てたすぐ西側の丘陵上に位置する。また、高宮廃寺周辺にひろがる高宮遺跡からは古墳時代から飛鳥時代にかけての建物跡や住居跡が確認されている。おそらく、高宮廃寺を中心として集落が展開し、大尾遺跡まで広がっていたものと思われる。

中世以降（図37）

今回の調査では、中世に属する遺構の検出は、３区で確認した柱穴群１のみである。今までの調査を含めると、他に５溝（15年度）や墓壙５・６・７・８（13年度）が検出された。今回検出した柱穴群は時期の特定できる遺物が含まれず、丘陵上部からの流れ込みの堆積と埋土が類似していることから中世以降とした。５溝（15年度）に関しては、溝の中から鎌倉時代の土師器・瓦器が出土している。溝は東西に延び、西の延長は谷に続く。溝は雨水を谷へ流す排水機能を果たしていたと報告されている。また、墓壙５・６・７・８（13年度）は平面形が円形または楕円形の小規模な穴である。うち墓壙５・６（13年度）には瓦質擂鉢が据えられており、完形で出土した。周辺に集落は確認されておらず、火葬墓の可能性があると報告されている。また、通常蔵骨器に骨を納め、蓋をして埋めるのであるが、それに対し大尾遺跡で確認した遺構は、火葬骨を地面の上に直接置き、その上に擂鉢を伏せているというものである。この地域特有の風習の可能性が高いと考えられており大変興味深い。

いままでの調査成果を見ると、大尾遺跡における中世の遺構の存在は希薄である。しかし、地形から確認された遺構の位置を見ると丘陵の斜面に集中していることから、実際には中世の遺構は調査で確認している以上に存在し、近世以降の土地開発で丘陵上部が削られ、消滅したものと考えられる。また、谷では堆積層に中世の遺物包含層および耕作土層が確認されている。谷地形を利用して、耕作地として利用されており、中世における、丘陵上での土地利用は居住域ではなく、墓域であったようである。

今回の調査では近世の遺構を確認しておらず、以前の調査で、耕作地に伴う溝を検出している。溝は、耕作地を区画する機能を持ち、また、南下していく丘陵に対し直行する形で段が形成されており、水利を考えて雛壇造成が行われ、丘陵一帯は耕作地へと姿を変えていく。

このように、弥生時代中期後半には、丘陵上の地形を利用して大規模な墓域を形成する。古墳時代においても遺構数は僅かではあるが、周溝墓の墳丘を利用し、墓地を築く。７世紀頃から大規模な土地開発が開始され、谷を削り、凸凹を平坦地化し集落を築き、集落廃絶後再び、火葬墓が造られ、墓域へと変化する。このような景観が中世まで続き、近世になると、再び雛壇造成を行い、耕作地へと土地利用が変わっていく。土地利用における大きな画期が弥生時代と古代と近世の３時期にあることが明らかになった。

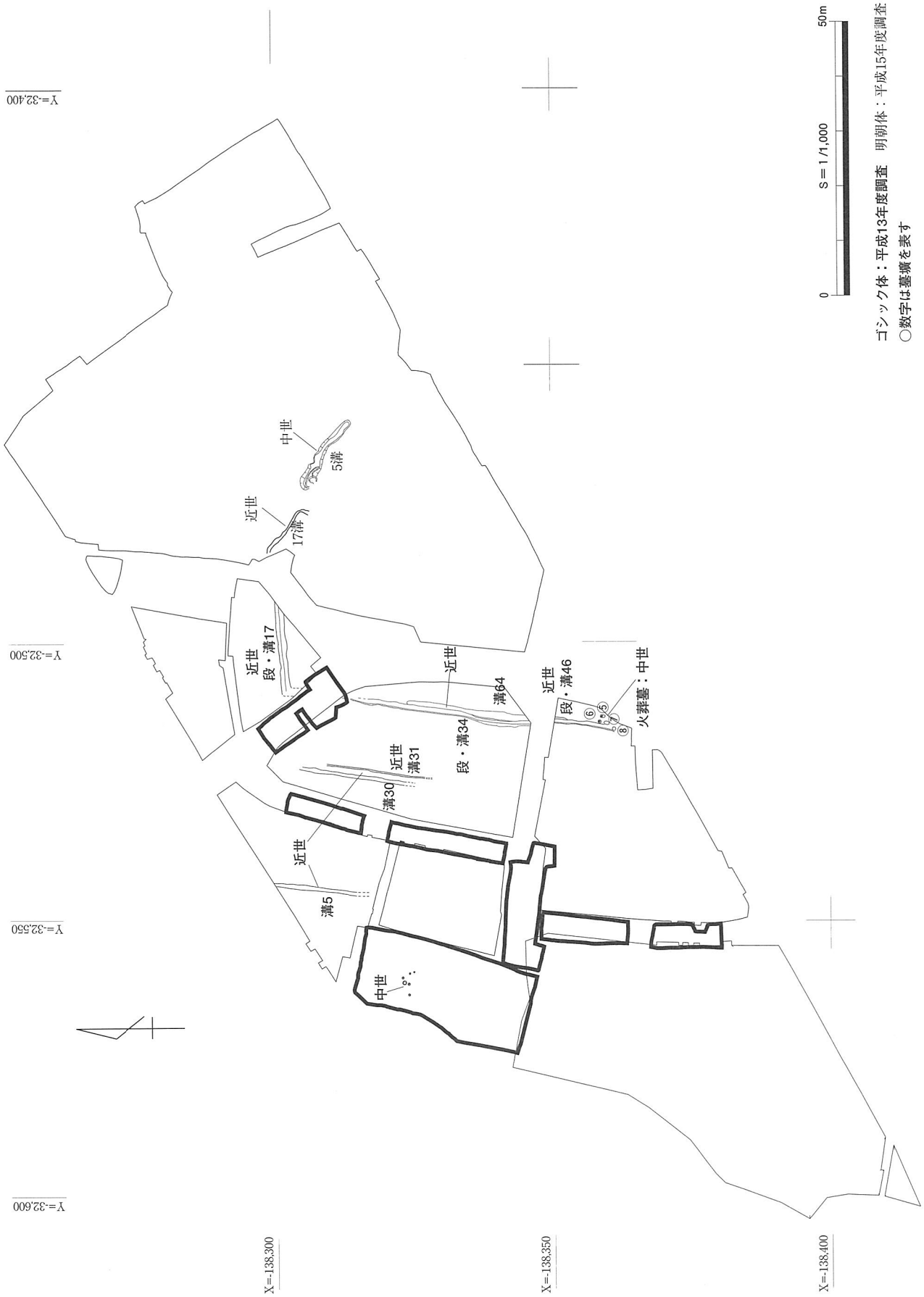


図37　中世以降検出遺構図

（註）

1．今回の調査で、墓壙３（13年度）は溝の西端であることが判明した。

2．本文の他に石鏃は墓壙４の上層で１点、墓壙19の上層で１点出土している。しかし、墓壙４は下層で６世紀末から７世紀初めの須恵器坏蓋が完形で出土したため、遺構時期が特定され、上層の石鏃は流れ込みによるものと考え、墓壙19上層出土の石鏃も上層からの出土によるものであるため流れ込みによる混入と考え、点数から除いた。

参考文献

（１）「小路遺跡」『讃良郡条里遺跡,小路遺跡,打上遺跡,茄子作遺跡,藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区』第77集　2002　財団法人　大阪府文化財センター

（２）『大尾遺跡』第92集　2003　財団法人　大阪府文化財センター

「大尾・太秦遺跡」『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』第93集　2003　財団法人　大阪府文化財センター

『大尾遺跡Ⅱ』第125集　2005　財団法人　大阪府文化財センター

（３）『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』　2003　（財）大阪府文化財センター

（４）濱田延充　「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『弥生文化博物館研究報告』第２集　1993　大阪府立弥生文化博物館

（５）『久宝寺遺跡発掘調査報告』　1986　財団法人　東大阪市文化財協会

（６）『山賀（その２）』　1983　財団法人　大阪文化財センター

『山賀（その３）』　1984　財団法人　大阪文化財センター

（７）『亀井・城山』　1980　財団法人　大阪文化財センター

『亀井遺跡』　1982　財団法人　大阪文化財センター

（８）『雁屋遺跡』　1987　四條畷市教育委員会

『雁屋遺跡発掘調査概要』　1994　四條畷市教育委員会

（９）「高宮八丁遺跡」『寝屋川市史』第一巻　1998　寝屋川市

（10）「太秦遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第49回）資料』　2004　財団法人　大阪府文化財センター

『太秦遺跡現地公開資料』　2004　財団法人　大阪府文化財センター

第３節　高宮遺跡〔高宮遺跡04-１〕

１．調査に至る経緯と調査方法（図38～40）

高宮遺跡04－１の発掘調査は、第二京阪道路建設に伴うもので、大阪府文化財センター京阪調査事務所、調査第一係が実施した。高宮遺跡は平成12年度の小路遺跡確認調査で古代、中世の遺構・遺物を確認、高宮遺跡として周知されている。高宮遺跡の調査は平成12年度から平成14年度にかけて約１万数千㎡の発掘調査を行い、本年度は道路及び里道の未調査部、実質約525㎡を調査した。調査は平成16年５月６日から平成16年９月30日の期間に実施した。調査の結果、高宮遺跡では里道部の調査で古墳時代から飛鳥時代の道路状遺構、奈良・平安時代の柱穴、土坑、中世の溜池状遺構を確認している。

調査は、既調査地内を横断する道路及び里道が対象であり、現状で一般通行に供されていた。このため調査に先立って、迂回路の設置と通行の切り替え、調査機器の搬入確保を目的にした進入路の設置を行った。また現有道路であったため、水道本管が埋設されており、電気、電話線が架設されていた。水道本管については地山面より深く配管されており、埋設状態のままで調査を行い、消火栓部分を調査対象から外した。電気・電話線に関しては電柱から半径２ｍを外して調査区を設定、土置き、工事の関係で南半部と北半部にわけて調査を実施した。掘削にあたっては、アスファルト、盛土を重機で除去、中

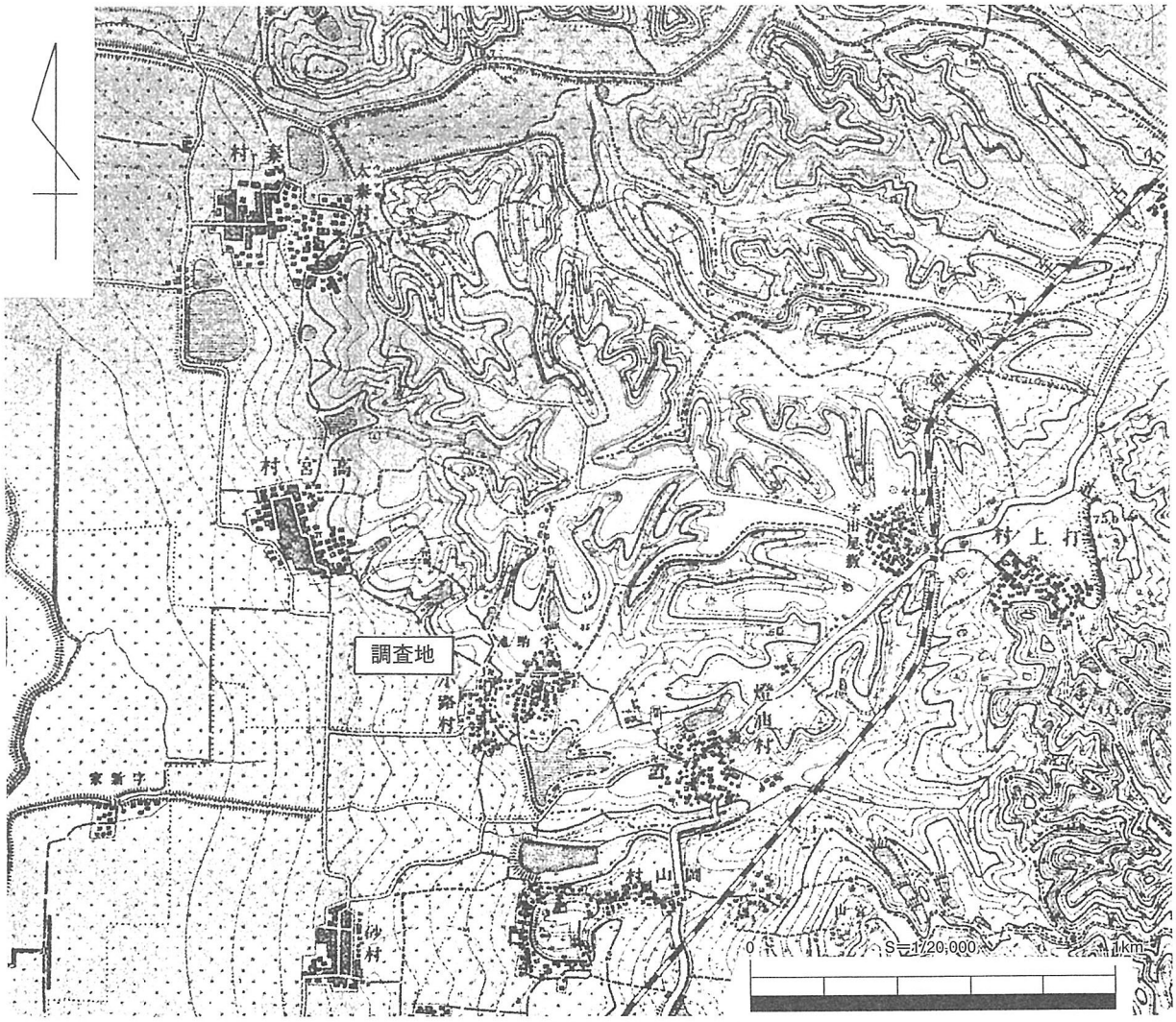


図38　周辺地形図　明治19（1886）年

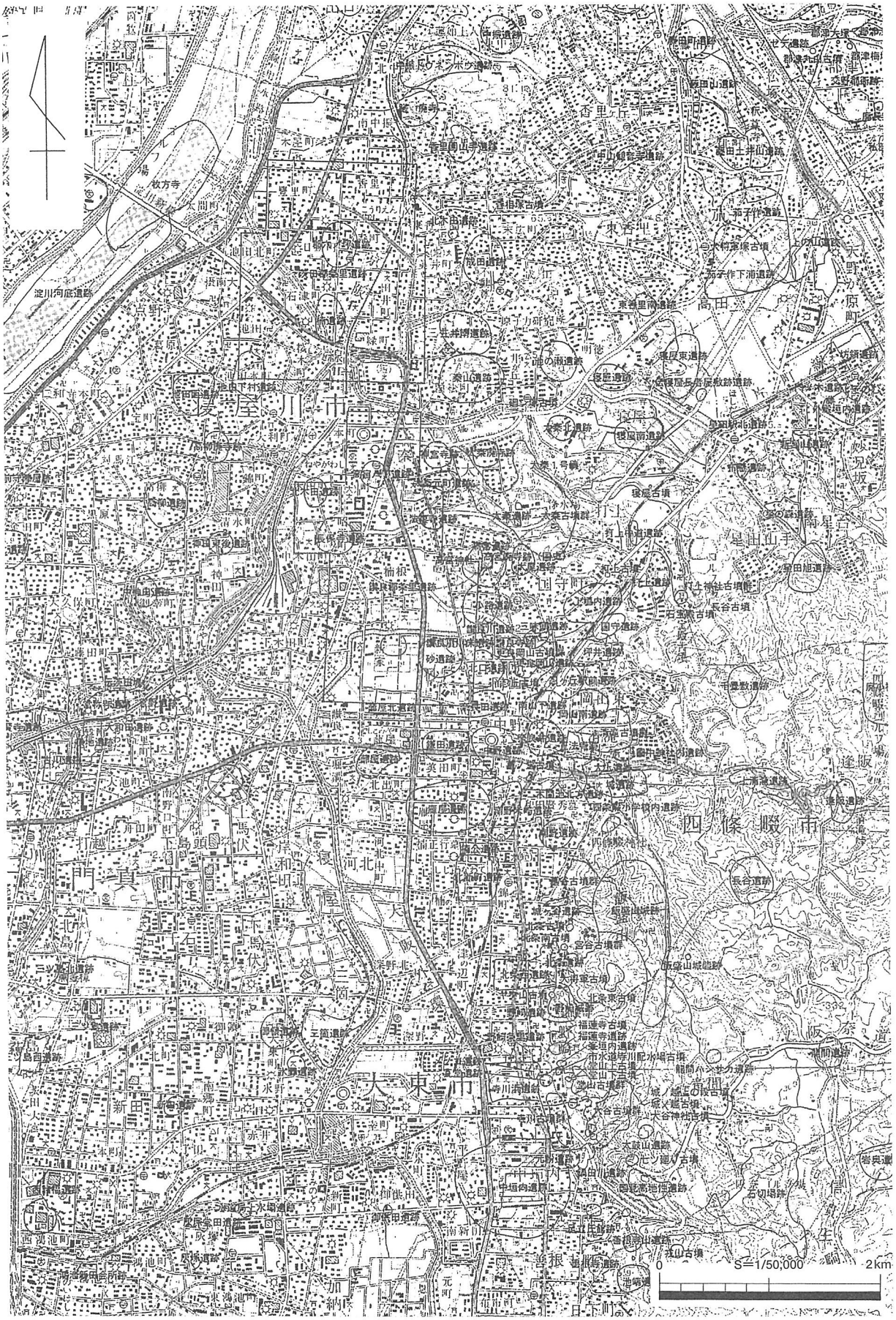


図39　周辺遺跡分布図

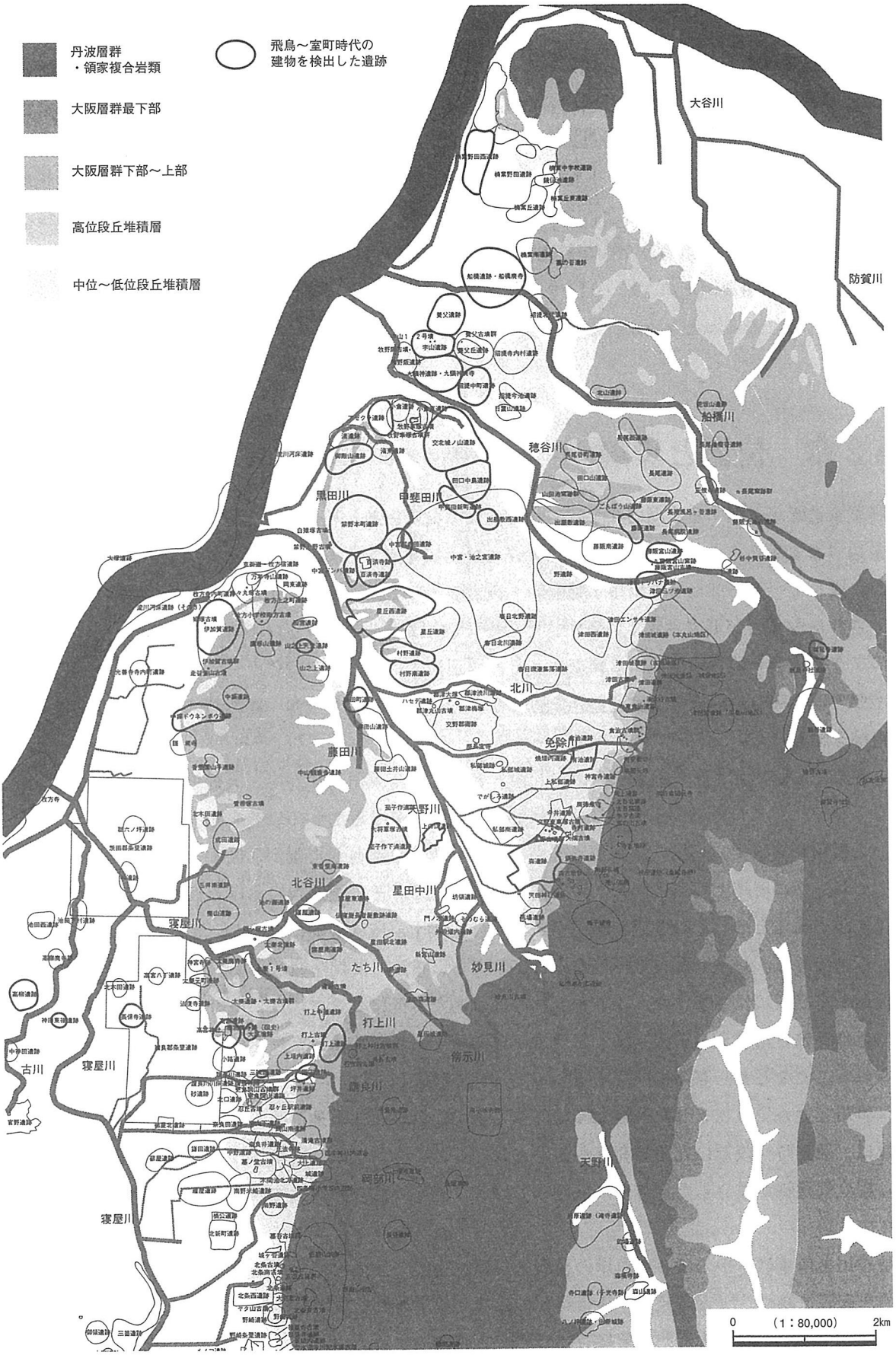


図40　北河内の遺跡立地

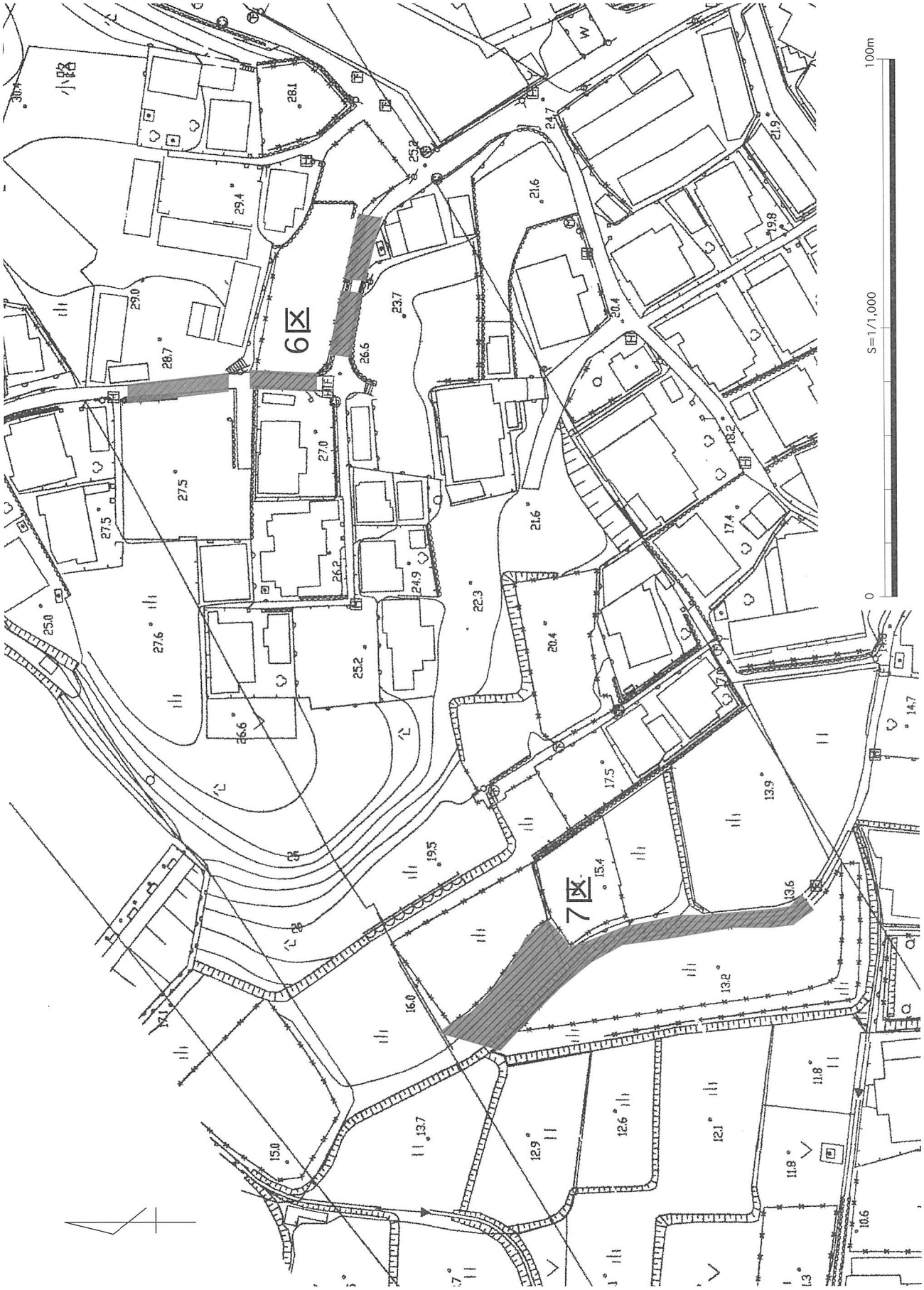


図41　調査位置図

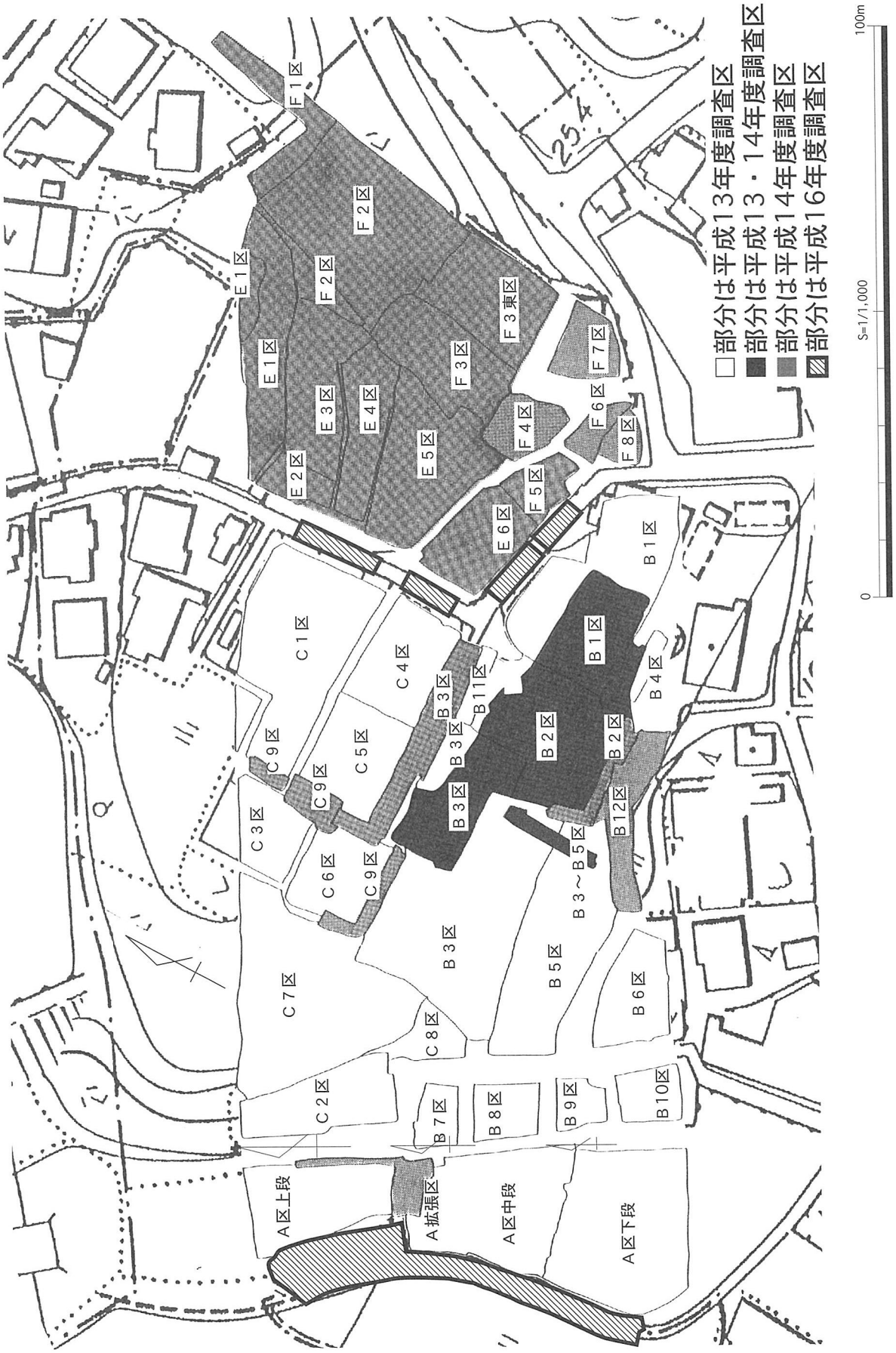


図42　既調査区との対照図

世の包含層の直上から最終遺構面である地山面までを人力で掘削して遺構・遺物を検出した。遺構等の測量・実測は、周辺の既往の調査が日本測地系に基づいた平面直角座標系（改正前）で行っていたため、図面整合を考慮して旧座標で実施した。平面実測、断面実測は100分の１、50分の１、20分の１、２分の１などの図化目的に適合した縮尺を設定して実施、遺物は10m間隔で区切った方形区画毎に、地点、層位、遺構名、日付を明記して取り上げ、登録番号を付した。

２．調査成果

基本層序（図43）

高宮遺跡６区・７区に関しては、大尾遺跡とは別の丘陵尾根に属しており、６区はこの尾根の南東側中腹部にあり、現代の道路工事により遺構面は削平されていた。７区はこの尾根の南西側の麓にあたっている。平地に近く斜面は緩やかであり、削平と盛土が容易なため、古墳時代以降、集落が繰り返しつくられている。一時的な断絶はあったであろうが集落は中世まで継続し、近世に至って耕作地化してい

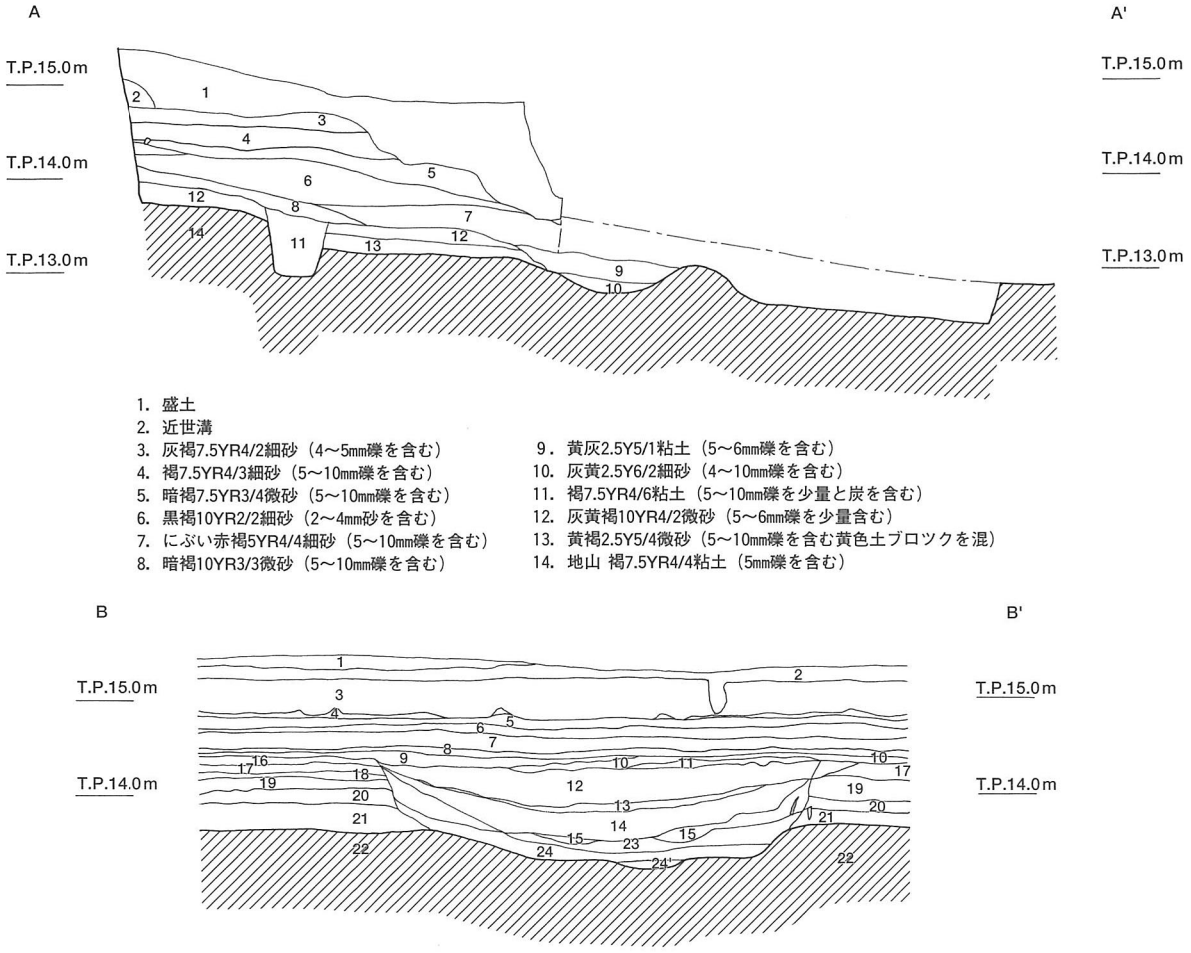


図43　土層断面図

る。このため古墳時代から中世にわたる整地、堆積が繰り返され、５～６層にわたる包含層が厚さ約0.7m近くに達する地区もある。

遺構（図44・45、図版16～20）

６区では現代の道路工事により削平されて遺構、包含層、遺物はまったく検出されなかった。

７区の遺構

１柱穴　調査区南側で検出。径0.5mの隅丸方形、深さは0.5mを測る。13年度A区下段１面の掘立柱建物を構成する柱穴とみられる。

２柱穴　調査区南側の壁際で検出した。径0.4m、深さ0.2mの円形で、13年度A区下段１面の柱穴群の西側で確認した。

３柱穴　同じく調査区南側の壁面部で検出した。円形で、径0.4m、深さ0.2mを測る。13年度A区下段１面の柱穴群の延長とみられる。

４柱穴　調査区中央部で検出した。隅丸方形の平面形を有し、径0.4m、深さ0.2mを測る。５土坑を切っている。これら以外に柱穴は北半部で15個認められた。包含層、整地層の途中で掘り込みが確認されたものと、地山面で確認されたものが、ほぼ半々である。飛鳥時代から平安時代の柱穴と推定される。

５土坑　調査区中央部の東壁近くで西半部分を検出した。平面は長楕円形で、幅0.8m、深さ0.3mを測る。13年度の調査ではこの土坑は検出されていない。

６溝　調査区中央部で検出した。南北方向の溝で、幅0.5m、深さ0.2mを測る。A区中段９・10面溝２に連続するものと認められる。

７溝　調査区中央部で検出した。東西方向で、幅0.5m、深さ0.3mを測る。西側は削平を受けて立ち消える。13年度調査A区下段２面溝６に繋がる溝とみられる。

８溝　同じく調査区中央部で検出した。東西方向の溝で、幅0.4m、深さ0.2mを測る。13年度A区下段２面の溝３の西側延長とみられる。西側は削平を受けて途切れている。

９溜池状遺構　北側調査区、中央北寄りで検出した。平面形はやや角張った円形を呈する。径５m、深さは検出面から0.7mを測る。底面の形状はボウル状に丸く凹む。滞水状態が継続したものか底面は青色に変色していた。下層と中層の堆積は緩やかなレンズ状堆積が観察できる。上層部は黄色土ブロックの混入がみられ、短期間で埋め戻されたと判断される堆積を有していた。埋土中から陶器破片、瓦器椀片等が出土した。瓦器椀から鎌倉時代後半に属すると考えられる。

20道路状遺構　北側調査区中央で検出した。山側の斜面を削り込み、平坦な道路面を造り出したもので、南東方向から北西方向に向かう。道路はゆるやかな蛇行が確認される。当時の路面部は後世の人為的削平により残存はしていないが当時の道路築造時に道路下部をつき固めした痕跡は以前の高宮遺跡の発掘調査で波板状遺構がいくつか検出、確認されている。今年度の発掘調査では道路状遺構に平行した浅い筋状凹みが数条確認されたが道路に関連する遺構か否かは定かではない。他には関連する遺構・施設は認められなかった。この道路状遺構の直上の包含層で須恵器台付長頸壺の胴体部の一部が一箇所に固まった状態で出土した。平成13年度調査のA区中段で検出された平坦面で波板状痕跡と両側面に溝を持つ道路状遺構の北西側に続く延長部分を検出したものである。

遺物（図46・47、図版20～22）

７区の出土遺物　包含層から古墳時代から古代の土師器壺、甕、杯、製塩土器等の破片、須恵器杯・壺・甕等の破片、溜池状遺構から瓦器椀、磁器等の破片が出土した。溜池状遺構出土の遺物は年代判定

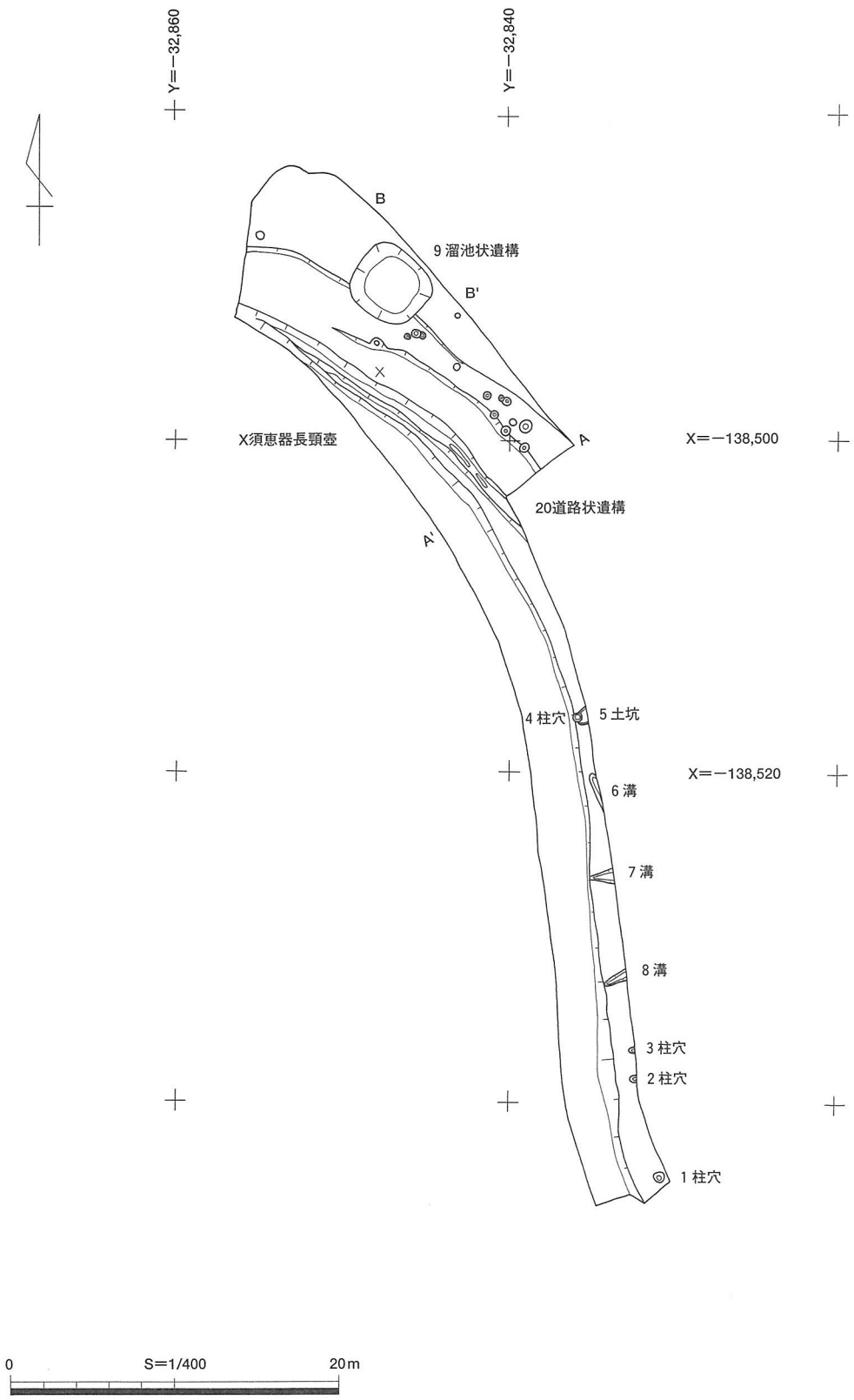

Y=−32,860
Y=−32,840
B
9 溜池状遺構
B'
X須恵器長頸壺
A
X=−138,500
20道路状遺構
A'
4 柱穴
5 土坑
X=−138,520
6 溝
7 溝
8 溝
3 柱穴
2 柱穴
1 柱穴
0
S=1/400
20m

図44　7区平面図

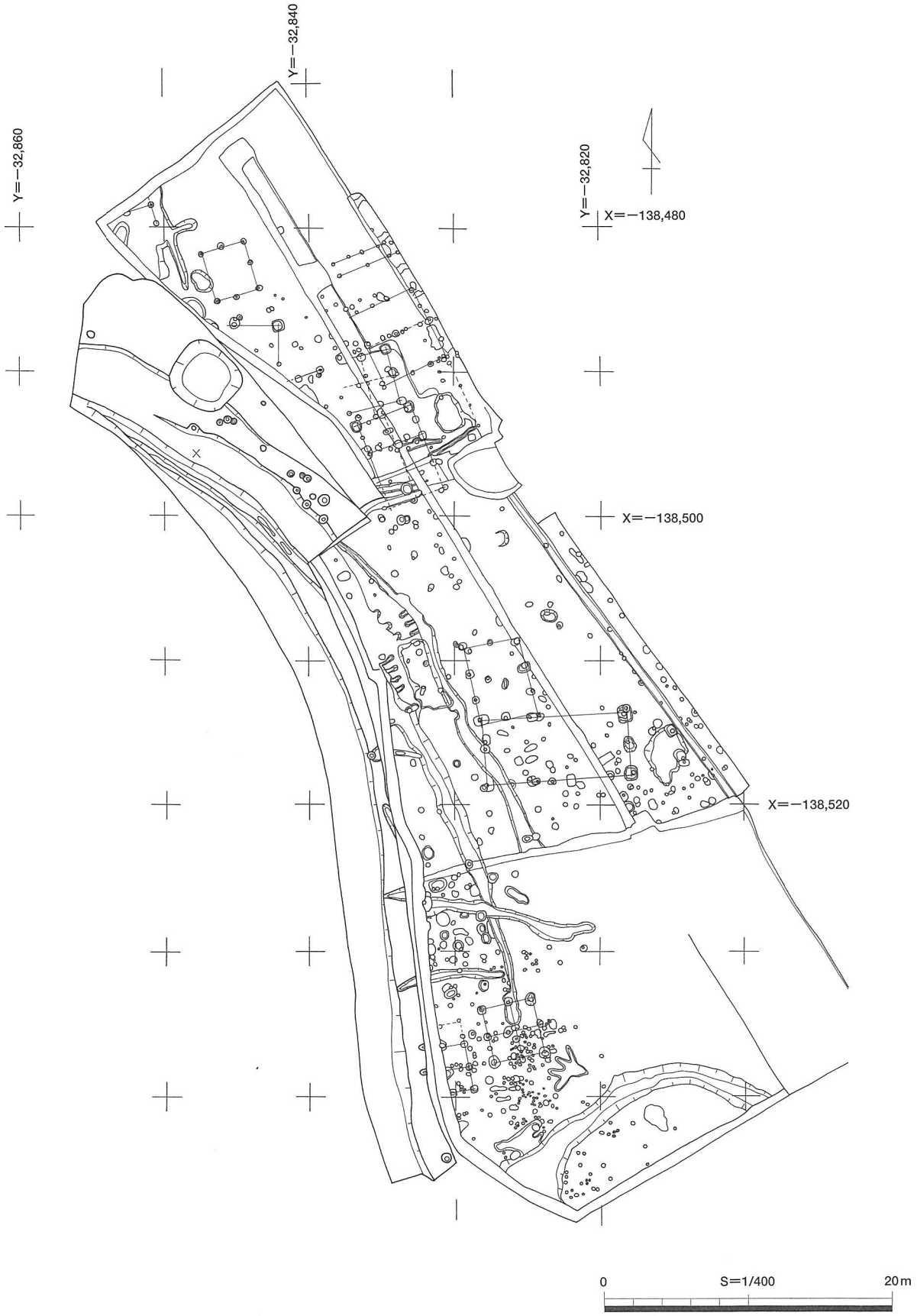


図45　既調査遺構との関連図

が可能であるが、その他の遺構から出土した遺物はいずれも破片でごく少量であり、図化し、年代判定できるものは存在しない。

1～24は須恵器破片で7世紀～8世紀代のものが多い。1は5世紀代の椀の可能性がある。18は台付長頸壺で口頸部、高台端部が欠失している。19は図の上面が平滑に摺られており高台付の壺状品を上下逆にした転用硯の可能性がある。25は4世紀頃の土師器壺の破片である。26～37は7～8世紀の土師器である。36は用途不明の土師質土器片である。29と30は製塩土器である（註1）。38は瓦質羽釜である。39は瓦器椀、40は白磁椀でこの2点は9溜池状遺構から出土した。瓦器椀の底部には僅かに高台が残っている。白磁椀は輸入品で平安時代に属する。瓦器椀は鎌倉時代終末期に属するものであろう。

3．小結

高宮遺跡では、7区で20道路状遺構を検出したが、これは平成13年度調査A区中段に検出した道路状遺構の北西への延長を検出したもので、斜面の高い部分を削り平坦地を造り出して道路としている。道路部の一部では筋状の小溝が認められた。これが道路状遺構に伴うものか否かは判然としない。この道路状遺構は既往の調査結果から判断すると飛鳥時代から奈良時代初めにかけて、段を埋め、整地されたと考えられ、今回の調査でもその整地土層の上面から柱穴が掘られていることが確認されている。
高宮遺跡は律令制下、河内国讃良郡の高宮郷に属し、「高宮寺」を造立した秦氏系氏族または高宮氏との関連が濃厚な遺跡である。

平成12年度から14年度の当センターの調査結果では古墳時代から飛鳥時代の竪穴住居跡29棟以上、道路状遺構、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱住居群、巨大な掘立柱倉庫群、木炭槨土壙墓等、平安時代から中世にわたる掘立柱建物、井戸、溜池、土壙墓等々、多様な遺構が数多く発見されている。今後の周辺の発掘調査により、さらに重要な成果がみられることを期待したい。

（註）
1. 高宮遺跡の今年度調査区から南西約150m、小路遺跡既往の調査で奈良時代の人面墨書土器等が出土している溝の続きを今年度調査した。その溝の中から内面に布目痕をもつ製塩土器破片が出土した。また、寝屋川市木田町他所在の長保寺遺跡からは2種類の製塩土器が出土している。

参考文献
『高宮遺跡』－遺構編－（財）大阪府文化財センター調査報告書第115集　2004　財団法人大阪府文化財センター
『寝屋川市史』第一巻　1998　寝屋川市

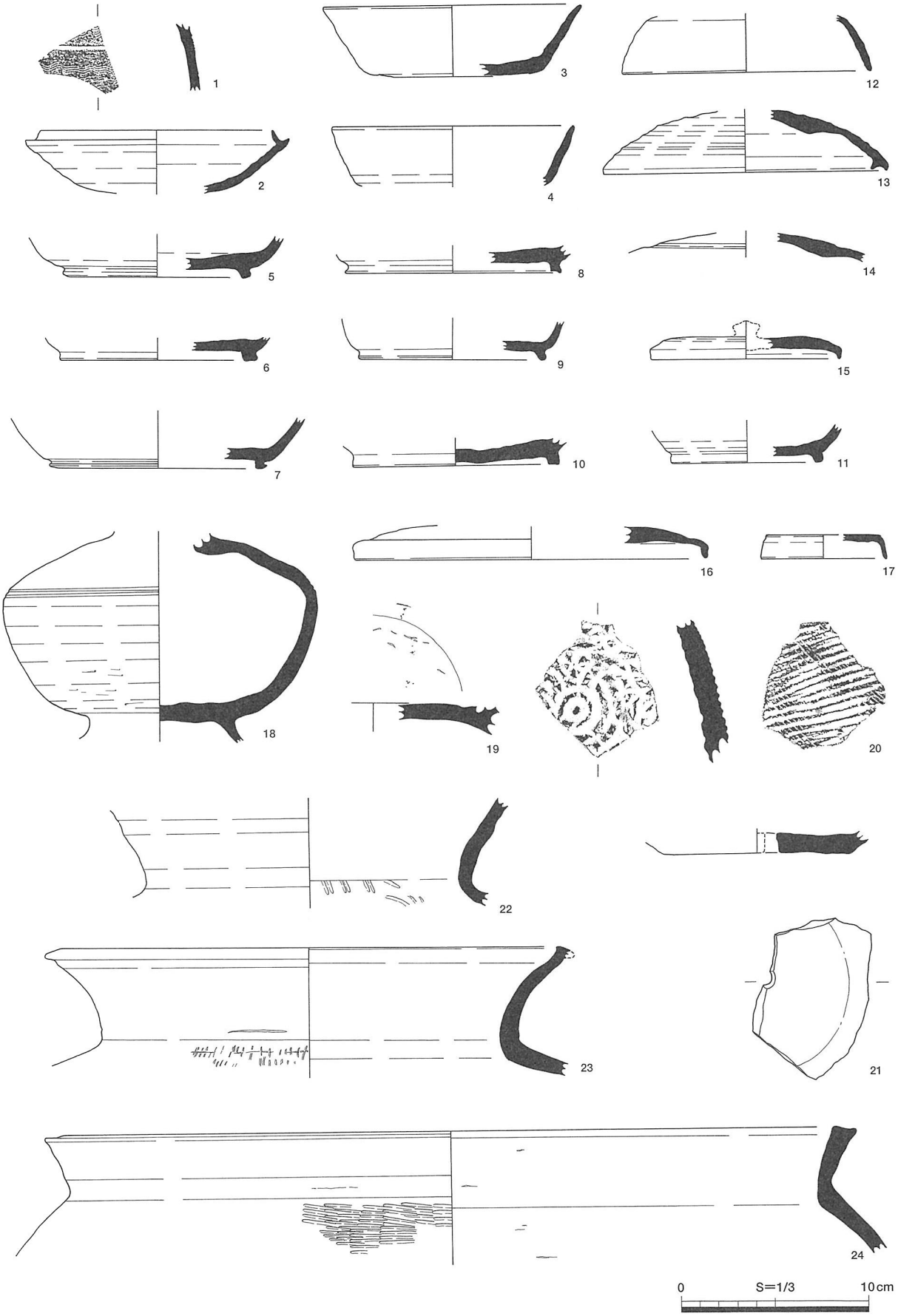


図46　出土土器実測図（1）

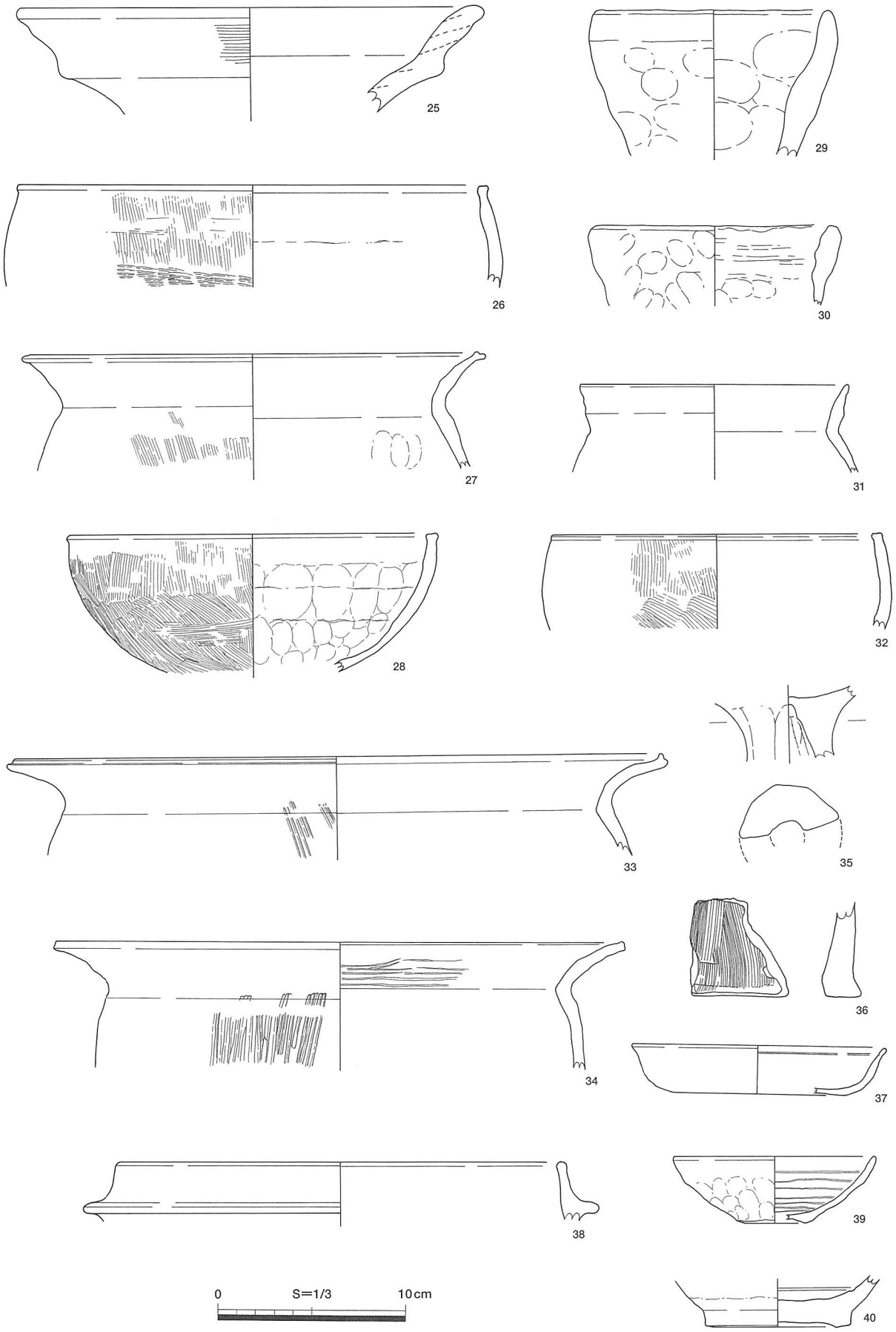


図47　出土土器実測図（２）

第3章　まとめ

このたびの調査は、過去の調査の隙間を埋めるものであった。しかしながら、小面積とはいえ以前の成果を追認するもの、変更をせまるものなど重要な成果をあげることができた。本書に掲載した太秦遺跡・太秦古墳群、大尾遺跡そして高宮遺跡は当地の歴史のみならず、弥生時代集落や古墳群の研究にも資するものであり、なおさらその成果は重要と言えよう。小範囲の調査をことさら大仰に位置づける気はないが、とりあえず今回の調査をまとめておきたい。

丘陵地は崩落や谷の埋没など自然要因による地形変化、また人為的な改変を受けることが多い。当地も例外でなく、中世以降の耕作地への転換そして近現代の宅地化などの影響を被っている。高宮遺跡では完全に削平されてしまっていた部分もあったが、幸い丘陵頂部付近の改変はすべてを削り取るほどではなく、各時代の遺構を確認することができた。

太秦遺跡・太秦古墳群の確認調査は、遺跡範囲の東端から東方にかけて行った。平成13年度の調査で発見し、太秦古墳群尾支群と名づけた古墳時代中～後期の古墳が構築された丘陵の東斜面から、さらに東方の丘陵地にあたる部分である。一部は宅地となり、他は竹林で改変されていたが比較的に旧状を残す部分であった。本調査では尾根筋にあたる３トレンチで６世紀代の須恵器が出土したものの、上層に含まれており、また周溝を確認することもできなかった。古墳が存在したことを否定することはできないが、少なくとも尾支群のように密に構築された状況ではなかったであろう。太秦古墳群のほぼ東縁にあたると考えておきたい。

また、前回調査で一部を検出し、前方後円墳と報告したＫ１号墳の南東側の調査を実施して方墳であると判断した。ただし、東側は斜面の崩落により大きく破壊され、現存する部分も少なからず改変の影響を受けている。群中に前方後円墳が含まれるか否かは看過できない問題であるが、本遺構を再検証することができない今、判断を留保することはできない。今回の調査状況から、Ｋ１号墳は方墳として改めて報告する。

大尾遺跡は宅地跡部分が追加され、今回の調査では比較的広範囲の調査をすることができた。遺跡は埋め立てられた谷を境に東側と西側に分けられる。今回の調査地区である西側丘陵は、尾根筋に沿って方形周溝墓が整然と並ぶ弥生時代中期後半の墓域となっている。削平され、周溝と墓壙の下部を残すのみで遺物が僅かしかないため、構築の単位や順位を明らかにすることはできない。ただ前章第２節の小結に記したように、周溝墓16の辺りが尾根筋中央にある墓道の途切れる位置になる。そして、その東側にある17、北西の24などを結ぶラインの南側は、北側の一群と比べ規模と配置にややばらつきが認められる。もちろん原地形の制約があるかも知れないが、調査地に立つ限り、このばらつきを生じさせるほどの地形変化はない。北東に谷を隔てる太秦遺跡の集落に近い北側の一群から造営が始まり、後に南側へと展開したことも十分に考えられるだろう。当センターが実施した太秦遺跡の弥生時代集落については報告書を作成中であり、現在のところ現地公開資料と調査担当者による速報でしか公表していないが、竪穴住居群の中でひときわ大型の円形竪穴住居が集中する地区を検出している。住居の大小と周溝墓の規模の大小を結びつけることは早計だが、関連する現象かも知れない。

また周溝墓の調査に関連し、特記すべき成果として６点余りの石鏃を検出した墓壙８がある。石鏃は木棺内にあり、いずれも破損している。墓から出土する石鏃については副葬とみるとらえ方もあるが、

本例は石鏃がいずれも破損しており、かつ接合するという状況から被葬者に射られて体内に残ったものである可能性が高い。戦死者か、儀礼的な殺人か、その評価は事例の蓄積と社会状況の復原をふまえた解釈に拠るしかないが、今後の研究に新しい資料を提供することができた。

大尾遺跡では古墳時代と推定する木棺墓も検出した。周囲に貼り付けた白色系粘土で棺を固定したものである。前章に紹介したように、前回の調査では粘土床の木棺墓を検出している。構造は異なるが、葬法は伝統習慣が色濃く残されるもので、ともに異地性の粘土を使用して木棺を固定していることに共通する意識を認めることができよう。出土遺物はなく、前回の報告に倣い古墳時代と見做しておくが、上記の太秦古墳群尾支群は周溝のみの検出で、主体部の掘方は検出していない。そのため、報告書では主体部が盛土内におさまることを指摘している。削平の程度にもよるかも知れないが、少なくとも近接する５・６世紀代の墓壙とはやや異なる様相を見せる。また墳丘が明確でなく、あるいは墳丘をもたなかったかも知れない。

今回検出した墓壙１は時期を示す遺物がない。したがって周囲の方形周溝墓と時期を異にするという根拠もない。ただ、周溝墓の主体部と様相が違うことは事実である。13年度調査の墓壙１が粘土床であり、棺が船材転用（あるいは割竹形木棺かも知れないが）であること、近辺の５世紀代の古墳群である太秦古墳群とは場所が離れ、主体部の造り方にも違いがあることなどから、とりあえず古墳時代前期ぐらいにとらえておきたい。いずれにせよ、立地及び構造とも今後の調査で注意しておく必要がある遺構である。

高宮遺跡は道路部分２箇所の調査を行った。東側の６区は奈良時代の大型総柱掘立柱建物群に近接した場所であったが、すでに大きく削られて舗装道路となっていた。西側の７区は里道として残されており、前回調査で検出した掘立柱建物や道路状遺構に連続する部分である。今回の調査でも、道路状遺構の続きを確認することができた。その時代について、今年度の調査では古墳時代から飛鳥時代という時期幅の中でとらえるしかなかったが、前回の調査成果では古墳時代後期後半の道路状遺構であることがわかっている。また、前回調査地区では、いわゆる波板状遺構を検出している。したがって、計画的に敷設された道であったことは間違いない。既報に、直線状にのびる道ではなく地形に沿っていることを記している。事実、本調査でも西側に緩やかにカーブする現在の里道に沿う線形で遺構を検出した。数度の普請を経ているようだが、飛鳥時代以降には存続しない。道の行き着く先は今後の周辺調査に俟つしかない。とりあえず、波板状遺構をもつ古墳時代の道路状遺構の一例であることを再度述べるに留めておきたい。